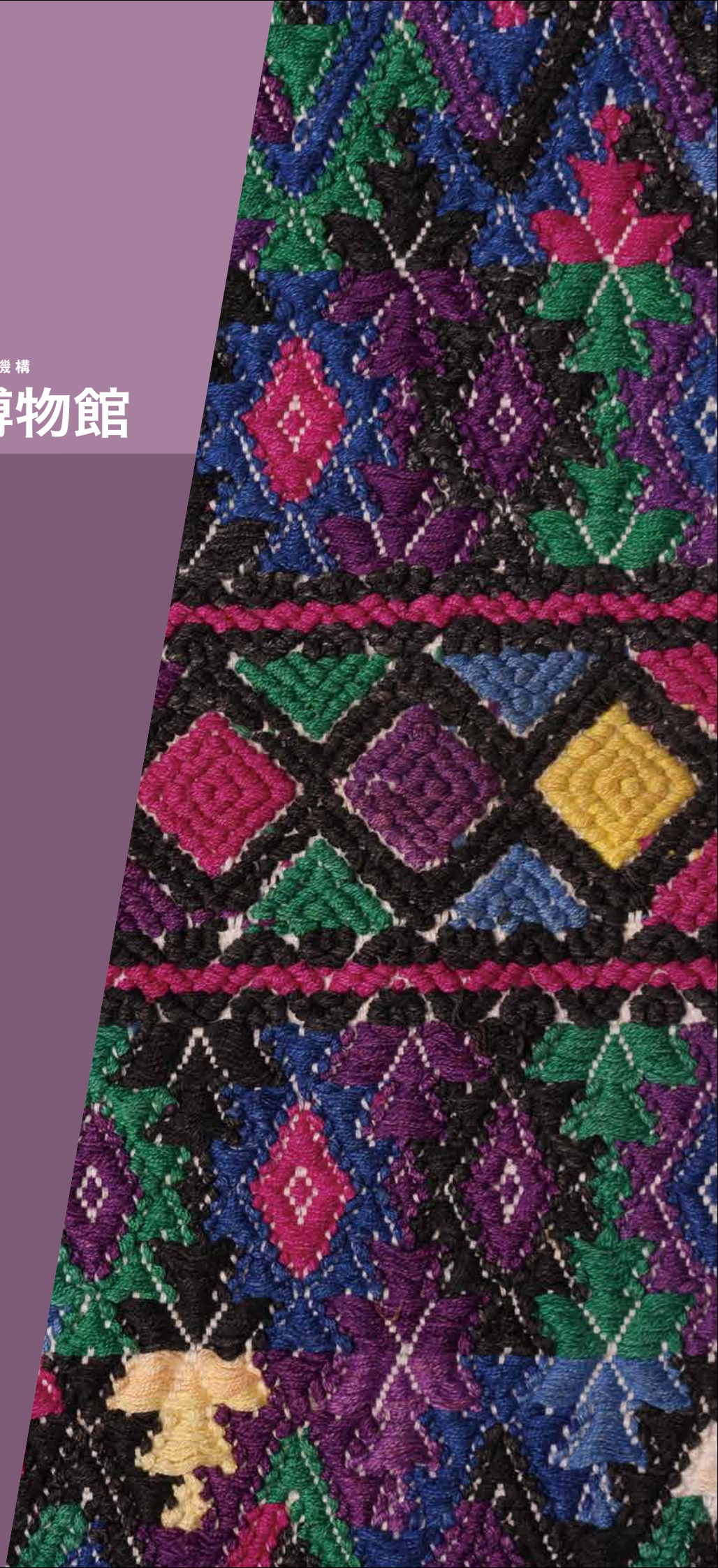
NIHU

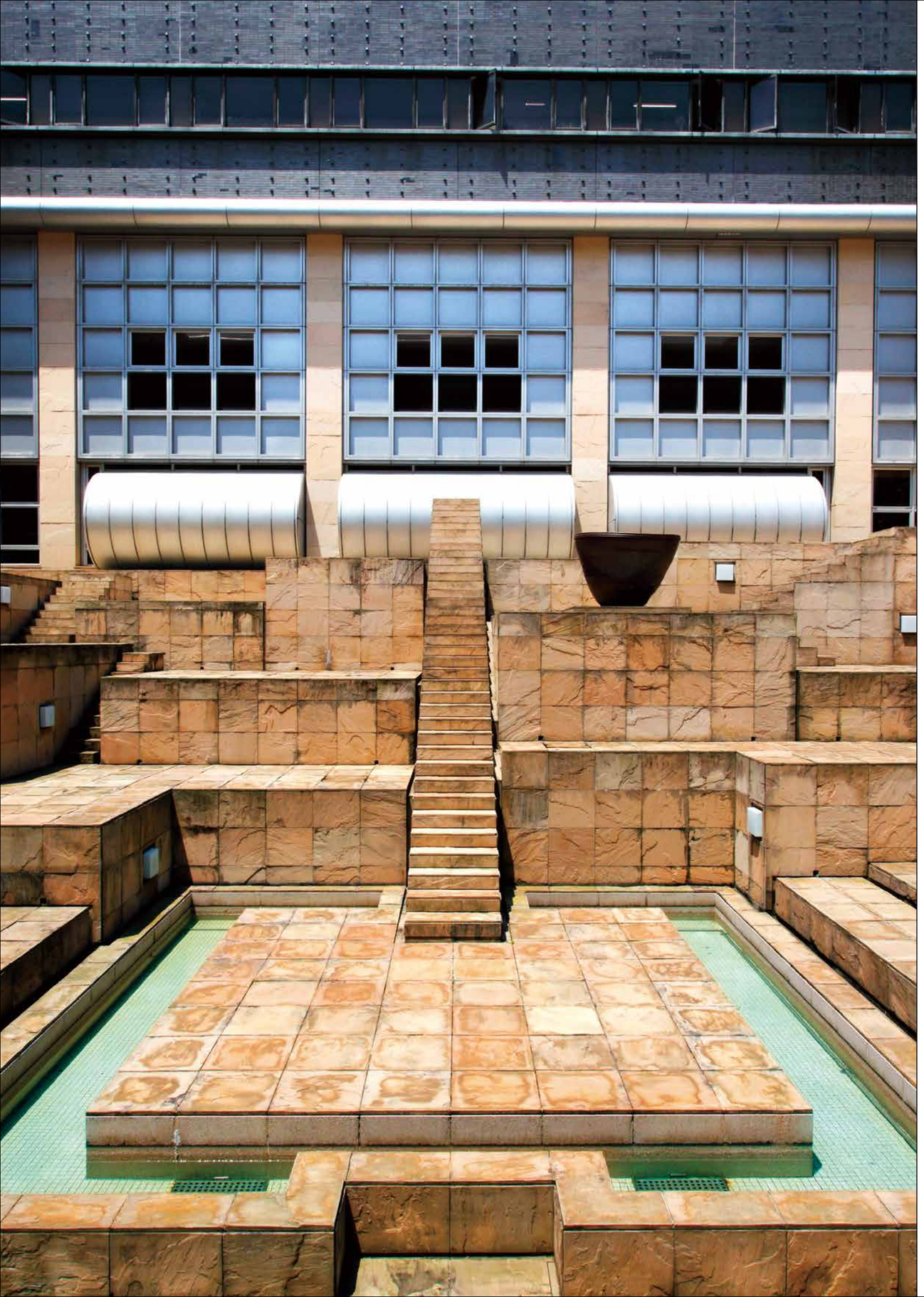
大学共同利用機関法人　人間文化研究機構

国立民族学博物館

要覧

2021





国立民族学博物館

要覧 2021

目次

ごあいさつ 1
設置目的と機能 2
組織 3
- 運営組織／研究組織 3
- 学術資源研究開発センター 7
- 国際研究統括室 7
- IR室 7

研究活動 8
博物館の共同利用 24
- 共同利用型科学分析室 24
- 図書室 25
- 資料 26
- 展示 28

国際協力 36
社会連携 37
データ集 41
- 沿革 42
- 歴代館長／名誉教授 43
- 施設 45
- 国内外の協定 46
- 資料とデータベース 48

人間文化研究機構 52
総合研究大学院大学 54
利用案内 56

表紙
「ウイビル」（グアテマラ）より

ごあいさつ

国立民族学博物館（みんぱく）は、文化人類学・民族学とその関連分野の大学共同利用機関として1974年に創設され、1977年に大阪・千里の70年万博跡地に開館しました。 来る2024年には創設50周年を迎えることになります。

みんぱくの研究者たちは、それぞれが世界各地でフィールドワークに従事し、人類文化の多様性と共通性、そして地球規模でのつながりの中での社会の動態について調査研究を続けています。 また、みんぱくには、総合研究大学院大学（総研大）文化科学研究科の二つの専攻、地域文化学専攻と比較文化学専攻がおかれています。 文化人類学関係の単体の教育研究機関として、世界全域をカヴァーする研究者の陣容と研究組織をもつという点で、みんぱくは世界で唯一の存在といえます。

一方で、みんぱくがこれまでに収集してきた標本資料、モノの資料は、現在、34万5千点を超えます。これは、20世紀後半以降に築かれた民族学コレクションとしては世界最大のものです。 また、博物館施設の規模の上で、みんぱくは、現在、世界最大の民族学博物館となっています。

みんぱくは、こうした世界にも類を見ない学術資源を基礎に、人類の文化と社会についての理解、自己と他者の認識についての理解を深め、人類共生のための指針を示す「グローバル人間共生科学の創成」をミッションとして、活動を続けています。

人類の文明は、今、数百年来の大きな転換点を迎えているように思われます。 これまでの、中心とされてきた側が周縁と規定されてきた側を一方的にまなざし、支配するという力関係が変質し、従来、それぞれ中心、周縁とされてきた人間集団の間に、創造的なものも破壊的なものも含めて、双方向的な接触と交錯・交流が至るところで起こるようになってきています。

そして、2020年、新型コロナウイルス感染症がほぼ同時に地球全体に広がるという事態に至って、私たちは、今、人類がこれまで経験したことのない局面にいやおうなく立ち会うことになりました。 その状況の中で、私たちが現在の生活を送るうえで当たり前と思って来た慣行やルール、とりわけ、人類が近代に入って作り上げてきたあらゆる制度や規範の成り立ちやありようが洗い出され、その意義と存在理由が改めて問われるとともに、社会に潜在していた差別意識が浮かび上がり、世界の新たな分断の状況も生まれてきています。

それだけに、人びとが、異なる文化を尊重しつつ、言語や文化の違いを超えてともに生きる世界を築くことが、これまでになく求められてきています。 今ほど、他者への共感に基づき、自己と他者の文化についての理解を深めるという、人類学の知、そして民族学博物館の役割が求められている時代はないと思います。

みんぱくでは、現在、館を挙げて特別研究「現代文明と人類の未来―環境・文化・人間」を実施しています。 この国際共同研究は、感染症を含めて人類の抱える課題を分野を超えて多角的に検証し、未来への指針を探ろうというもので、すでにその成果の国内外への発信が始まっています。

みんぱくでは、また、「フォーラム型情報ミュージアム」というプロジェクトを推進しています。 このプロジェクトは、みんぱくの所蔵する標本資料や写真・動画などの映像音響資料の情報を、国内外の研究者や利用者ばかりでなく、それらの資料をもともと製作した地域の人びと、あるいはそれが写真なら、その写真が撮影された現地の人びとと共有し、そこから得られた知見を広く共有することで、新しい共同研究や、共同の展示、コミュニティ活動の実現につなげていこうというものです。

これらの活動は、いずれも、かねてよりみんぱくがめざしてまいりました、さまざまな人びとの知的交流と発見、協働・共創の場、つまり知のフォーラムを、研究教育活動・博物館活動を問わず、これまで以上に徹底したかたちで実現しようとするものです。

皆さまの、ご協力、ご支援を、心からお願い申し上げます。

国立民族学博物館長

吉田憲司

設置目的と機能

設置目的

本館は、文化人類学・民族学に関する調査･研究をおこなうとともに、民族資料の収集・整理・公開などの活動をすすめ、世界の諸民族の社会と文化に関する情報を人々に提供し、諸民族についての認識と理解を深めることを目的としています。 なお、本館は、大学共同利用機関として、国立学校設置法の一部を改正する法律（昭和49年法律第81号）により設置され、平成16（2004）年4月に国立大学法人法（平成15年法律第112号）により大学共同利用機関法人･人間文化研究機構の一員として新たな出発をしました。

機能

研究所

本館は博物館機能をもった研究所です。文化人類学・民族学を核とし、その隣接諸分野の研究をおこない、我が国の文化人類学･民族学研究のセンターとしてその機能を十分に発揮すると同時に、研究の成果を出版その他さまざまな形で公開し、研究者コミュニティと一般市民への情報提供と研究広報をおこなっています。 本館の研究者は、文化人類学･民族学や言語学、生態人類学、考古学、民族技術、民族芸術などを専門とするスタッフで構成されています。

共同利用

本館は大学共同利用機関として、研究者コミュニティに支えられた共同研究をおこなう開かれた研究所です。 また、収集･保管する資料は研究のために広く利用されています。

情報センター

研究に基づき、諸民族の生活を知るための標本資料、諸民族の社会と文化に関する映像･音響資料、文献図書資料、HRAF（Human Relations Area Files）などの諸資料を収集し、幅広い研究のための基礎的な資料や情報の整備をおこなっています。これらに関する情報を、コンピュータを活用したデータベースの構築を通じて国内外の研究者へ提供しています。

展示公開

研究の成果を展示を通じて公開しています。 本館の研究者は、展示についての企画や実施にも参加しており、研究と展示の緊密な連携を基本方針としています。
本館展示は、世界の諸民族の文化と社会を大きく地域ごとに分けた地域展示と、音楽、言語などの人類文化に普遍的に見られる諸現象を対象とした通文化展示で構成されています。 また、急速に変化する世界の動きや、文化人類学･民族学の研究を迅速に展示に反映させるため、本館展示場内で企画展示も実施しています。
さらに、特定のテーマについて、総合的および体系的に紹介する特別展示を開催しています。

社会還元

最先端の研究成果を一般に公開するため、学術講演会、みんぱくゼミナール、みんぱくウィークエンド･サロン、研究公演、みんぱく映画会や種々のワークショップなどをおこなっています。 また、博物館学コースや技術研修などさまざまなプロジェクトを通して国際協力に貢献しています。

大学院教育

大学共同利用機関を基盤として設置された総合研究大学院大学の文化科学研究科（地域文化学専攻･比較文化学専攻、ともに博士後期課程）がおかれ、高度の大学院教育をおこない、創造性豊かな研究者を育成しています。 また、諸大学の要請に応えてそれぞれの大学院教育に協力し、また大学と連携して研究指導をおこなっています。

組織

運営組織 令和3年4月1日現在

館長	副館長（研究･国際交流･IR担当）	副館長（企画調整担当）	館長補佐	監査室 室長（併）
吉田憲司（よしだけんじ）	平井京之介（ひらいきょうのすけ） グローバル現象研究部教授	關 雄二（せき ゆうじ） 人類文明誌研究部教授	西尾哲夫（にしおてつお） グローバル現象研究部教授	島田健治（しまだけんじ） 管理部長

事務組織 令和3年4月1日現在

管理部 部長 島田健治（しまだけんじ）　**情報管理施設** 施設長（併） 關 雄二（せき ゆうじ）　副施設長（併） 島田健治（しまだけんじ）

総務課	研究協力課	財務課	企画課	情報課
課長 恒吉祐治（つねよしゆうじ）	課長 若松伸一（わかまつしんいち）	課長 前田一之（まえだかずゆき）	課長 包国征治（かねくにせいじ）	課長 北 條充敏（ほうじょうみつとし）

運営会議 令和3年4月1日現在

館長の要請により、本館の管理運営に関する重要事項について審議します。

外部委員

- 窪田幸子 芦屋大学長／神戸大学名誉教授
- 栗本英世 大阪大学大学院人間科学研究科教授
- 後藤 明 南山大学人文学部教授
- 佐野千絵 東京文化財研究所名誉研究員
- 出口 顕 島根大学法文学部教授
- 富沢壽勇 静岡県立大学副学長
- 豊田由貴夫 立教大学名誉教授
- 松田素二 京都大学名誉教授
- 山梨俊夫 国立国際美術館前館長

内部委員

- 宇田川妙子 国立民族学博物館 超域フィールド科学研究部長
- 鈴木 紀 国立民族学博物館 学術資源研究開発センター教授（総合研究大学院大学文化科学研究科 比較文化学専攻長）
- 關 雄二 国立民族学博物館副館長（企画調整担当）・情報管理施設長
- 園田直子 国立民族学博物館人類基礎理論研究部長
- 野林厚志 国立民族学博物館 学術資源研究開発センター長
- 平井京之介 国立民族学博物館副館長（研究･国際交流・IR担当）・国際研究統括室長
- 福岡正太 国立民族学博物館人類文明誌研究部長
- 三尾 稔 国立民族学博物館グローバル現象研究部長

外部評価委員会 令和3年4月1日現在

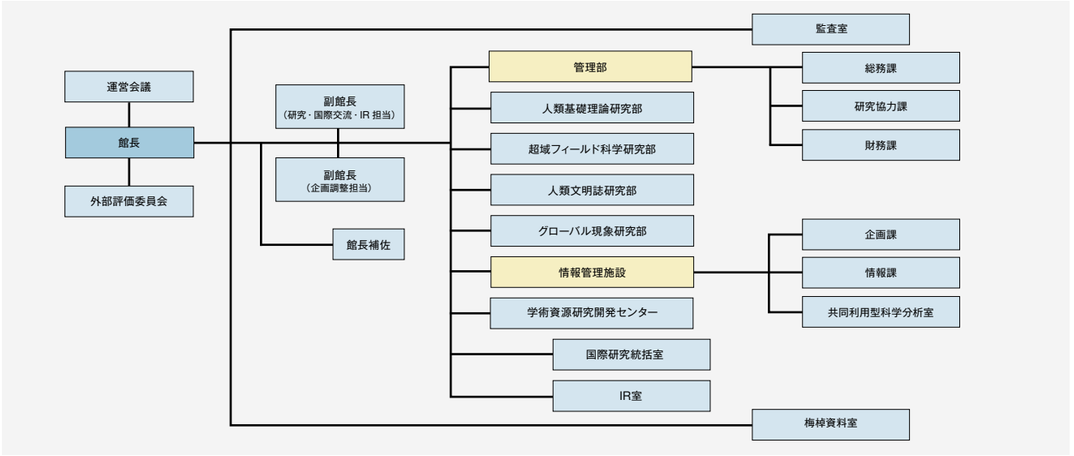
館長の要請により、本館における研究教育活動等の状況に関する点検･評価について審議します。

- 安達 淳 国立情報学研究所副所長
- 岡崎淑子 聖心女子大学前学長／名誉教授
- 田中雅一 国際ファッション専門職大学副学長
- 牧野耕司 独立行政法人国際協力機構JICA緒方研究所副所長
- 山本真鳥 法政大学名誉教授
- 市川光雄 京都大学名誉教授
- 小坂 肇 公益財団法人りそな アジア・オセアニア財団理事長
- 堀井良殷 公益財団法人関西・大阪21世紀協会顧問
- 水沢 勉 神奈川県立近代美術館長

評価

本館は、大学共同利用機関法人･人間文化研究機構の一員として文部科学大臣が進める6年間の中期目標に基づく中期計画及び年度計画を策定し、その実施状況について国立大学法人評価委員会の評価を受けています。
上記の評価のほか、本館独自で自己点検･評価を実施しており、本館の研究教育活動等の状況をまとめた「自己点検報告書」を作成しています。
また、外部評価委員会を設けており、委員の意見ならびに委員会の記録、「自己点検報告書」などの関係資料を教職員をはじめ関係者に広く知らしめるとともに、館運営の改善に活用しています。

組織構成図 令和3年4月1日現在



研究組織 令和3年4月1日現在

人類基礎理論研究部 部長 園田直子

人類科学の基礎分野を対象とする理論的研究の深化によって新たな学術的課題を抽出し、学融合的新領域を創出することを目的としています。

教授

菊澤律子
言語学・オーストロネシア諸語

園田直子
保存科学

笹原亮二
民俗学・民俗芸能研究

日髙真吾
保存科学

准教授

岡田恵美
音楽民族学・南アジア研究

丸川雄三
連想情報学・文化財情報発信

川瀬 慈
映像人類学

吉岡 乾
言語学・南アジア研究

助教

末森 薫
文化財科学・東洋美術研究

平野智佳子
文化人類学・オーストラリア先住民研究

超域フィールド科学研究部 部長 宇田川妙子

世界諸地域を対象とする地域エスノグラフィー的研究の深化によって新たな超域的研究基盤を確立し、人類学的地域研究の新領域を創出することを目的としています。

教授

宇田川妙子
南ヨーロッパ研究・性研究

林 勲男
社会人類学・オセアニア研究

樫永真佐夫
東南アジア文化人類学

MATTHEWS, Peter J.
先史学・民族植物学

韓 敏
社会人類学・中国研究

南 真木人
生態人類学・南アジア研究

新免光比呂
宗教学・東欧研究

准教授

太田心平
社会文化人類学・北東アジア研究

奈良雅史
文化人類学・中国研究

菅瀬晶子
文化人類学・中東地域研究

松尾瑞穂
文化人類学・南アジア研究

人類文明誌研究部 部長 福岡正太

現代の人類が直面する課題に関して、過去の事象から未来を見通す学際的アプローチによって未来文明を展望する新たな価値を創出することを目的としています。

教授

池谷和信
環境人類学・南部アフリカ研究

福岡正太
民族音楽学・東南アジア研究

齋藤 晃
ラテンアメリカ歴史人類学

山中由里子
比較文学・比較文化

關 雄二
アンデス考古学・ラテンアメリカ研究

准教授

伊藤敦規
社会人類学・アメリカ先住民研究

齋藤玲子
アイヌ・北方先住民文化研究

上羽陽子
民族芸術学・染織研究・手工芸研究

藤本透子
文化人類学・中央アジア地域研究

卯田宗平
環境民俗学・東アジア研究

グローバル現象研究部 部長 三尾 稔

現代の人類が直面する課題に関して、地域の事象から世界を俯瞰する学際的アプローチによってグローバル社会を展望する新たな価値を創出することを目的としています。

教授

鈴木七美
医療人類学・医療社会史

平井京之介
経済人類学・東南アジア研究

西尾哲夫
認識言語学・アラブ研究

三尾 稔
文化人類学・南アジア研究

信田敏宏
社会人類学・東南アジア研究

准教授

相島葉月
社会人類学・イスラーム学・中東研究

中川 理
文化人類学・ヨーロッパ研究

鈴木英明
インド洋海域史・スワヒリ社会研究

丹羽典生
社会人類学・オセアニア地域研究

助教

諸 昭喜
医療人類学・北東アジア研究

八木百合子
文化人類学・ラテンアメリカ地域研究

上記の各研究部は、第一超域（日本、東アジア、東南アジア、中央・北アジア）、第二超域（南アジア、西アジア、アフリカ）及び第三超域（ヨーロッパ、北米、中南米、オセアニア）を対象として調査・分析をおこなう研究スタッフからなる3つの研究ユニットを構成し、地球規模のパースペクティブによる研究戦略を遂行するものとなっております。
また、上記の各研究部による組織的研究力を強化し、共同利用・共同研究の面での機能強化を実現するために次の組織を設置しています。

学術資源研究開発センター センター長 野林厚志

学術資源の共同利用性を学際的かつ国際的に高めるための研究プロジェクトを立案し推進することを目的としています。

教授

飯田 卓
生態人類学・漁民研究

野林厚志
民族考古学・台湾研究

岸上伸啓（併）
文化人類学・北方文化研究

森 明子
中部ヨーロッパ文化人類学

鈴木 紀
開発人類学・ラテンアメリカ文化論

准教授

小野林太郎
海洋考古学・東南アジア地域研究

廣瀬浩二郎
日本宗教史・民俗学

島村一平
文化人類学・モンゴル地域研究

三島禎子
文化人類学・西アフリカ研究

寺村裕史
文化情報学・情報考古学

国際研究統括室 室長（併） 平井京之介

新領域の開拓のための共同利用型研究体制の基盤整備及び国際・国内戦略を立案し統括することを目的としています。

卯田宗平（兼）
人類文明誌研究部准教授

齋藤 晃（兼）
人類文明誌研究部教授

奈良雅史（兼）
超域フィールド科学研究部准教授

韓 敏（兼）
超域フィールド科学研究部教授

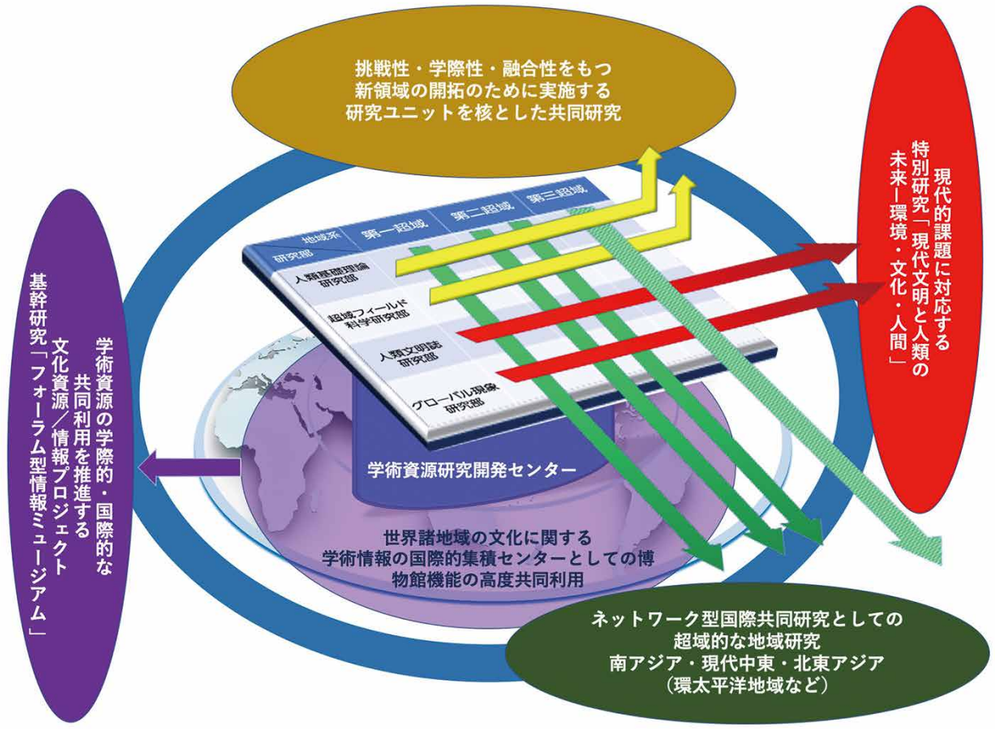
鈴木英明（兼）
グローバル現象研究部准教授

丹羽典生（兼）
グローバル現象研究部准教授

梅棹資料室 室長（併） 飯田 卓

丸川雄三（兼）
人類基礎理論研究部准教授

末森 薫（兼）
人類基礎理論研究部助教



客員教員

人類文明誌研究部

小長谷有紀（こながやゆき）
独立行政法人日本学術振興会監事
モンゴル、中央・北アジアの遊牧文化の人類学的研究

特別客員教員

人類基礎理論研究部

辻 邦浩（つじ くにひろ）
Kunihiro Tsuji Design
次世代型展示案内システムの構築

超域フィールド科学研究部

東 賢太朗（あずま けんたろう）
名古屋大学大学院人文学研究科准教授
グローバル化時代における「観光化／脱-観光化」のダイナミズムに関する研究

河合洋尚（かわいひろなお）
東京都立大学人文社会学部人間社会学科准教授
社会・文化人類学における中国研究の理論的定位――12のテーマをめぐる再検討と再評価

人類文明誌研究部

片岡 樹（かたおか たつき）
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授
海外フィールド経験のフィードバックによる新たな人類学的日本文化研究の試み

亀井哲也（かめいてつや）
中京大学現代社会学部教授
アフリカにおける文化資源と民族意識に関する文化人類学的研究

中生勝美（なかおかつみ）
桜美林大学リベラルアーツ学群教授
人類学／民俗学の学知と国民国家の関係――20世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス

中谷文美（なかたにあやみ）
岡山大学大学院社会文化科学研究科教授
伝統染織品の生産と消費――文化遺産化・観光化によるローカルな意味の変容をめぐって

水越 伸（みずこし しん）
東京大学大学院情報学環教授
メディア人類学の理論的、思想的、方法論的検討

佐川 徹（さがわ とおる）
慶應義塾大学文学部准教授
統治のフロンティア空間をめぐる人類学――国家・資本・住民の関係を考察する

グローバル現象研究部

森見登美彦（もりみとみひこ）
作家
人類妄想進化論―地球社会におけるファンタジーの現代的役割

山 泰幸（やまよしゆき）
関西学院大学人間福祉学部教授
グローバル時代における「寛容性／非寛容性」をめぐるナラティヴ・ポリティクス

田沼幸子（たぬまさちこ）
東京都立大学人文社会学部准教授
ネオリベラリズムのモラリティ

内藤直樹（ないとうなおき）
徳島大学大学院社会産業理工学研究部准教授
カネとチカラの民族誌:公共性の生態学にむけて

西 真如（にしまこと）
広島大学大学院人間社会科学研究科准教授
心配と係り合いについての人類学的探求

学術資源研究開発センター

大西秀之（おおにしひでゆき）
同志社女子大学現代社会学部教授
沙流川調査を中心とする泉靖一資料の再検討

風間計博（かざまかずひろ）
京都大学大学院人間・環境学研究科教授
オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的研究

大坂 拓（おおさかたく）
北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究職員
近現代におけるアイヌの物資文化の変容に関する研究

山口未花子（やまぐちみかこ）
北海道大学文学研究院准教授
「描かれた動物」の人類学　―動物×ヒトの生成変化に着目して

外国人研究員

Ruan Yunxing（ゥン ウンセイ）
浙江大学教授（中国）
令和3年2月1日～令和3年11月20日
デジタルインテリジェント時代の文化遺産とコミュニティ：日本と中国における文化遺産の比較研究

Yu Pei-lin（ユウ ペイリン）
ボイジー州立大学特任准教授（米国）
令和3年11月1日～令和4年4月30日
進化論的視座からみた東アジアならびに島嶼地域オーストロネシア系諸集団の生業領域

※令和3年度在籍または招聘予定（令和3年4月1日現在）の者。
　アルファベット順。

機関研究員

上畑 史（うえはたふみ）
評価・IRにかかる支援業務

大谷育恵（おおたにいくえ）
文化資源を活用した研究情報の発信、普及の理論と実践に関わる調査・研究

金 悠進（きむゆじん）
フォーラム型情報ミュージアムを中心とした学術情報の共同利用にかかる支援業務

プロジェクト研究員

石山 俊（いしやましゅん）
写真資料のデジタル化作業および著作権処理業務

河村友佳子（かわむらゆかこ）
文化資源計画事業「有形文化資源の保存・管理システム構築」に係る補助業務

小林直明（こばやしなおあき）
写真資料のデジタル化作業および著作権処理業務

相良啓子（さがらけいこ）
「コミュニケーション共生科学研究の創生」プロジェクトにかかる業務

橋本沙知（はしもとさち）
文化資源計画事業「有形文化資源の保存・管理システム構築」に係る補助業務

人間文化研究機構 推進センター研究員

南アジア地域研究拠点

茶谷智之（ちゃやともゆき）
特任助教

竹村嘉晃（たけむらよしあき）
特任助教

北東アジア地域研究拠点

辛嶋博善（からしまひろよし）
特任助教

現代中東地域研究拠点

黒田賢治（くろだけんじ）
特任助教

人間文化研究機構 総合情報発信センター研究員

人文知コミュニケーター

神野知恵（かみのちえ）
特任助教

学術資源研究開発センター

設置目的

学術資源研究開発センターは、本館が所蔵する学術資源の学際的かつ国際的共同利用性を高度化することを目的として、平成29年4月1日に設置されました。

学術資源研究の開発

国立民族学博物館には、約34万5千点の標本資料や約7万点の映像・音響資料、約67万冊の書籍、本館の所蔵資料をはじめ、多様な研究資料や写真資料、研究成果に関連するデータベース、文化人類学者・民族学者が残したフィールドノートや調査資料からなる民族学研究アーカイブズ等があります。これらは人類の文化や活動に関わる文化資源であり、人類の過去、現在、そして未来を考えるための貴重な学術資源でもあります。 本館では、これらの学術資源に関する研究成果や情報を「フォーラム型情報ミュージアム」とよばれるデータベースや、特別展・企画展・巡回展など多様な媒体を利用して公開するなど、学術資源の共同利用性を学際的かつ国際的に高めるプロジェクトを実施しています。 本センターでは、これらの研究プロジェクトを支援するとともに、新たに立案し、推進します。

令和2年度成果

令和2年度には、「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアム構築」プロジェクトの開発型プロジェクト3件と強化型プロジェクト8件の推進を支援するとともに、国際ワークショップ「Fishing and Material Culture in Maritime Asia」を開催しました。また、特別展「先住民の宝」、「復興を支える地域の文化――3.11から10年」や梅棹忠夫生誕100年記念企画展「知的生産のフロンティア」、巡回展「驚異と怪異――モンスターたちは告げる」（兵庫県立歴史博物館）、共催展 「佐々木高明の見た焼畑――五木村から世界へ」（五木村歴史文化交流館）、「梅棹忠夫生誕100年記念 知的生産のフロンティア」（京都大学総合博物館）などの準備と開催を支援しました。また、学術資源の共同利用性の高度化のための研究を実施しました。

令和3年度事業

令和3年度には、おもに3つの事業を展開します。

フォーラム型情報ミュージアム構築プロジェクトの研究推進と支援

本館では、平成28年度より人間文化研究機構の機関拠点型基幹研究プロジェクト「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアム構築」を実施しています。 令和3年度には、「中央・北アジア資料」や「東南アジア資料」などの開発型プロジェクトと「日本の津波石碑資料」、「セネガル民族映像資料」や「アジアの焼畑資料」などの強化型プロジェクトを実施します。 本センターでは、標本資料名の統一化・多言語化などについて研究するとともに、データベースの構築や編集、発信などに関して各プロジェクトの推進を支援します。

特別展・企画展・巡回展プロジェクトの研究推進と支援

本館では、学術資源やそれらに関連する研究成果を公開するために、特別展や企画展、巡回展を実施しています。 令和3年度には、特別展「復興を支える地域の文化――3.11から10年」や「ユニバーサル・ミュージアム――さわる！“触”の大博覧会」、「邂逅する写真たち――モンゴルの100年前と今」、企画展「躍動するインド世界の布」、「佐々木高明の見た焼畑－五木村から世界へ－」（仮称）、巡回展「子ども／おもちゃの博覧会」（島根県立古代出雲歴史博物館）、「ビーズアイヌモシリから世界へ」（国立アイヌ民族博物館）などを実施します。 本センターでは、これらの展示をおこなうための研究を進めるとともに、実施するための支援をおこないます。

学術資源の共同利用性の高度化に関する研究

令和3年度には、いかにすれば本館の学術資源の学際的・国際的な共同利用化が進展し、大学教育や学術研究、知識の一般社会への普及、文化の担い手による文化の創成等に効果的に貢献できるかについて研究します。

国際研究統括室

設置目的

国際研究統括室は、各研究部ならびにセンターによる組織的研究力を強化し、共同利用・共同研究の面での機能強化を図るために、旧研究戦略センターと旧国際学術交流室が担ってきた国内および海外との共同研究・共同利用に係る研究戦略機能を統合的に引き継ぎ、新領域の開拓のための共同利用型研究体制の基盤整備及び国際・国内戦略を立案し統括することを目的として、平成29年4月に設置されました。 具体的には、共同利用型研究プロジェクトの実施体制の改善、学術交流協定（国内外）締結方針の策定と締結、海外研究動向調査、外部資金に関する情報収集と情報提供など、本館がより戦略的かつ組織的に国際的な研究連携や共同研究を推進していくために必要な活動をおこなっています。

IR室

設置目的

IR（インスティテューショナル・リサーチ）室は、本館の研究、教育等に関する活動についてのデータを収集・分析し、これら活動における計画・立案及び意思決定に活用することにより、館の運営機能の強化・改善に資することを目的として、平成28年4月に設置されました。
この目的を達成するために、（1）情報の収集及び公開、（2）情報の分析及びその結果の公開、（3）情報収集・分析結果をもとにした改善案の提案等、といった業務をおこなっています。
本館は、大学共同利用機関法人・人間文化研究機構の一員として文部科学大臣が進める6年間の中期目標に基づく中期計画及び年度計画を策定し、その実施状況について国立大学法人評価委員会の評価を受けています。また、本館独自で自己点検・評価を実施しており、本館の研究教育活動等の状況をまとめた「自己点検報告書」を作成しています。 IR室はこれらの点検・評価等において情報の収集及び分析、取りまとめ等を担っています。

研究活動

特別研究

特別研究は、平成28年度から始まった第3期中期目標期間の6年間を通じて、「現代文明と人類の未来―環境・文化・人間」を統一テーマに、現代文明が直面する喫緊の諸課題に対して解決志向型のアプローチにより実施する国際共同研究です。
近現代のヨーロッパに発する科学・技術、政治・経済制度、社会組織、思想などからなる西欧文明は、世界の多くの国と地域に影響を与え、科学・技術の発展は、人類の生活と社会を豊かにすると信じられてきました。しかし、人口増加、環境破壊、戦争、資源枯渇、水不足、大気汚染など、大きな負の代償を人類社会にもたらしているとも言えます。 特に環境問題と人口増加は、解決を要する大きな課題です。 前者は、生活空間・食料資源・生物の多様性から、戦争・公害・地球温暖化・災害など、人間生活のあらゆる面に影響を及ぼしています。 後者は、2060年には100億人を超え、2100年には地球の人口支持力（環境収容力）120億人に近づく一方、先進国では少子高齢化が進み、家族や人間集団の維持・存続に多くの問題をもたらしています。 このような状況において、文明に対応してきた現地社会の「知」から現代文明を問い直すために、特別研究を現代の人類社会が直面する諸課題の分析と解決を志向する研究として位置づけ、環境問題や人口をめぐる地球規模の変動について直接的・間接的に起因する対立軸となる文化現象を設定します。 グローバル空間・地域空間・社会空間が構成する多層的生活空間における現代的問題系としてアプローチすることで、旧来の（伝統的な）価値から、いかに多元的価値の共存を保障する社会を創成することができるかを解明し、人類社会にとって選択可能な問題解決を志向する未来ビジョンを提出することをめざします。

特別研究一覧　平成28年度～令和3年度

統一テーマ「現代文明と人類の未来―環境・文化・人間」

【テーマ区分・環境】

研究代表者	研究プロジェクト	区分	研究期間
池谷和信・岸上伸啓	生物・文化的多様性の歴史生態学 ―稀少動物・稀少植物の利用と保護を中心に―	①環境問題と生物多様性	平成28年7月～平成31年3月
野林厚志	食料生産システムの文明論	②食糧問題とエコシステム	平成29年4月～令和2年3月

【テーマ区分・文化】

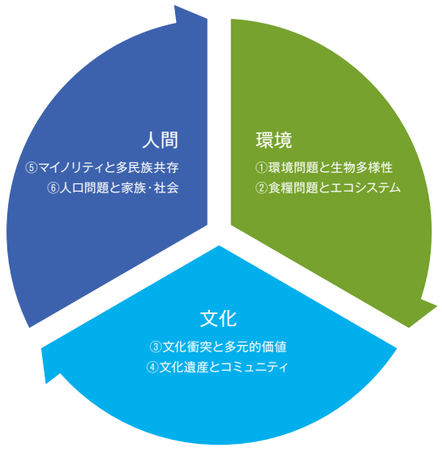
研究代表者	研究プロジェクト	区分	研究期間
西尾哲夫	グローバル地域研究と地球社会の認知地図 ―わたしたちはいかに世界を共創するのか?	③文化衝突と多元的価値	令和2年4月～令和5年3月
飯田 卓	デジタル技術時代の文化遺産におけるヒューマニティとコミュニティ	④文化遺産とコミュニティ	平成31年4月～令和4年3月

【テーマ区分・人間】

研究代表者	研究プロジェクト	区分	研究期間
寺田吉孝・福岡正太	パフォーミング・アーツと積極的共生	⑤マイノリティと多民族共存	平成30年4月～令和5年3月
森 明子	不確実性の時代における家族の潜勢力――モビリティ、テクノロジー、身体	⑥人口問題と家族・社会	令和3年4月～令和6年3月

【緊急枠】

研究代表者	研究プロジェクト	区分	研究期間
島村一平	コロナ禍に対するローカルな対処としての「文化の免疫系」に関する比較研究	現代文明と感染症	令和２年12月～令和6年３月



平成28年度実施プロジェクト

プロジェクトリーダー	プロジェクト名
池谷和信・岸上伸啓	生物・文化的多様性の歴史生態学―稀少動物・稀少植物の利用と保護を中心に―

平成29年度実施プロジェクト

プロジェクトリーダー	プロジェクト名
池谷和信・岸上伸啓	生物・文化的多様性の歴史生態学―稀少動物・稀少植物の利用と保護を中心に―
野林厚志	食料生産システムの文明論

平成30年度実施プロジェクト

プロジェクトリーダー	プロジェクト名
池谷和信・岸上伸啓	生物・文化的多様性の歴史生態学―稀少動物・稀少植物の利用と保護を中心に―
野林厚志	食料生産システムの文明論
寺田吉孝	パフォーミング・アーツと積極的共生

令和元年度実施プロジェクト

プロジェクトリーダー	プロジェクト名
野林厚志	食料生産システムの文明論
寺田吉孝	パフォーミング・アーツと積極的共生
飯田 卓	デジタル技術時代の文化遺産におけるヒューマニティとコミュニティ

令和2年度実施プロジェクト

プロジェクトリーダー	プロジェクト名
福岡正太	パフォーミング・アーツと積極的共生
飯田 卓	デジタル技術時代の文化遺産におけるヒューマニティとコミュニティ
西尾哲夫	グローバル地域研究と地球社会の認知地図―わたしたちはいかに世界を共創するのか?
島村一平	コロナ禍に対するローカルな対処としての「文化の免疫系」に関する比較研究

学術講演会
「ファンタジーの挑戦――もうひとつの世界を想像しよう」

実施日　令和2年11月6日
研究代表者　西尾哲夫
参加者総数　619名

国際シンポジウム
連続ウェブ研究会
「文化遺産実践における身体とモノ――集合的健忘に抗するための文化伝達」

実施日　令和3年2月13日～3月13日（合計5回オンライン開催）
研究代表者　飯田 卓
参加者総数　474名

令和3年3月に予定していた"Performing Arts and Conviviality"は延期となりました。

人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築（人間文化研究機構　機関拠点型基幹研究プロジェクト）

みんぱくでは、開館以来世界の民族と文化、社会を研究し、多様な有形・無形の民族資料とそれらに関連する情報を集積してきました。併せて、国内外の複数の研究機関、大学、博物館、現地社会と連携しながら民族資料と関連情報について国際共同研究を推進しています。私たちは、それらの資料と関連情報を「人類の文化資源」として同時代の人びとと共有し、かつ後世に伝えたいと考えています。この実現のため、グローバルな共同利用デジタル・データバンクとして「フォーラム型情報ミュージアム」を創出し、人類の文化資源に関する情報の発信、交換、生成、共有化を図ります。このミュージアムによって、研究者コミュニティのみならず、文化資源を作り出した現地社会との双方向的な交流も実現したいと考えます。7年目となる令和2年度は、開発型プロジェクト3件、強化型プロジェクト8件、合わせて11件のプロジェクトを実施しました。また、研究の国際化を推進するための国際発信プログラムにおいて、成果刊行物として『Collections Review on 38 Silverworks Labeled “Hopi” in the Denver Museum of Nature & Science: Reconnecting Source Communities with Museum Collections 5』を出版しました。なお、この事業は人間文化機構機関拠点型基幹研究プロジェクトとして位置づけされています。

推進しているプロジェクト

1. 開発型プロジェクト

国内外の協定機関と連携しながら文化資源に関する各機関が持つ情報を共有化し、それをもとに国際共同研究を実施しつつ、データベースのコンテンツを作成するものです。データベースの構築にあたって、共通項目以外は、画像、音声資料の活用を進めています。

2. 強化型プロジェクト

民博の文化資源に関する既存の情報を整理し、新しい情報を付加し、精緻化することによって、既存のデータベースをさらに高度化するものです。

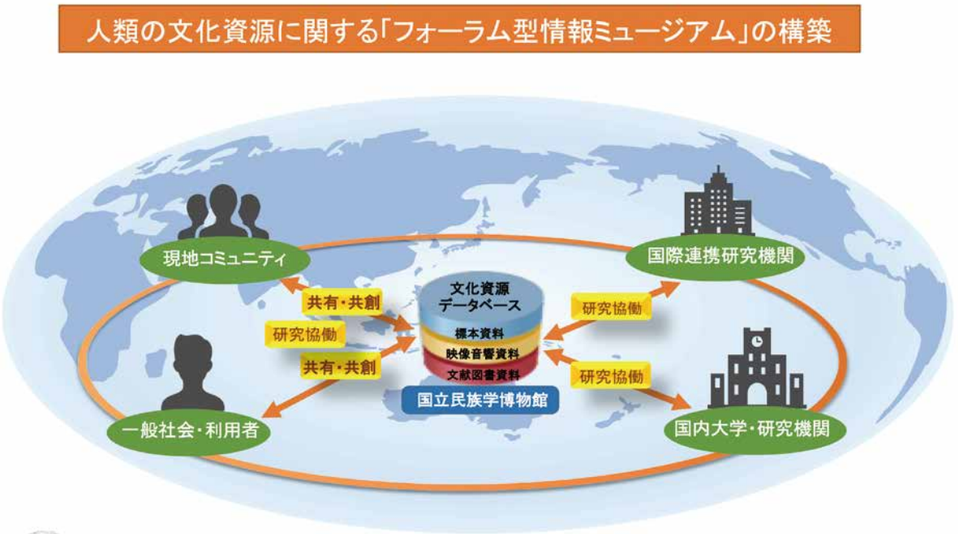
「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」研究プロジェクト　令和2年度

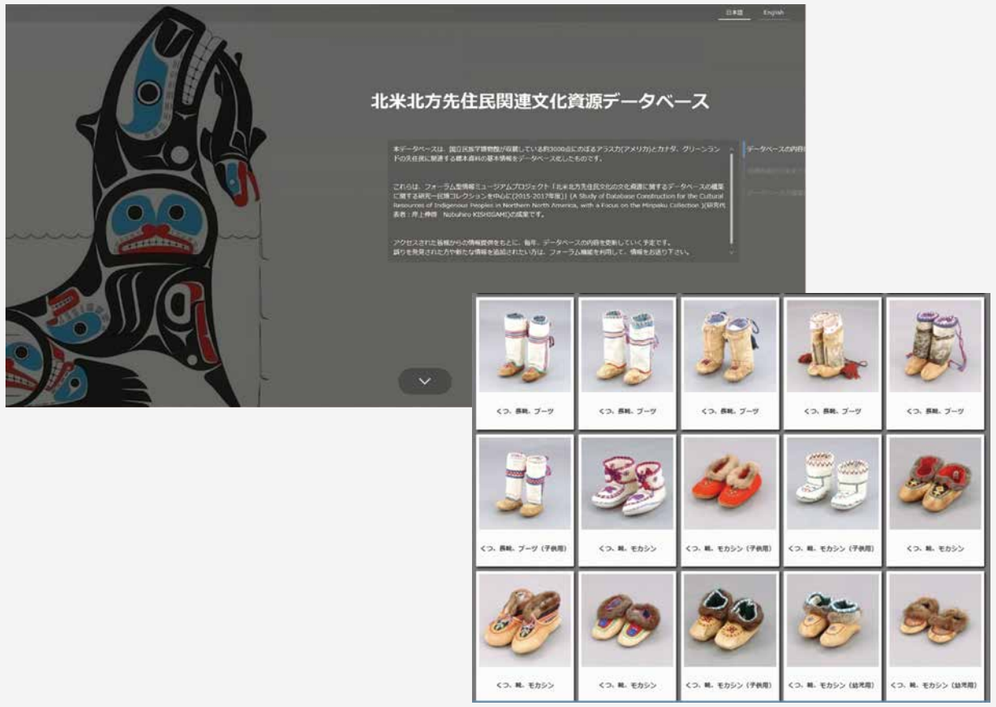
代表者	プロジェクト名	区分	期間
飯田 卓	アフリカ資料の多言語双方向データベースの構築	開発型	平成29年4月～令和4年3月 新型コロナウイルス感染症のため期間を延長
寺村裕史	中央・北アジアの物質文化に関する研究―民博収蔵の標本資料を中心に	開発型	平成30年4月～令和4年3月
小野林太郎	海域アジアにおける人類の海洋適応と物質文化――東南アジア資料を中心に	開発型	平成31年4月～令和4年3月
八木百合子	中南米地域の文化資料のフォーラム型情報データベースの構築	強化型	平成30年4月～令和4年3月 新型コロナウイルス感染症のため期間を延長
丹羽典生	民博所蔵「朝枝利男コレクション」のデータベースの構築――オセアニア資料を中心に	強化型	平成30年4月～令和4年3月 新型コロナウイルス感染症のため期間を延長
南 真木人	ネパールのガンダルバ映像音響資料に関する情報共有型データベースの構築	強化型	平成30年4月～令和4年3月 新型コロナウイルス感染症のため期間を延長
日髙真吾	時代玩具コレクションの公開プロジェクト	強化型	平成31年4月～令和3年3月
林 勲男	ミクロネシア文化資料のフォーラム型データベースの構築――20世紀前半収集資料を中心として	強化型	平成31年4月～令和3年3月
日髙真吾	津波の記憶を刻む文化遺産―寺社石碑データベースのフォーラム型情報ミュージアムへの改良	強化型	令和2年4月～令和4年3月
三島禎子	セネガルにおける諸民族文化の映像記録を題材とする情報強化	強化型	令和2年4月～令和4年3月
池谷和信	データベース「焼畑の世界―佐々木高明のまなざし」の国際化と学際研究の展開	強化型	令和2年4月～令和4年3月

国際発信プログラムによる成果刊行物

データベースを活用したソース・コミュニティにおける文化継承の取り組み：徳之島西阿木名小学校での「徳之島の唄と踊り」データベースの活用

海外から招聘した研究者と協働し、館蔵資料の調査と研究ワークショップを実施





HP上で公開中のデータベース

共同利用型研究

共同研究

文化人類学・民族学および関連分野の特定のテーマについて館内外の専門家が共同でおこなう研究です。
令和2年度は、館外より国立大学112名、公立大学17名、私立大学119名、民間機関など65名の専門家とともに研究をおこないました（令和3年3月現在）。

令和2年度　共同研究課題　○印は館外研究者による実施課題

【一般】

研究代表者	研究課題	研究期間	共同研究員数 館内	国立大学	公立大学	私立大学	民間機関など	総計
	課題1：新領域開拓型							
○ 中生勝美	人類学／民俗学の学知と国民国家の関係――20世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス	平成29年10月1日 ～令和4年3月31日	2	5	0	8	1	16
○ 中川 敏	文化人類学を自然化する	平成29年10月1日 ～令和3年3月31日	2	6	0	1	2	11
○ 田沼幸子	ネオリベラリズムのモラリティ	平成29年10月1日 ～令和4年3月31日	2	2	1	7	0	12
○ 風間計博	オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的研究	平成30年10月1日 ～令和4年3月31日	1	6	3	5	1	16
○ 中谷文美	伝統染織品の生産と消費――文化遺産化・観光化によるローカルな意味の変容をめぐって	平成30年10月1日 ～令和4年3月31日	1	3	0	7	1	12
○ 西 真如	心配と係り合いについての人類学的探求	平成30年10月1日 ～令和4年3月31日	1	6	1	8	0	16
○ 佐川 徹	統治のフロンティア空間をめぐる人類学――国家・資本・住民の関係を考察する	平成29年10月1日 ～令和4年3月31日	2	2	0	9	1	14
○ 山 泰幸	グローバル時代における「寛容性／非寛容性」をめぐるナラティヴ・ポリティクス	平成30年10月1日 ～令和4年3月31日	3	6	1	6	2	18
○ 内藤直樹	カネとチカラの民族誌：公共性の生態学にむけて	平成30年10月1日 ～令和4年3月31日	1	9	0	6	1	17
○ 東 賢太朗	グローバル化時代における「観光化／脱-観光化」のダイナミズムに関する研究	令和元年10月1日 ～令和4年3月31日	1	4	0	4	0	9
野林厚志	食生活から考える持続可能な社会――「主食」の形成と展開	令和元年10月1日 ～令和4年3月31日	4	3	1	2	0	10
河合洋尚	社会・文化人類学における中国研究の理論的定位―12のテーマをめぐる再検討と再評価	令和元年10月1日 ～令和4年3月31日	3	5	0	10	1	19
鈴木英明	人類史における移動概念の再構築――「自由」と「不自由」の相克に注目して	令和元年10月1日 ～令和4年3月31日	5	1	1	4	2	13
小野林太郎	島世界における葬送の人類学――東南アジア・東アジア・オセアニアの時空間比較	令和元年10月1日 ～令和4年3月31日	4	1	0	5	5	15
○ 片岡 樹	海外フィールド経験のフィードバックによる新たな人類学的日本文化研究の試み	令和2年10月1日 ～令和5年3月31日	2	5	0	7	0	14
○ 山口未花子	「描かれた動物」の人類学――動物×ヒトの生成変化に着目して	令和2年10月1日 ～令和5年3月31日	1	4	2	5	2	14
○ 新本万里子	月経をめぐる国際開発の影響の比較研究――ジェンダー及び医療化の視点から	令和2年10月1日 ～令和5年3月31日	2	6	0	3	3	14
岸上伸啓	環北太平洋地域の先住民社会の変化、現状、未来に関する学際的比較研究――人類史的視点から	令和2年10月1日 ～令和5年3月31日	2	9	0	1	4	16
森 明子	不確実性のなかでオルタナティヴなコミュニティを問う――モノ、制度、身体のからみあい	令和2年10月1日 ～令和5年3月31日	4	5	0	2	0	11
宇田川妙子	戦争・帝国主義と食の変容――食と国家の関係を再考する	令和2年10月1日 ～令和5年3月31日	3	5	0	4	1	13
卯田宗平	日本列島の鵜飼文化に関するT字型学際共同アプローチ――野生性と権力をめぐって	令和2年10月1日 ～令和5年3月31日	1	3	1	3	11	19
	課題2：学術資料共同利用型							
園田直子	博物館における持続可能な資料管理および環境整備――保存科学の視点から	平成29年10月1日 令和4年3月31日	7	2	0	0	9	18
○ 大西秀之	沙流川調査を中心とする泉靖一資料の再検討	令和元年10月1日 ～令和4年3月31日	2	0	0	1	9	12
		計	56	98	11	108	56	329

【若手】

研究代表者	研究課題	研究期間	共同研究員数 館内	国立大学	公立大学	私立大学	民間機関など	総計
	課題1：新領域開拓型							
○ 藤田瑞穂	拡張された場における映像実験プロジェクト	平成30年10月1日 ～令和4年3月31日	1	2	5	1	2	11
○ 緒方しらべ	感性と制度のつながり――芸術をめぐる「喚起」と「評価」のプロセスから考える	令和元年10月1日 ～令和4年3月31日	1	2	0	3	4	10
○ 古川不可知	モビリティと物質性の人類学	令和元年10月1日 ～令和4年3月31日	1	6	1	5	1	14
○ 近藤祉秋	先住民と情報化する社会の関わり	令和2年10月1日 ～令和5年3月31日	1	4	0	2	2	9
		計	4	14	6	11	9	44
		合計	60	112	17	119	65	373

共同研究会の公開

平成16年度より共同研究会の一部が、一般向けに公開されています。令和2年度実績は以下のとおりです。

開催日	研究会名	場所	参加者数
令和2年8月7日（金）	博物館における持続可能な資料管理および環境整備――保存科学の視点から	ウェブ開催	編集映像を文化財保存修復学会HPで公開 （2020年10月12日～12月12日）

外来研究員　令和2年度

本館は、大学共同利用機関として、国内外の大学や研究機関に所属する研究者または若手の博士課程修了者もしくは単位取得退学者で、一定期間、本館での研究活動を希望する者を、外来研究員として受け入れています。 受入にあたっては、本館教員が受入担当教員になります。 一定の条件を満たす外来研究員には、研究代表者として本館から科学研究費助成事業への応募を認めています。 令和2年度は、6の国・地域から18人の外国籍を含む96人の研究者を外来研究員として受け入れました。

特別共同利用研究員　令和2年度

本館は、大学共同利用機関として全国の国公私立大学の博士後期課程に在籍する学生を、当該学生の所属する大学院研究科からの委託を受けて特別共同利用研究員として受け入れています。 特別共同利用研究員は、各々の特定の研究課題に応じて、本館の指導教員から研究指導を受け、本館の諸施設を利用し研究を遂行するとともに、本館に設置されている、総合研究大学院大学文化科学研究科（地域文化学専攻・比較文化学専攻）の教育プログラムに一部参加することができます。 令和2年度は、国立大学より1名、私立大学より1名を受け入れました。

科学研究費助成事業による研究プロジェクト

科学研究費助成事業は、我が国の学術を振興するため、人文・社会科学から自然科学まであらゆる分野における優れた独創的・先駆的な研究を格段に発展させることを目的とする研究助成費で、大学などの研究者または研究者グループが自発的に計画する基礎的研究のうち、学術研究の動向に即して特に重要なものを取り上げ、研究費の助成をするものです。

令和3年度採択課題

研究種目		研究代表者	研究課題	配分額（千円）
継続	新学術領域研究 『学術研究支援基盤形成』	吉田憲司	地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化	32,500
			計1件	32,500
継続	国際共同研究加速基金 （国際共同研究強化（B））	菊澤律子	時空間を融合する：GISと数理モデルを用いた新たな言語変化へのアプローチ	4,160
継続	国際共同研究加速基金 （国際共同研究強化（B））	小野林太郎	オセアニアの人類移住と島嶼間ネットワークに関わる考古学的研究	4,420
継続	国際共同研究加速基金 （国際共同研究強化（B））	吉田憲司	人類学における芸術研究の刷新：イメージ人類学の創成に向けた国際共同研究基盤の強化	4,940
継続	国際共同研究加速基金 （国際共同研究強化（B））	長野泰彦	チベットの宗教基層におけるモノと聖性の動態に関する国際共同調査研究	5,720
			計4件	19,240
継続	国際共同研究加速基金 （国際共同研究強化（A））	松尾瑞穂	遺伝子化時代の社会集団のカテゴリー化と差異化―インドにおける血と遺伝子を中心に	13,130
	※国際共同加速基金（国際共同研究強化（A））は、令和元年度～令和3年度配分額		計1件	13,130
継続	基盤研究（A）	小長谷有紀	モンゴルに関する画像記録を用いた地域像の再構築	8,320
継続	基盤研究（A）	山中由里子	超常認識と自然観をめぐる比較心性史の構築	7,020
継続	基盤研究（A）	林 勲男	大規模災害に関する集合的記憶の物象化・物語化と防災教育	6,760
継続	基盤研究（A）	岸上伸啓	北米アラスカ・北西海岸地域における先住民文化の生成と現状、未来に関する比較研究	8,840
継続	基盤研究（A）	關 雄二	社会的記憶の観点からみたアンデス文明史の再構築	10,920
新規	基盤研究（A）	小野林太郎	サピエンスによる海域アジアへの初期拡散と島嶼適応に関する学際的総合研究	5,720
			計6件	47,580
継続	基盤研究（B）	西尾哲夫	シンドバード航海記の成立過程と多元的価値共創文学の可能性に関する物語情報学的研究	3,120
継続	基盤研究（B）	飯田 卓	文化遺産の「社会的ふるまい」に関する応用人類学的研究：東部アフリカを事例に	5,720
継続	基盤研究（B）	上羽陽子	バスケタリーをめぐる植物生態と民族技術の文化人類学的研究	3,250
継続	基盤研究（B）	末森 薫	再現模写・仮想空間構築による敦煌莫高窟千仏図が有する規則的描写の複合的評価	3,900
継続	基盤研究（B）	寺村裕史	シルクロード都市の形成ならびに人と文化の東西交流に関する考古学的研究	3,640
継続	基盤研究（B）	丹羽典生	紛争後社会のレジリエンス：オセアニア少数民族の社会関係資本と移民ネットワーク分析	2,730
継続	基盤研究（B）	卯田宗平	動物保護時代における文化システムとしての鵜飼の全面解明と「最適継承ルート」の共創	1,300
継続	基盤研究（B）	池谷和信	装飾文化からみたアフリカ史の再構築に関する研究	3,380
新規	基盤研究（B）	斉藤 晃	タサ記録の人文情報学的研究―スペインの植民地統治とアンデスの先住民社会	2,600
新規	基盤研究（B）	園田直子	劣化が進行する酸性紙資料を長期保存するための実用化技術の開発	4,550
新規	基盤研究（B）	吉田憲司	社会的危機下のアフリカにおける文化の「創発」に関する人類学的研究	4,160
新規	基盤研究（B）	竹沢尚一郎	被傷性の人類学：傷つきやすさを抱えた人々について私たちはどう語ることができるのか	4,550
新規	基盤研究（B）	鈴木 紀	ラテンアメリカの民衆芸術に関する文化人類学的研究	4,420
			計13件	47,320
継続	基盤研究（C）	中道静香	『千夜一夜』をめぐる写本・刊本の編纂過程と書物文化の諸相	650
継続	基盤研究（C）	川瀬 慈	アフリカの無形文化を対象にした民族誌映画の制作による応用映像人類学的研究	650
継続	基盤研究（C）	平井京之介	ポスト紛争期の水俣における「負の遺産」の生成過程に関する博物館人類学的研究	520
継続	基盤研究（C）	鈴木七美	米国での認知症高齢者を師とする人生語り・記録の多世代協働とコミュニティ教育の展開	1,300
継続	基盤研究（C）	岡本尚子	未発表原稿分析によるJ.-C.マルドリュスの執筆過程の解明	780
継続	基盤研究（C）	相良啓子	日本手話、台湾手話、韓国手話における語と意味の歴史変化の解明	780
継続	基盤研究（C）	常田夕美子	インド・オディシャーにおける親密圏の変容：恋愛・婚姻・家族をめぐる情動と経験	1,690
継続	基盤研究（C）	中村真里絵	世界遺産バンチェン遺跡の遺物の古美術品化とその価値づけをめぐる文化人類学的研究	1,040
継続	基盤研究（C）	三尾 稔	インド西部の地方都市における宗教実践とローカリティ形成に関する人類学的研究	1,430
継続	基盤研究（C）	鈴木英明	20世紀前半ベルシア湾奴隷制に関する歴史民族誌的研究	910
継続	基盤研究（C）	太田心平	民族誌と統計解析の手法による博物館職員の働きがいと職業意欲の解明	1,170
継続	基盤研究（C）	森 明子	ケアから見たベルリンのネイバーフッドに関する民族誌的研究	910
継続	基盤研究（C）	高 茜	「民族芸術」の生成過程―中国雲南省麗江におけるトンパ教文化の資源化と観光	910
継続	基盤研究（C）	岡田恵美	南アジアのポリフォニー民謡に関する音楽民族学研究：インド・マニプル州ナガを中心に	1,040
新規	基盤研究（C）	笹原亮二	明治時代以降の国内各地の島々における移住者の社会の形成と祭や芸能の伝承の研究	1,040
新規	基盤研究（C）	黒田賢治	近代日本のグローバルな貿易―生産構造の展開と中東地域との相互依存関係をめぐる研究	1,040
			計16件	15,860

研究種目		研究代表者	研究課題	配分額（千円）
継続	若手研究	神野知恵	近現代の日本と韓国における門付け芸能の変遷 ― 伊勢大神楽と韓国農楽を中心に―	520
継続	若手研究	早川真悠	レソトにおけるジンバブエ移民行商人の会計方法にかんする人類学的研究	1,170
継続	若手研究	奈良雅史	宗教と移動をめぐる人類学的研究：現代中国の越境的ムスリム・ネットワーク	780
継続	若手研究	八木百合子	現代アンデスにおける寄進と宗教性に関する研究―奉納品と教会記録の分析を中心に	1,300
継続	若手研究	工藤由美	チリのマプーチェ先住民組織における民族医療に関する文化人類学的研究	910
継続	若手研究	伊藤 悟	日常を美学化する詩的オラリティの人類学―タイ文化圏の声と文字の文化の比較研究	1,040
継続	若手研究	茶谷智之	中等教育脱落者の少年少女と社会参加―インド・スラムにおける仲介者の働きに着目して	780
継続	若手研究	大谷育恵	匈奴― サルマート期の編年確立を目的とするエニセイ川上流域の中国系文物の調査	1,430
新規	若手研究	上畑 史	セルビアにおける鍵盤楽器を通じた民族的アイデンティティの構築プロセスの研究	1,300
新規	若手研究	金 悠進	ポピュラー音楽と国軍の関係からみる現代インドネシアの文化と民主政治	650
			計10件	9,880
継続	挑戦的研究（開拓）	出口正之	個別文化の標準化問題に関する文化人類学と会計学の学際的共同研究	4,810
継続	挑戦的研究（開拓）	小野林太郎	東南アジアへ拡散したオーストロネシア語族の土器・埋葬文化に関する学際的研究	7,930
			計2件	12,740
継続	研究成果公開促進費	久保正敏	梅棹忠夫資料のデジタルアーカイブズ	3,800
新規	研究成果公開促進費	中村友香	病いの会話―ネパールの生物医療の捻じれと身体世界―	2,100
新規	研究成果公開促進費	長野泰彦	rGyalrong ―A Comprehensive Grammar ―	1,300
			計3件	7,200
継続	特別研究員奨励費	額田有美	ラテンアメリカ地域における「先住民性」についての民族誌的研究：コスタリカを中心に	1,300
継続	特別研究員奨励費	稲井啓之	アフリカ内水面における「よそ者」に着目した持続的水産資源管理構築に関する研究	1,560
継続	特別研究員奨励費	崎田誠志郎	東地中海域における小規模漁業の漁場利用生態と漁場管理制度の統合的解明	1,690
継続	特別研究員奨励費	中村友香	ネパールにおける近代医療の市場化―医療アクセス・薬剤・身体経験―	1,300
継続	特別研究員奨励費	坂口奈央	災害遺構を巡る住民の語りをもとにした集合的記憶形成過程の分析	1,300
継続	特別研究員奨励費	楠 和樹	第二次世界大戦後のケニアにおける越境性動物疾病対策と国家統治の変容	1,300
継続	特別研究員奨励費	工藤さくら	ネワール低カースト女性の儀礼実践とその変容に関する宗教人類学的研究	1,300
			計7件	9,750
			総計63件	215,200

地域研究画像デジタルライブラリ（DiPLAS）

日本の研究者が世界各地で調査するさいに撮影した写真や動画などの画像資料は、調査当時の実態を記録した研究資源であると同時に、日本の学術史を反映する学術遺産でもあります。

この事業は、世界諸地域を対象として現在進行中の科学研究費助成事業のプロジェクトを対象に、これまでに蓄積された画像資料のデジタル化・データベース化を支援し、将来にわたる研究情報の集積と共有化の基盤を整備して提供するものです。

採択されたプロジェクトに対しては、写真・映像資料の整理、デジタル化とデータベース化を進め、さらには画像内容に関わるテキスト情報の入力の支援もおこなうことで、研究に活用できるデジタルデータのプラットフォームを作成して提供します。また、公開可能な画像については、国際的な共有化をはかり、分野の別を超えたオープンサイエンスの基盤を構築していきます。

このデジタルライブラリは、科学研究費助成事業（新学術領域研究（研究領域提案型））『学術研究支援基盤形成』「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」によって構築するものです。

受託研究・受託事業　令和2年度

研究代表者	委託者	研究課題	研究費（千円）
飯泉菜穂子	大阪府立福祉情報コミュニケーションセンター運営事業体	大阪府手話言語条例に基づく手話通訳者養成関連事業	1,600
			計1件　1,600

寄附金等による研究活動　令和2年度

寄附金の名称	研究代表者	寄附者	受入額（千円）
關雄二教授研究助成金 （公益財団法人平和中島財団　国際学術共同研究助成）	關 雄二	關 雄二	3,000
岡田恵美准教授研究助成金 （公益財団法人平和中島財団　国際学術共同研究助成）	岡田恵美	岡田恵美	1,500
順益台湾原住民博物館研究賛助金	野林厚志	順益台湾原住民博物館	2,500
			計3件　7,000

手話言語学研究部門　令和2年度

手話言語学研究の推進と研究成果の諸大学や社会発信のためのアウトリーチ、および手話通訳者養成を通してろう聴の研究者が協働して研究を進めるための基盤づくりにとりくむことを目的に設置されました。 併任1、専任3、事務補佐員5、国内客員2の計11名（うち、ろう者は3名）で手話言語学の研究、通訳養成、社会発信やアウトリーチ活動、手話を含む言語展示の企画等を進めてきました。 この研究部門は、助成期間の満了にともない、令和3年3月31日をもって、その活動を終えることになりました。

助成金の名称	助成者	助成期間	助成額（千円）
手話言語学研究部門の設置および手話言語学事業の推進	日本財団	令和2年4月～令和3年3月	37,150
			計1件　37,150

文化資源関連事業・情報関連事業

文化資源プロジェクト・情報プロジェクト

「文化資源プロジェクト・情報プロジェクト」は、本館専任教員の提案に基づき、本館あるいは大学等関連諸機関が所有する学術資源の体系化および情報化をすすめ、本館専任教員のイニシアティブにより共同利用を促進し、学術的価値を高めるために、機関として実施する研究プロジェクトです。
「文化資源プロジェクト」では、調査・収集分野、資料管理分野、展示分野、博物館社会連携分野の4分野のプロジェクトを実施しています。 また、「情報プロジェクト」では、取材・収集分野、情報化分野の2分野のプロジェクトを実施しています。

令和3年度文化資源プロジェクト一覧

分野	提案者	プロジェクト名
展示	日高真吾	特別展「復興を支える地域の文化―3.11から10年」
展示	廣瀬浩二郎	特別展「ユニバーサル・ミュージアム―さわる！“触”の大博覧会」
展示	島村一平	特別展「邂逅する写真たち―モンゴルの100年前と今」
展示	上羽陽子	企画展「躍動するインド世界の布」
展示	池谷和信	企画展「佐々木高明の見た焼畑―五木村から世界へ―」（仮称）
展示	笹原亮二	巡回展「子ども／おもちゃの博覧会」（島根県立古代出雲歴史博物館）
展示	池谷和信	巡回展「ビーズアイヌモシリから世界へ」（国立アイヌ民族博物館）
展示	山中由里子	巡回展「驚異と怪異――想像界の生きものたち」（仮称）（高知県立歴史民俗資料館）
展示	山中由里子	巡回展「驚異と怪異――想像界の生きものたち」（仮称）（福岡市博物館）
展示	菊澤律子	特別展示「*Homō loquēns*「しゃべるヒト」～ことばの不思議を科学する～」開催準備
展示	鈴木 紀	特別展「ラテンアメリカの民衆芸術： 多様性をうみだす創造力」（仮称）の予備調査
展示	三尾 稔	特別展示「ヒンドゥー神像の世界」（仮称）の予備調査
展示	小野林太郎	企画展「海と人類―海域アジア・オセアニアの漁具～儀礼具まで」（仮称）開催準備
博物館社会連携	信田敏宏	知的障害者の博物館活用に関する実践的研究
博物館社会連携	吉岡 乾	博物館社会連携事業強化プロジェクト

令和3年度情報プロジェクト一覧

分野	提案者	プロジェクト名
取材・収集	伊藤敦規	みんぱく映像民族誌『（仮題）米国先住民ホピの服飾作家による季節の踊りの盛装解説』の制作
取材・収集	山中由里子	みんぱく映像民族誌「コロナ状況下の伊勢大神楽： 山本源太夫社中の活動記録」（仮題）制作
情報化	韓 敏	毛沢東バッジのデータベースの作成

文化資源計画事業・情報計画事業

「文化資源計画事業・情報計画事業」は、本館の共同利用基盤を整備・強化することを目的として、継続性の高い事業、または計画的に実施する事業です。
「文化資源計画事業」では、資料関連分野、展示分野、博物館社会連携分野の3分野の事業を実施しています。 また、「情報計画事業」では、記録映像制作分野、展示情報化分野の2分野の事業を実施しています。

令和3年度文化資源計画事業一覧

分野	実施責任者	事業名
資料関連	日高真吾	標本資料の撮影等業務
資料関連	企画課長	研究資料整理・情報化及び利用管理業務【標本資料関連】
資料関連	日高真吾	研究資料整理・情報化及び利用管理業務【データベース関連】
資料関連	園田直子	有形文化資源の保存・管理システム構築
資料関連	日高真吾	トーテムポールの新規製作（式典、報告書）
資料関連	日高真吾	標本資料の収集（個別収集）
資料関連	日高真吾	標本資料の収集（テーマ別収集）
博物館社会連携	齋藤玲子	ボランティア活動支援
博物館社会連携	齋藤玲子	ワークショップの実施ならびにワークシートの運用
博物館社会連携	福岡正太	音楽の祭日 2021 in みんぱく
博物館社会連携	齋藤玲子	カムイノミ及び「アイヌ古式舞踊」演舞の実施
博物館社会連携	齋藤玲子	みんぱっくの改訂版制作（モンゴル―草原のかおりをたのしむ）
博物館社会連携	齋藤玲子	みんぱっくの複製版制作（モンゴル―草原のかおりをたのしむ）

令和3年度情報計画事業一覧

分野	実施主体	事業名
記録映像制作分野	情報運営会議	特別展・企画展パノラマ映像制作
記録映像制作分野	情報運営会議	研究公演記録映像制作

（全て令和3年4月1日現在）

人間文化研究機構 基幹研究プロジェクト

人間文化研究機構では、平成28年度より6カ年にわたり、国内外の大学等研究機関や地域社会等と組織的に連携し、現代的諸課題の解明に資する「基幹研究プロジェクト」を実施しています。
みんぱくが担当しているのは、以下のプロジェクトです。

広領域連携型：日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築

みんぱくユニット「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」
代表者：日髙真吾

日本列島は、南北に長く、海岸部から平野部、そして中山間部に居住地が広がり、それぞれの環境に適応させた多様な地域文化を育んできました。一方で、これらの地域文化は、グローバル化する社会変容のなかで、地域特有の文化が見えにくくなり、表面的には日本社会全体で画一化されたような印象を私たちに感じさせます。また、多発する大規模災害からの復興で、コミュニティの再編を余儀なくされた地域は、それまで受け継がれてきた地域文化を再構築せざるを得ない状況になることもしばしば見られる現状があります。
そこで、本研究では、地域文化に着目し、さまざまな地域でどのような文化が継承され、新たな文化が構築されているのかの実情を明らかにします。また、これらの動向に人間文化研究がいかに貢献しうるのかを考察し、現在（いま）への社会貢献、未来への社会貢献を視野に入れた研究成果を目指すこととします。
具体的には、「地域文化の再発見」、「地域文化の保存」、「地域文化の活用」という三つの視点から研究を展開しています。その上で、平常時において埋没している地域文化を再発見し、その文化をそこに住まう地域住民と外部社会の双方にとって有意義な形で表象するためのシステムを構築します。

地域で伝えられてきた被災文化財の修復

広領域連携型：アジアにおける「エコヘルス」研究の新展開

みんぱくユニット「文明社会における食の布置」
代表者：野林厚志

本研究の目的は、食の概念とその体系的な実践とを、文明社会を支える文化装置としてとらえ、食の社会的機能や歴史動態を解明し、食をめぐる社会的共存や衝突の原理を探究することです。
食は個体の生命を維持するための基本的な営みであると同時に、文化や経済と深く関わる行為としてとらえられてきました。一方で食糧資源の大量生産、大量廃棄、地球規模の人口増加と数億人にもおよぶ飢餓人口は、生態学的適応に乖離した現代社会の食の実態を物語っています。
こうした現代社会の食に関わる諸問題を超域的な視点で連結させるとともに、異なる視点をもつ研究分野の協働として、人類史の視点からの文明の盛衰と食との関係、生態学的アプローチからの食の機能等を議論に組み込み、文明社会の中における食の健全なありかたを探究していくことも本研究の狙いです。
なお、本研究プロジェクトは総合地球環境学研究所が中心となり推進する「アジアにおける「エコヘルス」の新展開」の一つのユニット研究として実施しています。「エコヘルス」は、医療や疾病研究の視点で捉えられてきた「健康」を、社会変容と環境変化が急速に進む近現代における、暮らしや生態環境、生業、食生活等との関わりから探究しようとする新たな研究の視座であります。

健康を支える家族の食（中国）

ネットワーク型：北東アジア地域研究
北東アジアにおける地域構造の変容：越境から考察する共生への道

中心拠点「自然環境と文化･文明の構造」
代表者：池谷和信

国立民族学博物館北東アジア地域研究拠点は、みんぱく館内の文化人類学・民族学およびその隣接分野の研究者、および連携機関である国立歴史民俗博物館の考古学の研究者を中心に構成され、北東アジアを対象に、人とモノの移動と交流、政治及び経済のシステムの導入と影響に着目して、先史時代から現代に至るまでの長期的な時間幅の中で、自然環境と文化、文明の構造と変容の解明を目指しています。
ここでの北東アジア地域とは、国･地域で言えばロシアのシベリア及び極東地域、モンゴル、韓国、北朝鮮、中国、日本に広がる空間を対象としています。従来は国家の枠組みにおいて研究が行われてきましたが、これらの国･地域を横断的に捉える新たな試みであるといえます。
なお本拠点は、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、東北大学東北アジア研究センター、富山大学極東地域研究センター、島根県立大学北東アジア地域研究センター、早稲田大学総合研究機構現代中国研究所の各拠点とともに、中心拠点として本プロジェクトを推進しています。

家畜と共に生きるモンゴルの牧畜民たち

ネットワーク型：現代中東地域研究
地球規模の変動下における中東の人間と文化―多元的価値共創社会をめざして

中心拠点「[文化資源]個人空間の再世界化」
代表者：西尾哲夫

現代中東地域研究では、国立民族学博物館を中心拠点とし、その他国内の四拠点と共同で研究活動を進めています。端的に述べると現代中東地域研究とは、中東地域における「個」と社会（共同体）のあり方の現代的動態に基づき、グローバル化と地域をめぐる双方向の複眼的な分析ベクトルをもって、人類や人間文化という普遍的な価値を視野に入れた研究です。
本拠点では、現代的諸問題を解決するための基盤形成のために中東地域における社会構築のプロセスを、文化知識の資源化プロセスに着目して研究しています。中東地域を基点として広がる空間においては、世界を形成･構想するうえで、生身の個人が経験する未知なる人・場・情報との遭遇が重要な役割を担っています。流動する諸個人が暫定的に構築してゆく場の継起・累積から社会を構想する方法を、文化知識の資源化という側面から検討することで、個人が織りなす世界の特質を解明することが可能となります。そこで(1)「個」から世界への視点による他者観と、(2)社会的心性としての世界観にかかるサブプロジェクトを連携させた活動を実施しています。

エジプト・カイロのフレッシュジュース店シンドバッド

ネットワーク型：南アジア地域研究
グローバル化する南アジアの構造変動
―持続的・包摂的・平和的発展のための総合的地域研究

副中心拠点「南アジアの文化と社会」
代表者：三尾 稔

急速な経済発展とともに社会文化も大きく変りつつある南アジア地域の現状は、わが国にとっても到底無視できるものではありません。本事業は、人文･社会諸科学を中心に自然科学分野とも協働して、地域的一体性の強い南アジア全体の総合的・俯瞰的な理解を深める研究プログラムを推進しています。このプロジェクトには、副中心拠点である国立民族学博物館をはじめ、京都大学（中心拠点）、東京大学、広島大学、東京外国語大学、龍谷大学の6拠点が参加し、ネットワーク型の共同研究事業を行っています。
民族学博物館拠点では、南アジア発の人や文化・価値の環流状況の解明や社会変化の中でも維持される南アジア的な社会結合の特性の解明を通じ、地域固有の社会的レジリエンスの特徴を抽出し、グローバル化の中で生ずる社会的リスクへの対応という問題解決に貢献します。また、国際シンポジウムの開催、研究成果の英文叢書の刊行、国際学術協定の拡大、アジアにおける南アジア研究センターコンソーシアムの構築など、拠点事業全体の国際化の推進を担っています。

アジアにおける南アジア地域研究コンソーシアム（略称ACSAS）第3回国際シンポジウムの総合討論（2019年11月23日 シンガポール国立大学）

各個研究 令和3年度各個研究課題

館長

吉田憲司	文化の創造・継承と表象に関する博物館人類学的研究

人類基礎理論研究部

岡田恵美	インド北東部におけるポリフォニーと歌唱文化に関する音楽民族学研究 現代の北インド古典音楽の伝承に関する研究
川瀬 慈	エスノフィクションの理論と実践の研究
菊澤律子	フィジー諸言語の発達史研究における地理情報システム（GIS）の応用
笹原亮二	島の芸能と祭の民俗誌としてのマルチメディア番組の可能性 ―マルチメディア番組「徳之島の歌と踊りと祭り」の検討を巡って―
末森 薫	博物館収蔵環境の評価：受動的環境管理の可能性と課題
園田直子	民族資料の総合的資料管理
日高真吾	地域文化の再発見とその表象システムの構築
平野智佳子	先住民の飲酒に関する人類学的研究の検討
丸川雄三	連想情報学に基づく文化財情報発信に関する研究
吉岡 乾	北パキスタン諸言語の記述言語学的研究

超域フィールド科学研究部

宇田川妙子	公共性と親密性の再検討と再編
太田心平	韓国・朝鮮における社会文化の統合性と多様性
樫永真佐夫	ベトナムにおける黒タイ文字と文書
韓 敏	社会、歴史と象徴に関する人類学的研究
新免光比呂	ミルチャ・エリアーデ、エミール・シオランの亡命をめぐる思想と戦略
菅瀬晶子	東地中海アラブ諸国における宗教的マイノリティのアイデンティティ表象とナショナリズム
奈良雅史	宗教と移動に関する人類学的研究：現代中国における回族の事例から
林 勲男	災害の想起における媒体の役割―遺構・モニュメント・語り継ぎ
MATTHEWS, Peter J.	アジア、太平洋地域の民族植物学、先史学
松尾瑞穂	南アジアにおけるサブスタンス論と人種概念の関わり
南 真木人	ネパール人移住労働における新型コロナウイルス感染症の影響

人類文明誌研究部

池谷和信	狩猟採集民の定住化と社会変容に関する研究
伊藤敦規	人類学博物館のindigenizationに関する実践的研究
上羽陽子	手工芸文化の比較研究
卯田宗平	鳥類と人とのかかわり
齋藤 晃	植民地期アンデスにおける副王トレドの総集住化の総合的研究
齋藤玲子	アイヌおよび隣接する民族における物と人の移動と交流
關 雄二	古代アンデスにおける権力生成過程の研究
福岡正太	映像音響メディアが伝統的音楽芸能に与える影響に関する研究
藤本透子	中央アジアにおける社会と宗教の人類学的研究
山中由里子	驚異と怪異の比較文明論：想像界と自然界の相関

グローバル現象研究部

相島葉月	現代エジプトにおける美と身体文化
鈴木七美	超高齢社会のエイジングフレンドリー・コミュニティ ――エイジング・イン・プレイスと交流の重層化
鈴木英明	移動から見たインド洋西海域世界
諸 昭喜	ヨモギの民間療法を介して見た韓国の薬と飲食の意味形成
中川 理	フランスにおけるモン難民と国家に関する人類学的研究
西尾哲夫	グローバル化と中東地域の民衆文化
丹羽典生	応援の人類学
信田敏宏	マレーシア先住民に関する人類学的研究 インクルーシブ社会に関する人類学的研究
平井京之介	ポスト紛争期の水俣における「負の遺産」の生成過程に関する博物館人類学的研究
三尾 稔	インド西部における宗教と文化の変容に関する人類学的研究
八木百合子	アンデス地域における寄進と宗教性に関する研究 ―奉納品と教会記録の分析を中心に

学術資源研究開発センター

飯田 卓	動的な文化遺産概念の理論的検討
小野林太郎	琉球・東南アジア・オセアニアにおける人類の島嶼適応・葬送・海洋文化の解明
神野知恵	近現代の日本と韓国における門付け芸能の変遷―伊勢大神楽と韓国農楽を中心に―
岸上伸啓	北アメリカ北西海岸地域のハイダ民族の社会・文化変化に関する民族学的研究
島村一平	モンゴル仏教のグローカル実践に関する学際・国際的地域研究
鈴木 紀	ラテンアメリカ関連収蔵資料の包括的研究
寺村裕史	古代シルクロード都市の形成ならびに人と文化の東西交流に関する研究
野林厚志	狩猟農耕民の食生活とエスニシティの関係に関する通文化比較研究
廣瀬浩二郎	「バリア・フリー」に関する人類学的研究
三島禎子	民族文化の多元的意義に関する理論研究―商業移民の送出社会の変容から
森 明子	社会的なものの意味と通文化的普遍性に関する人類学研究

研究成果の公開 ※開催場所の表記がないものは、本館で開催。外国語表記があるものは、国際研究集会。

本館では、館長リーダーシップ経費「研究成果公開プログラム」をはじめ、シンポジウムや研究フォーラム、国際研究集会への派遣など、研究成果の公開を積極的に支援しています。その他の外部資金等を含め、令和2年度は下記のような成果公開を実施しました。なお、特別研究関連については、8～9頁に掲載しています。

学術講演会

先端的な研究活動を取りあげ、その成果を社会に積極的に還元するとともに、文化人類学・民族学を通じての異文化理解と、広く本館が学術研究機関であることの認識を一般市民に深めてもらうことを目的として、東京と大阪において学術講演会を実施しています。

みんぱく公開講演会

ファンタジーの挑戦――もうひとつの世界を想像しよう

令和2年11月6日

講師　西尾哲夫、 森見登美彦
司会　相島葉月
会場　日本経済新聞社大阪本社カンファレンスルーム
参加者総数　619名
共催　日本経済新聞社

みんぱく公開講演会

グローバル化する武道と中東

令和3年3月19日

講師　相島葉月、 小倉孝保、 アレキサンダー・ベネット
司会　河合洋尚
会場　オーバルホール
参加者総数　301名
共催　毎日新聞社

シンポジウム等

国際シンポジウム

「東アジアの非営利組織をめぐる法・会計・文化―普遍性と個別性」

International symposium, "Laws, Accounting and Culture for Non-Profit Organizations in East Asia: Universality and Individuality"

令和2年8月28日（オンライン開催）

代表者　出口正之
経費　研究成果公開プログラム
参加者総数　41名

国際シンポジウム

「手話言語と音声言語に関する民博フェスタ2020／SSLL2020」

"The 9th Meeting of Signed and Spoken Language Linguistics"

令和2年9月25日～10月4日（オンライン開催）

代表者　菊澤律子
経費　日本財団助成金
参加者総数　672名

連続ウェブ研究会

特別研究「デジタル技術時代の文化遺産におけるヒューマニティとコミュニティ」「文化遺産実践における身体とモノ―集合的健忘に抗するための文化伝達」

Serial Academic Webinars, Minpaku Special Research Project "Humanity and Communities in Cultural Heritage in the Age of Digital Technology", "Cultural Transmission against Collective Amnesia: Bodies and Things in Heritage Practices"

令和3年2月13日～3月13日（合計5回）（オンライン開催）

代表者　飯田 卓
経費　特別研究
参加者総数　474名

研究成果の出版 令和2年度

館内の出版物

国立民族学博物館研究報告

『国立民族学博物館研究報告』は、民族学、文化人類学の発展に寄与するために、国立民族学博物館が刊行する研究誌です。この目的に即して、民族学、人類学および関連諸科学に関する論文、書評論文、研究ノート、資料を掲載しています。 年4回出版。

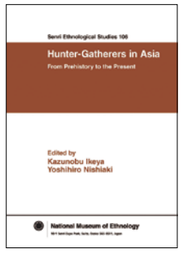
45巻1号 **論文**
旧ユーゴスラヴィア時代における鵜飼い漁の技術とその存立条件―北マケドニア共和国ドイラン湖におけるマンドゥラ(Mandra)漁の事例から
卯田宗平
研究ノート
フードスケープ―「食の景観」をめぐる動向研究　河合洋尚
資料
International Symposium “Future of the Museum: An Anthropological Perspective”　James Clifford, Atsunori Ito, Reiko Saito, Kenji Yoshida, Isao Hayashi, Taku Iida

45巻2号 **論文**
ベトナムにおける黒タイ文字の創成について　樫永真佐夫
特集
協働／プロセスの人類学―同時代のアートをめぐる省察から
序　登 久希子・兼松芽永
アート作品の譲渡不可能性―参加型アートとその制作プロセス　登 久希子
芸術家と非芸術家の関係から生じる「アート」―《Self Select: Nairobian in Tokyo》の実践から　西尾美也
窓花を〈うつす〉窓花展―人類学的表現実践としての映像と展示制作　丹羽朋子
アートによる「生活空間の脱植民地化」をめざして―オアハカの民衆聖像崇拝とアクチュアリティの共鳴　山越英嗣
アートプロジェクトの図地転換―田んぼの「棚田化／アート化」から考える　兼松芽永

45巻3号 **論文**
Nominal Echo Formations in Kati: In the Context of Languages of Northern Pakistan　Noboru Yoshioka
個人の移住歴からみる定住化した狩猟採集民の居住形態―カメルーン東南部のバカを事例に　彭 宇潔
過程の中の竹製パンパイプと間に合わせのレコーディング・スタジオ―ソロモン諸島アレアレの在来楽器をめぐる音楽的媒介　佐本英規
研究ノート
モンゴルで撮影された写真の歴史(1880–1930)―学術調査隊による写真コレクションを中心に　小長谷有紀

45巻4号 **論文**
考証館運動の生成―水俣病運動界の変容と相思社　平井京之介
資料
国立民族学博物館のビル・ヘンダーソン制作のトーテムポールについて　岸上伸啓

Senri Ethnological Studies (SES)



『Senri Ethnological Studies』は、各個研究、共同研究、機関研究などの成果を国外に向けて発表することを目的とし、特定の民族、地域、またはテーマに関する著作もしくは論文集、文献解題目録などを掲載しています。 出版は不定期。

no. 103　*Environmental Teachings for the Anthropocene: Indigenous Peoples and Museums in the Western Pacific,* edited by Atsushi Nobayashi and Scott Simon
no. 104　*World Whaling: Historical and Contemporary Studies,* edited by Nobuhiro Kishigami
no. 105　*Music and Marginalisation: Beyond the Minority-Majority Paradigm,* edited by Ursula Hemetek, Inna Naroditskaya, and Terada Yoshitaka
no. 106　*Hunter-Gatherers in Asia: From Prehistory to the Present,* edited by Kazunobu Ikeya and Yoshihiro Nishiaki

Senri Ethnological Reports (SER)

『国立民族学博物館調査報告(Senri Ethnological Reports)』は、各個研究、共同研究、機関研究などの成果をできるかぎり速やかに報告することを目的とし、特定の民族、地域、テーマに関する調査研究成果のうち、予備的報告を必要とするもの、文献目録、資料集成など、資料的性格をもつものを掲載しています。 使用言語は、日本語・外国語を問いません。 出版は不定期。

151号　*Исследователь Монголии А.Д.Симуков: Письма, Дневники, Документы,* составители Юки Конагая, Наталия Симукова
152号　*Sur la notion de culture populaire au Moyen-Orient: Approches franco-japonaises croisées,* sous la direction de Dominique Casajus, Tetsuo Nishio, François Pouillon, and Tsuyoshi Saito

TRAJECTORIA

TRAJECTORIA is an international multimedia peer-reviewed journal situated at the intersection of anthropology, heritage studies, museum studies, and the arts. It is published by the National Museum of Ethnology in Osaka, Japan.

Vol. 2 **Special Theme**
Confronting Museums: Collaboration, Reception, and Experiment in “Tabuluja (Wake Up!)” and “New York, just another city”
Introduction　Mihai Andrei Leaha
Tabuluja (Wake Up!)　Rose Satiko Gitirana Hikiji, Jasper Chalcraft, and Shambuyi Wetu
New York, just another city　André Lopes and Joana Brandão
Discussion: Dialogue over Time　Mihai Andrei Leaha, Rose Satiko Gitirana Hikiji, Jasper Chalcraft, André Lopes, and Joana Brandão
Film
Muakai’s Wedding　Su Hung-En
Lives and Deaths between Ebbs and Flows　Futuru C. L. Tsai
Article
The Taiwan International Ethnographic Film Festival and the Rise of Indigenous People Documentaries in Taiwan　Hu Tai-Li
Carte Blanche
The Museum of Mental Furniture　An van. Dienderen, Rosine Mbakam and Thomas Bellinck with a first guest contribution by Hugo DeBlock

民博通信Online

『民博通信Online』は、本館において実施している個々の研究プロジェクトについて、その学術的な特色や独創的な点、導きだされた成果などを、研究者や一般の方々にわかりやすく発信する雑誌です。 2019年度からオンライン化され、電子ブックになりました。

No.2 **Final report**
基幹研究　民博が所蔵するアイヌ民族資料の形成と記録の再検討
データベース公開がはじまりの一歩　齋藤玲子
基幹研究　民博所蔵「朝枝利男コレクション」のデータベースの構築―オセアニア資料を中心に
データベース「朝枝利男コレクション」の特徴と残された課題　丹羽典生
基幹研究　ネパールのガンダルバ映像音響資料に関する情報共有型データベースの構築
1980年代のサーランギ音楽の共有化　南 真木人
基幹研究　中南米地域の文化資料のフォーラム型情報データベースの構築
時空間をこえたつながりを目指して　八木百合子
特別研究　食料生産システムの文明論
食が生まれる瞬間と脈絡を考える　野林厚志
共同研究　現代日本における「看取り文化」の再構築に関する人類学的研究
「死」と「死にゆくこと」の人類学―「看取り文化」の新たな地平に向けて　浮ヶ谷幸代
共同研究　捕鯨と環境倫理
世界の捕鯨を考える　岸上伸啓
共同研究　音楽する身体間の相互作用を捉える―ミュージッキングの学際的研究
拡張するミュージッキング研究　野澤豊一
共同研究　物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究
沙漠社会に見る適応と移動―アラビア半島の衣装と住居から考える　縄田浩志
共同研究　テクノロジー利用を伴う身体技法に関する学際的研究
情報通信技術との共生の時代における身体技法論の更新　平田晶子

No.3 **Start up**
基幹研究　データベース「焼畑の世界―佐々木高明のまなざし」の国際化と学際研究の展開
五木村での「佐々木高明の見た焼畑」展―フォーラム型展示の可能性を探る　池谷和信
基幹研究　津波の記憶を刻む文化遺産―寺社石碑データベースのフォーラム型情報ミュージアムへの改良
フォーラム型情報ミュージアムとしての「津波の記憶を刻む文化遺産―寺社石碑データベース」　日高真吾
基幹研究　セネガルにおける諸民族文化の映像記録を題材とする情報強化
ソニンケによる「文化週間」の映像データベースの構築　三島禎子
共同研究　日本列島の縄飼文化に関するT字型学際共同アプローチ―野生性と権力をめぐって
権力と結びつく野生性―縄飼文化から考える　卯田宗平
共同研究　戦争・帝国主義と食の変容―食と国家の関係を再考する
戦争と食の多様な関係　宇田川妙子
共同研究　海外フィールド経験のフィードバックによる新たな人類学的日本文化研究の試み
「人類学back home」に向けて　片岡 樹
共同研究　環北太平洋地域の先住民社会の変化、現状、未来に関する学際的比較研究―人類史的視点から
北太平洋先住民社会に関する比較研究構想　岸上伸啓
共同研究　月経をめぐる国際開発の影響の比較研究―ジェンダーおよび医療化の視点から
月経衛生対処という開発介入とローカルな月経観、女性の身体　新本万里子
共同研究　不確実性のなかでオルタナティヴなコミュニティを問う―モノ、制度、身体のからみあい
人とモノを媒介する場所という視座　森 明子
共同研究　「描かれた動物」の人類学―動物×ヒトの生成変化に着目して
動物描写から「人と動物」を再考する　山口未花子
共同研究　先住民と情報化する社会の関わり
デジタル時代の先住民研究を目指して　近藤祉秋

本館助成による館外出版物

現代世界の呪術―文化人類学的探究　川田牧人・白川千尋・飯田卓編　春風社
捕鯨と反捕鯨のあいだに―世界の現場と政治・倫理的問題　岸上伸啓編　臨川書店
応援の人類学　丹羽典生編　青弓社
世界を環流する〈インド〉―グローバリゼーションのなかで変容する南アジア芸能の人類学的研究　松川恭子・寺田吉孝編　青弓社
会計学と人類学のトランスフォーマティブ研究　出口正之・藤井秀樹編　清水弘文堂書房
宗教性の人類学―近代の果てに、人は何を願うのか　長谷千代子・別所裕介・川口幸大・藤本透子編　法藏館

学術情報リポジトリ

「みんぱくリポジトリ」は、NII(国立情報学研究所)のJAIRO Cloud(共用リポジトリサービス)を利用して、館内出版物「Senri Ethnological Studies」、「国立民族学博物館調査報告(Senri Ethnological Reports)」、「国立民族学博物館研究報告」「国立民族学博物館研究報告別冊」、「民博通信」、電子ジャーナル「TRAJECTORIA」等に加えて、外部で出版されたもののうち、利用許諾が取得できた論文を随時公開しています。 その数は、令和2年度末時点で約5,757コンテンツで、論文のダウンロード利用数は月平均約42,334件です。

博物館の共同利用

共同利用型科学分析室

設置目的

本館は、民族資料や文化財、博物館資料を対象に、一次的な非破壊分析や材質分析がおこなえる非破壊分析・材質分析装置システムを所有しています。 共同利用型科学分析室は、非破壊分析・材質分析装置システムを文化人類学やその周辺領域の学問分野において、さまざまな組織や研究者がより積極的に活用でき、科学的研究に基づいた共同利用の促進に資することを目的として、平成29年12月に設置されました。

所有機器

X線透視CTスキャン装置
三次元積層造型機（3Dプリンター）
三次元形状計測装置
熱分解ガスクロマトグラフ
イオンクロマトグラフ
蛍光X線分析装置
恒温恒湿槽
フーリエ変換赤外分光光度計（FT-IR）
デジタルマイクロスコープ

X線透視CTスキャン装置

三次元積層造型機（3Dプリンター）

利用実績

平成30年度

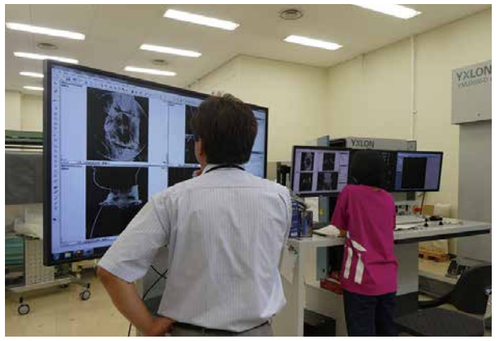
申請件数	利用機関
9件	国立文化財機構、京都造形芸術大学、三井記念美術館、滋賀県教育委員会、長浜市長浜城歴史博物館、滋賀県日野町教育委員会等

令和元年度

申請件数	利用機関
13件	一橋大学、北海道大学、天理大学附属天理参考館、大津市歴史博物館、気仙沼市教育委員会、米原市教育委員会、大徳寺、能生白山神社、神恵院観音寺、馬見岡綿向神社等

令和2年度

申請件数	利用機関
8件	金沢学院大学、京都府京都文化博物館、天理大学附属天理参考館、岩手県釜石市文化スポーツ部文化振興課、大徳寺、能生白山神社、見岡綿向神社、糸魚川市教育委員会等



X線CTスキャン装置による調査

蛍光X線分析装置による調査

利用について

非破壊分析・材質分析装置システムの利用については、企画課標本資料係で受けつけています。

企画課標本資料係
TEL　06-6878-8392
FAX　06-6878-8242
Mail　hyohons@minpaku.ac.jp

図書室

利用案内

開室日時　月・火、木曜日～土曜日　10:00～17:00（入室は16:30まで）
休室日　日曜日、祝日、水曜日、博物館休館日および年末年始（12月28日～1月4日）
利用資格　どなたでもご利用できます。貸出には、図書室利用証が必要です。（要登録）
資料によっては利用できない場合があります。事前にお問合せください。
Webサイト　https://www.minpaku.ac.jp/sharing/library

1. 教育・研究支援

本館が所蔵する文献図書資料は、専門性の高い蔵書構成となっています。 マイクロフィルムリーダーを4台設置し、カラーコピー機での複写サービスもおこなっています。 カウンターには司書資格を有するスタッフが常駐し、大学共同利用機関として、教育・研究活動の支援体制を整えています。

2. 文献図書資料の国立情報学研究所を介した目録情報公開を促進

令和2年度は世界20言語の図書を目録登録し、636,767冊が検索可能となりました。また、NACSIS-CAT（全国規模の総合目録データベース）への遡及入力事業として、マイクロ資料2,687件（図書2,562件、新聞雑誌4タイトル125件）を登録しました。 98%が入力済みとなりました。

3. 社会貢献など

一般利用者も館外貸出利用ができます。 令和2年度の一般利用者の登録者数は155名、館外貸出冊数は1,076冊です。

4. 蔵書検索

本館が所蔵する文献図書資料は、インターネット環境があればパソコンや携帯電話を使って、どこからでも検索することができます。 令和2年度の館外からの検索回数は、パソコン1,739,933回、携帯電話で217回ありまでした。

図書室カウンター

雑誌コーナー

保存箱に収納されたアーカイブズ資料

民族学研究アーカイブズ

本館では創設以来、文化人類学・民族学研究者の研究ノートや原稿、フィールドで作成した映像・録音記録などさまざまな資料を集積してきました。これらを活用すべく情報運営会議の下に設置された「アーカイブズ部会」により、令和2年度も継続してアーカイブズ資料の実態調査と目録作成及びデジタル化をおこないました。今後も作業を継続し、順次公開していくことを目指します。

●青木文教（あおき ぶんきょう）アーカイブ
●石毛直道（いしげ なおみち）アーカイブ
●泉 靖一（いずみ せいいち）アーカイブ
●岩本公夫（いわもと きみお）アーカイブ
●内田勣（うちだ いさお）・1930年代台湾および日本を中心とした東アジア文化アーカイブ
●梅棹忠夫（うめさお ただお）アーカイブズ
●江口一久（えぐち かずひさ）・アフリカ-アジアの言語アーカイブ
●大内青琥（おおうち せいこ）アーカイブ
●沖 守弘（おき もりひろ）・インド民族文化資料アーカイブ
●桂米之助（かつら よねのすけ）アーカイブ
●鹿野忠雄（かの ただお）アーカイブ
●木内信敬（きうち のぶゆき）「ジプシー(ロマ)研究」アーカイブ
●菊沢季生（きくざわ すえお）アーカイブ
●栗田靖之・別府春海（くりた やすゆき・べふ はるみ）・日本人の贈答アーカイブ
●小林保祥（こばやし やすよし）・台湾南部原住民族アーカイブ
●篠田統（しのだ おさむ）アーカイブ
●杉浦健一（すぎうら けんいち）アーカイブ
●西北ネパール学術探検隊1958年データカードアーカイブ
●土方久功（ひじかた ひさかつ）アーカイブ
●馬淵東一（まぶち とういち）アーカイブ
●丸谷彰（まるたに あきら）・朽木村針畑生活資料アーカイブ
●「日本文化の地域類型研究会」アーカイブ

梅棹資料室

初代館長梅棹忠夫の残した、フィールドノート、スケッチ、写真、メモ、原稿、著作、書評など、知的生産の素材と、そこから生産された多種多様かつ膨大なアーカイブズ資料を整備・保管する収蔵施設として、平成25年4月に「梅棹資料室」を設置しました。 専属担当者（アーキビスト）が資料を分析・整理し、主に学術研究等に活用するための支援をおこなっています。

資料 令和２年度

資料の利用

本館の所蔵する民族学資料は、館内外における諸分野の研究や大学教育、他の博物館への貸付などを通し、社会還元されています。
民族学資料の利用に関するお問い合わせは、「民族学資料共同利用窓口」で受け付けています。
令和2年度受付件数は、156件でした。

民族学資料共同利用窓口
TEL・FAX　06-6878-8213
URL　https://www.minpaku.ac.jp/sharing/guide/helpdesk

1. 標本資料の貸付件数　6件　貸付資料数　157点

上記のうち、展覧会の展示点数全体における本館資料の貸付件数の占める割合が50パーセントを超えるものは、下記のとおりです。

貸付先	展覧会名	貸付資料	展覧会期間	貸付点数／全体の展示点数・貸付資料が展示資料に占める割合
堺市博物館	無形文化遺産シリーズ展「 アジアの伝統演劇 」	仮面劇用衣装、仮面、京劇衣装	令和2年11月3日～11月29日	23点/24点(96%)

2. 標本資料の特別利用（原板使用・写真撮影・熟覧）件数 75件 4,159点

上記のうち、大学関係12件（調査研究、著作の参考資料としての写真利用など）、博物館関係13件（調査研究、展示に係る写真利用など）

標本資料収蔵庫

3. 映像・音響資料の利用件数 72件　貸出点数 404点

上記のうち、大学関係20件 112点、 研究用（個人・研究会など）20件 157点

4. 文献図書資料

文献複写受付 3,714件（うち大学などの機関 2,256件）文献複写依頼 174件
現物貸借受付 542件（うち大学などの機関 520件）現物貸借依頼 249件
特別利用（原板使用・写真撮影）4件（うち調査研究、著作への写真使用など1件）

5. 研究アーカイブズ資料

閲覧件数 21件　特別利用 13件　貸付 1件

資料の保存

本館では、研究や展示などに使用する各種の学術資料を収集しています。 資料の大半をしめる標本資料には、虫やカビの害を受けやすい有機素材が多く使われているため、資料の防虫・殺虫対策には特別な注意を払っています。 たとえば海外からの新着資料には、収集地と日本の自然環境や生態系が大きく異なるため、燻蒸庫で薬剤による殺虫・殺菌処理をおこなっています。 一方、日本国内に入ってから加害された資料には、できるかぎり薬剤を用いない殺虫処理法をおこなうなど、収集地や加害環境、材質の違いを考慮に入れながら殺虫処理法を使い分けています。 このような本館特有の防虫・殺虫対策を有効に実施するため、平成19年に、大型のウォーク・イン高低温処理庫を新設するとともに、既存の燻蒸庫を、二酸化炭素処理や低酸素濃度処理もおこなえる多機能燻蒸庫に改修しました。 また、燻蒸使用後の薬剤処理を目的に、触媒燃焼式の除害装置を設置することで、「ひとに、ものに、自然にやさしい」資料管理を実現しています。 これらのシステムは、本館が、他大学などの研究者とともに資料の有効活用を支えるためにおこなっている保存科学研究の成果のひとつでもあります。

ウォーク・イン高低温処理庫

二酸化炭素処理や低酸素濃度処理もおこなえる多機能燻蒸庫

大学生・教員のためのみんぱく活用

研究の成果、展示物や所蔵資料、文化・学術情報、施設などを大学の教育と研究にひろく活用していただくための制度を設けています。
Webサイト　https://www.minpaku.ac.jp/teacher/university/manual

展示場の利用

教員同伴のもと、大学の講義・セミナーおよび公式行事（例:新入生オリエンテーション等）で展示場を利用する場合、事前申請をすると観覧料が無料となります。
見学に教員が同行しない場合、または専門学校及び専修学校（専門課程に限る）の授業で見学する場合、シラバス等、授業内容が明記された資料を提示すると、割引料金で観覧できます。

展示場の利用

図書室の利用

文化人類学・民族学を中心とした文献図書資料が約69万点。
大学の授業等での図書室見学も受けつけています。

標本資料の利用

世界中から収集した標本資料が約34万5千点以上。
大学における教育や研究目的で利用する場合、利用料は無料です。

映像・音響資料の利用

みんぱくが制作したものなど、世界各地の映像・音響資料が約7万点。
824番組あるビデオテークはDVDで視聴できます。
また、オンライン授業で活用いただけるよう一部の映像資料については、インターネットを利用したストリーミング配信をしています。

データベースの利用

データベースの利用

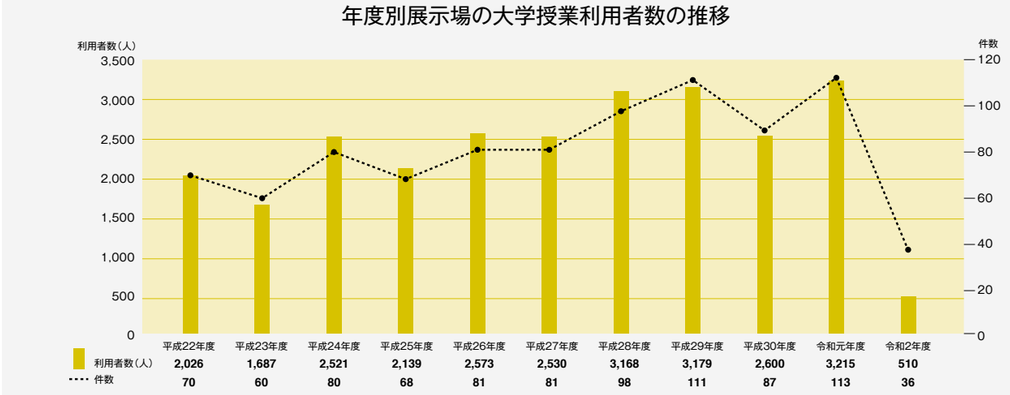
所蔵資料や、研究資料・成果の膨大な情報が自由に検索できます。

若手研究者の育成

若手研究者による本館における共同利用を促進するため、「みんぱく若手研究者奨励セミナー」を開催しています。セミナーでは、本館教員による基調講演のほか、参加者による発表と討論を2日間の日程でおこないます。また、若手を対象とした各種共同利用制度や施設紹介の一環として図書館や収蔵庫見学も実施します。

みんぱく若手研究者奨励セミナー

令和2年度利用実績　件数36件　利用者数510名（無料利用）



大学・短大等からの団体入館者件数
大阪大学（111）大阪成蹊大学（32）関西大学（40）京都橘大学（23）近畿大学（50）神戸女子大学（36）国際ファッション専門職大学（46）成安造形大学（21）摂南大学（23）阪南大学（27）（以上、国内1団体20人以上）などから、37団体676人

展示

展示の理念と構成

みんぱくにおける展示は、文化人類学・民族学とその関連諸分野の研究成果を多様なメディアを通じて社会に公開し、世界各地の文化についての認識を深めるとともに、文化の違いを超えた相互理解の場を提供することを目的としています。展示は、本館展示と特別展示・企画展示で構成されます。本館展示では、世界の文化の多様性と共通性についての広い理解が得られるよう、常設的な展示をおこなっています。一方、特別展示・企画展示は、特定のテーマについて深く掘り下げた内容の展示を、期間を限って、年に数回開催するものです。

本館展示

本館展示は、地域展示と通文化展示から構成されています。

地域展示では、世界をオセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、それに日本を含むアジア各地域に分け、オセアニアを出発して東回りに世界を一周し、最後に日本にたどり着く構成をとっています。日本の文化を世界各地の文化との関連の中で理解できるように配慮したものです。みんぱくでは、創設以来、世界の民族文化に優劣はなく、すべて等しい価値をもつという認識にもとづいて、展示をつくり上げてきました。それぞれの文化に見られる違いは、人類の営みの豊かな多様性を示すものとして展示されています。また、世界の人びとの暮らしがよくわかるように、衣食住などの生活用品を中心とした展示になっているのも特徴のひとつです。

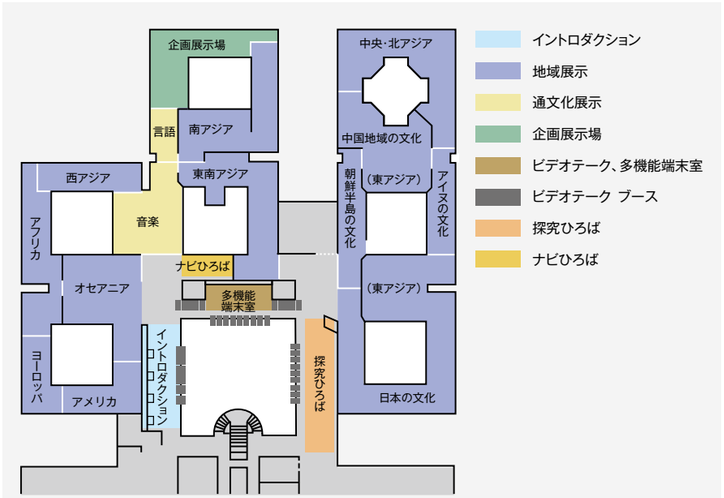
一方、通文化展示とは、地域単位でなく、特定のジャンルを取り上げて広く世界の民族文化を通覧する展示で、現在は音楽と言語についての展示を常設しています。

本館展示は、1977年の開館以来、世界の社会・文化的状況や学問のありかたなどが大きく変化していることにともない、2008年度から展示の新構築を進め、2016年度に完了しました。研究の進展に応じて引き続き展示を更新していきます。

本館展示場内に設けている企画展示場では、期間を限って、現代的な問題や最先端の研究成果など個別のテーマを取り上げた展示をおこなっています。この企画展示場は、国内外の大学等の最新の研究動向を迅速に展示に結びつける、共同利用展示場としても活用しています。

みんぱくでは、情報機器を活用した展示を積極的に展開しています。一つ目は「ビデオテーク」です。開館時に「映像情報自動送出装置」として世界に先がけて開発したもので、映像を通じて、本館展示場内で紹介されている民族の生活や、その民族が生み出したモノが実際に用いられている様子を確認することができます。現在は824本の映像番組を自分で選択して視聴することができます。二つ目は「みんぱく電子ガイド」です。1999年に世界ではじめての映像と音声による携帯型の展示解説装置として開発したもので、展示資料が、どのような場所で、どのような人びとによって、どのように使われているかなど、さまざまな情報を得ることができます。現在はスマートフォンを用いて、手元に表示される展示場の地図で自分の位置を確認しながら、展示資料の解説映像をみることができます。この電子ガイドは2020年に、館内施設の案内やビデオテークとの連携などの新しい機能を持ったシステムとして生まれ変わりました。これらの映像については多言語化を進めており、ビデオテークでは824番組の中から135番組について9言語に対応しました。電子ガイドコンテンツ328番組は、2019年度に作成した英語字幕データを基に、7言語分の機械翻訳を行い、9言語による視聴を可能にしました。

また、探究ひろばでは、情報検索端末を用いて展示資料に関するさまざまな情報を検索したり、比較したりすることができ、関連する書籍やみんぱくの刊行物を閲覧することもできます。



みんぱく電子ガイド

展示場内の施設や展示物を館内地図により案内するとともに、資料が、どのような場所で、どのような人びとによって、どのように使われているかを、解説した映像や情報を見ることができます。また、日本語、英語、中国語をはじめ、9言語に対応しています。

地域展示

地域展示では、世界を大きくオセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、西アジア、南アジア、東南アジア、中央・北アジア、東アジアの9地域に分けています。（各展示場名横の数字は展示場面積）

オセアニア 660㎡

移動と拡散　海での暮らし　島での暮らし
外部世界との接触　先住民のアイデンティティ表現

海がほとんどの面積を占めているオセアニアには、大小数万をこえる島々が点在しています。そこには、発達した航海術をもち、根栽農耕を営む人びとが暮らしてきました。「移動と拡散」「海での暮らし」「島での暮らし」では、資源の限られた島環境で、さまざまな工夫をして生活してきた様子を展示しています。「外部世界との接触」「先住民のアイデンティティ表現」では、外の世界と出会うなかで、人びとが伝統文化をどのように継承、発展させてきたかを紹介します。

アメリカ 320㎡

出会う　食べる　着る
祈る　創る

広大なアメリカ大陸には、極地から熱帯雨林まで、さまざまな自然環境が見られます。人びとは、それぞれの環境に応じた生活を営んできました。一方で、ヨーロッパ人による征服と植民の歴史を経験したこの地には、日常生活の隅々まで、外来の文化が浸透していきました。ここでは衣、食、宗教に焦点をあて、アメリカ大陸の多様性と歴史の重なりを明らかにするとともに、土着の資源に現代的価値を見いだそうとする芸術家や工芸家のすがたを紹介しています。

ヨーロッパ 250㎡

生業と一年　宗教・信仰
産業化とともに　変動するヨーロッパ

ヨーロッパは、16世紀から20世紀にかけて、キリスト教や近代の諸制度をはじめ、さまざまな技術や知識を世界各地に移植しました。現代、この流れが逆転するなかで、世界中からの移民とともに、彼らの文化も社会の一部となりつつあります。ここでは、時間の流れに注目しながら伝統的な生活様式と宗教、近代の産業化、さらに現代の新しい動きが層をなしてヨーロッパをつくりあげていることを示しています。

アフリカ 500㎡

歴史を掘り起こす　都市に集う　働く
装う　祈る　アフリカの今

人類誕生の地とされるアフリカは、常に外部世界と結びつきながら変化を重ねてきました。私たちが、現在目にするアフリカ大陸の中、文化や言語の多様性は、そうした変化の結果にほかなりません。この展示では、人びとの「歴史を掘り起こす」営みに目を向けるとともに、現在のアフリカに生きる人びとの生活のありさまを、「都市に集う」「働く」「装う」「祈る」という4つの側面に分けて紹介しています。この展示が、私たちと同時代に生きるアフリカの人びとへの共感を育むものであることを願っています。

西アジア
310㎡

信仰
砂漠のくらし
パレスチナ・ディアスポラ
グローバル文化としてのコーヒー
音文化とポップカルチャー

中東ともよばれる西アジアの人びとは、自分たちが暮らす地域をマシュリク（日出ずる地）とよび、マグリブ（日没する地）とよばれる北アフリカと深い関係を保ってきました。乾燥地帯が大部分を占め、遊牧を生業とする人びとが移動する一方、バグダードやカイロなどでは古来より都市文化が栄えてきました。多くの住民はムスリムですが、ユダヤ教やキリスト教発祥の地でもあります。地球規模の変動の時代に移りゆく人びとの暮らしを、信仰、砂漠の生活、女性の装い、音楽と芸能をテーマに紹介します。

南アジア 600㎡

宗教文化―伝統と多様性　生態となりわい
都市の大衆文化　染織の伝統と現代　躍動する南アジア

南アジア地域は、北部の山岳地帯から西はアラビア海沿岸、東はベンガル湾沿岸にいたるさまざまな自然環境のもと、多様な宗教や文化、生活様式をもつ人びとが共存しあう知恵を育んできました。経済発展が著しい現代においても、その知恵は保たれています。この展示では、宗教文化や生業・工芸の多様性、都市を中心とした活気あふれる大衆文化、またグローバル化のなかで花ひらく染織文化のすがたを紹介します。

東南アジア 730㎡

生業　村の日常　都市の風景　芸能と娯楽

森と海に囲まれた東南アジア。熱帯・亜熱帯の気候にくらす人びとは、早朝の涼しい時間から働きはじめ、40度近くに達する日中は屋内で昼寝などをして暑さをしのぎます。夕方、スコールが通り過ぎた後は、少し暑さが和らぎ、人びとは買い物や農作業に出かけます。日が落ちて涼しくなると、友人や家族と屋台に出かけたり、演劇を見たりして余暇を楽しみます。本展示場では、「東南アジアの1日」をテーマに、その多彩な民族文化を紹介します。

中央・北アジア 710㎡

自然との共生　社会主義の時代　中央アジア
モンゴル　シベリア・極北

中央・北アジアは、ユーラシア大陸の北東部を占める広大な地域です。古くから東西南北をむすぶ交渉路としての役割を担い、多様な民族が行き交ってきました。20世紀に社会主義を経験した後、市場経済に移行し、グローバル化の波にさらされながら伝統を再評価する動きがみられます。「自然との共生」「社会主義の時代」というふたつの共通テーマをふまえて、「中央アジア」「モンゴル」「シベリア・極北」の3つの地域に生きる人びとの今を紹介します。

東アジア 朝鮮半島の文化 330㎡

住の文化　精神世界　食の文化　衣の文化
知の文化　あそびの文化

朝鮮半島の人びとは、外部の民族から影響を受けつつ、独自の文化を育んできました。有史以前は東シベリアの諸民族から、その後は中国から取り入れた文化要素を、独自のものに再編し、世界に例を見ないほど高度に統合された文化を獲得してきました。近代には日本に植民地支配され、独立後にはふたつの分断国家として急速な近代化を進めました。そして現代には、積極的に世界に進出する韓国人や、コリア系の海外生活者の姿も見られます。こうした文化の歴史的な重なりや躍動性を、精神世界、衣食住、あそびと知をテーマに紹介します。

東アジア 中国地域の文化 660㎡

生業　民族楽器　チワン族の高床式住居　装い　工芸
台湾原住民族　宗教と文字　華僑・華人　継承される伝統中国

中国地域では、広大な面積と高低差のある地形がうみだす多様な自然環境のもと、さまざまな民族文化が育まれてきました。漢族が人口の90%以上を占め、平野部を中心に全国に居住しています。大陸の55の少数民族は、おもに西南、西北、東北地方の高地や草原に居住しており、台湾には漢族のほか先住のオーストロネシア系民族が居住しています。また、世界各地に、中国を故郷とする華僑・華人がくらしています。多様な生活環境から生みだされたさまざまな民族の文化を、歴史や地域性をふまえ、生業、装い、楽器、住居、工芸、宗教と文字、漢族の婚礼や祖先祭祀、台湾の原住民族、華僑・華人をテーマに紹介します。

東アジア アイヌの文化 270㎡

アイヌとは　カムイと自然　現代そして未来

アイヌは、北海道を中心に日本列島北部とその周辺にくらし、寒冷な自然環境のもとで独自の文化をはぐくんできた先住民族です。江戸時代に幕府による支配が始まり、明治時代に同化がすすめられると、アイヌは差別を受け生活に困るようになりました。しかし近年、日本政府はその歴史的事実を認め、アイヌ民族を尊重した政策に取り組みはじめました。ここでは、伝統を継承しつつ、あらたな文化を創造する人びとの姿を紹介します。

東アジア 日本の文化 1,460㎡

祭りと芸能　日々のくらし　沖縄のくらし
多みんぞくニホン

北海道から沖縄県まで、南北に細長い日本列島は、多様な自然に恵まれています。こうした環境のなかで、隣接する諸文化と影響しあいながら、さまざまな地域文化を展開してきました。また、近年では多くの外国人が私たちの隣人として生活をともにしています。ここでは、「祭りと芸能」、「日々のくらし」、「沖縄のくらし」、「多みんぞくニホン」という4つの角度から、日本文化の様相を展示しています。

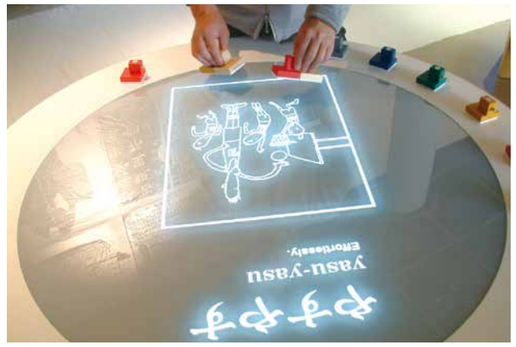
通文化展示

音楽 550㎡

太鼓　荒ぶる音　**ゴング**　伝え交わる音
チャルメラ　演じる音　**ギター**　歴史の中の音

私たち人類は、音や音楽によって意志や感情をつたえ、自分の位置を知り、訪れたことのない場所や過ぎ去った時に思いを馳せ、心を奮い立たせたり慰めたりしてきました。また、神仏や精霊など見ることのできない存在と交わってきました。この展示では、音や音楽と私たちの存在とのかかわりを、世界各地の例を通して考えます。

言語 170㎡



言葉を構成する要素　**言語の多様性**　**世界の文字**

人びとが出会い触れあうところではコミュニケーションが不可欠で、さまざまな情報が常に何らかの方法でやりとりされています。なかでも音声や身ぶりを媒体とすることばは、高度に発達した伝達手段で、感情から科学的な知識まで多くの情報を空間や世代を超えて伝えることができます。文化の多様性を反映する存在であると同時に、人間のもつ認知能力や創造性などを映す窓ともなっていることばは、人類のもつかけがえのない資産です。

インフォメーション・ゾーン

イントロダクション

イントロダクション展示は、民博の展示の見方、文化人類学・民族学の考え方を直感的に身につけていただけるよう工夫した、文字通りのイントロダクション（＝導入）のための展示です。ここから世界への旅が始まります。

ビデオテーク

世界の人びとの儀礼や芸能、生活の様子、あるいは展示資料の背景を紹介する映像展示として、昭和52年に世界ではじめてみんぱくが開発しました。その後改良を重ね、マルチメディア番組や研究者がフィールドワークで取材した貴重な研究用映像資料も視聴できるようになりました。平成24年からの現行システムでは、番組をより多角的に検索できるようメニュー画面を充実させるとともに、ブース内部を明るくし、視聴環境を整えました。令和元年度からは、一部のブースを更新し、高画質映像の上映と電子ガイドとの連携に対応し、多言語化を進めています。さらに、車いすで利用いただけるブースを用意しました。
（令和2年度リクエスト件数：16,538件）

探究ひろば

リサーチデスク　調べて深める
研究の現場から　知ってつながる
世界をさわる　感じて広がる

展示資料の情報を検索して調べることのできる「リサーチデスク」、研究者が取り組んでいる調査を紹介する「研究の現場から」、展示資料を見てさわって理解する「世界をさわる」の3つのコーナーを通して、民博の研究や展示をより詳しく知ることができます。展示場で見た資料についてもっと知りたい、民博の研究者って何を調査しているの、モノと身近に接してみたい、という探究心を満たし、知識をさらに深める場としてご活用いただけます。

特別展示

「先住民の宝」

令和2年10月1日（木）～12月15日（火）

主催　国立民族学博物館
実行委員長　信田敏宏
実行委員
［館内］池谷和信、岸上伸啓、齋藤玲子、鈴木 紀、野林厚志、
　　南 真木人、川瀬 慈
［館外］阿部健一（総合地球環境学研究所）
　　北原次郎太 モコットゥナシ（北海道大学）
　　久保正敏（国立民族学博物館 名誉教授）
　　庄司博史（国立民族学博物館 名誉教授）
　　立川陽仁（三重大学）
　　田村将人（国立アイヌ民族博物館設立準備室）
　　本谷裕子（慶應義塾大学）
協力　UMAKノルウェー・アークティック大学博物館・芸術学院
　　公益財団法人アイヌ民族文化財団
　　国立アイヌ民族博物館
　　株式会社札幌丸井三越
　　集英社「週刊ヤングジャンプ」
　　一般財団法人千里文化財団
　　総合地球環境学研究所
　　北海道大学アイヌ・先住民研究センター
　　北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター境界研究ユニット（UBRJ）

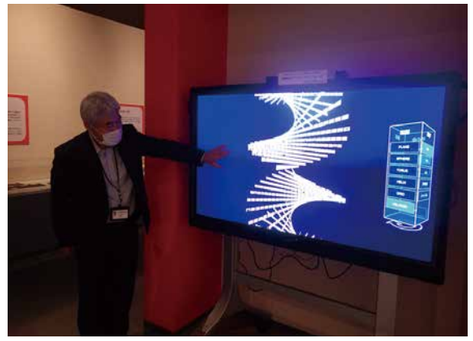
世界には、約3億7,000万人の先住民が暮らしており、その民族の数は少なくとも5,000と言われています。本特別展でいう宝とは、圧政や差別に苦しみながらも、日々を力強く、そして希望を失わず生きてきた彼らにとっての心の拠り所であり、民族としての誇りでもあります。先住民の思いをのせた約740点におよぶ展示品とともに、先住民の世界を紹介する展示となりました。

企画展示

梅棹忠夫生誕100年記念企画展「知的生産のフロンティア」

令和2年9月3日（木）～12月1日（火）

主催　国立民族学博物館
実行委員長　飯田 卓
実行委員　［館内］丸川雄三
　　［館外］小長谷有紀（日本学術振興会）
　　久保正敏（国立民族学博物館 名誉教授）
　　高野明彦（国立情報学研究所）
協力　一般財団法人千里文化財団
学術協力　国立情報学研究所 高野研究室



梅棹忠夫アーカイブズを閲覧するための液晶モニター

みんぱく初代館長を務めた梅棹忠夫（1920-2010）は、多数の学術調査に参加した知の先覚者です。彼は、調査成果を論文などにまとめる方法を『知的生産の技術』（1969年）で述べましたが、具体的に資料を加工する過程は示しませんでした。この企画展では、梅棹のアーカイブズ資料とデジタル・データベースで彼の方法の舞台裏を紹介しました。

共催展示

「佐々木高明の見た焼畑――五木村から世界へ」

令和2年10月3日（土）～12月13日（日）
五木村歴史文化交流館（ヒストリアテラス五木谷）
担当者　池谷和信

熊本県五木村の郷土博物館において、本館との共催によって佐々木高明氏の撮影した五木村での焼き畑の写真を中心にして当時の村の暮らしを紹介しました。同時に、五木村の事例から日本（九州）やアジア（台湾・東南アジアなど）の食と農の未来のあり方を考えました。

「梅棹忠夫生誕100年記念　知的生産のフロンティア」

令和3年1月13日（水）～3月14日（日）
京都大学総合博物館
担当者　飯田 卓

本館で2020年秋に開催した梅棹忠夫生誕100年記念企画展「知的生産のフロンティア」との連動企画です。梅棹の学生時代の受講ノート、スケッチ、フィールドノートや、学術調査の際に収集した資料、また、京都大学と関係する資料を新たに加えた展示を開催しました。

巡回展示

「驚異と怪異――モンスターたちは告げる」

令和2年6月23日（火）～8月16日（日）
兵庫県立歴史博物館
担当者　山中由里子

本展では、国立民族学博物館所蔵の民族資料を中心に、人形、竜、怪鳥、一角獣など、さまざまな世界の想像上の生き物について紹介するとともに、警告・凶兆（モンストルム）を語源とする怪物（モンスター）の文化史的な意味について考えました。

デジタル触地図［国立民族学博物館触知案内板］

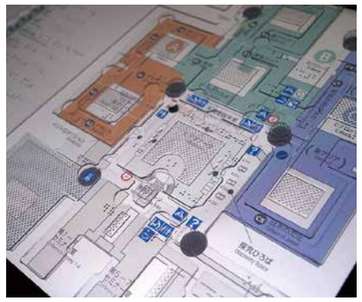
デジタル触地図［国立民族学博物館触知案内板］は、視覚に障がいのある人とない人が、分け隔てなく館内情報にアクセスできるインタラクティブな触地図システムです。タッチパネルディスプレイ上に設置したフィンガーガイドと音声案内との連動によって、館内の位置情報や展示案内を触覚と聴覚から得ることができます。現在、本館の展示場に3台設置され活用されています。
このデジタル触地図は、国立民族学博物館の文化資源プロジェクトにより開発されました。本プロジェクトのメンバーである九州大学大学院芸術工学研究院の平井康之教授、山口大学国際総合科学部の冨本浩一郎講師が主導してデザインしました。

受賞

「2020年度グッドデザイン賞」
主催：公益財団法人 日本デザイン振興会
受賞対象：デジタル触地図［国立民族学博物館触知案内板］
受賞企業：国立民族学博物館、九州大学、山口大学

「IAUD国際デザイン賞2020 銀賞（公共空間デザイン部門）」
主催：IAUD(一般財団法人 国際ユニヴァーサルデザイン協議会)
受賞対象：デジタル触地図［国立民族学博物館触知案内板］
受賞企業：国立民族学博物館、九州大学、山口大学

「UNIVERSAL DESIGN expert 2021（専門家賞）」
「UNIVERSAL DESIGN consumer 2021（消費者賞）」
主催：IUD(Institute for Universal Design ドイツ)
受賞対象：デジタル触地図［国立民族学博物館触知案内板］
受賞企業：国立民族学博物館、九州大学、山口大学

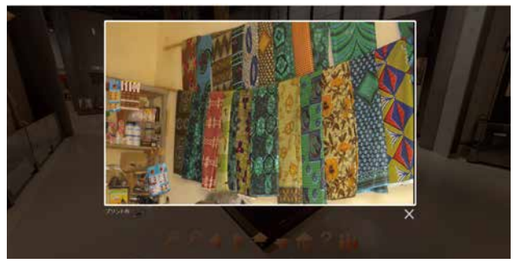


さまざまな賞を受賞したデジタル触地図
［国立民族学博物館触知案内板］

バーチャルミュージアム

みんぱくホームページでは、バーチャルミュージアムを公開しています。本館展示場を超広角カメラでくまなく撮影したもので、パソコンやスマートフォンで各展示場の様子をさまざまな角度から見ることができます。一部の展示資料については、解説映像を視聴することができます。また、これまでに本館で開催した特別展示や企画展示等の展示記録パノラマムービーも公開しています。

バーチャルミュージアム（アフリカ展示）



解説映像視聴画面

国際協力

JICA 課題別研修「博物館とコミュニティ開発コース」の実施 “Museums and Community Development”

本コースは、博物館の運営に必要な、収集・整理・保存・展示・教育に関する実践的技術の研修を実施し、博物館を通じて各国の文化の振興に貢献できる人材を育成するものです。従来から、国際協力機構（JICA）主宰の「博物館技術コース」の一環として、本館で約3週間にわたり「博物館学国際協力セミナー」を実施してきましたが、平成16年度からは、本館がJICAから全面的委託を受け、滋賀県立琵琶湖博物館と共同で、4ヶ月にわたる研修を「博物館学コース」として実施し、毎年、開発途上の国や地域から約10名を外国人受託研修員として受け入れています。 研修は、博物館の諸活動に直接かかわる人々に特化したコースとなっています。 平成24年からは東日本大震災後の状況を踏まえ、博物館資料の保安や防災のカリキュラムを強化するとともに、博物館運営について自らが立案し、実践・普及できるような研修項目、さらには観光関連分野との連携も追加しました。
平成27年度からは、「博物館とコミュニティ開発」と名称変更し、博物館が地域社会に果たす役割により重点を置いた研修を3ヶ月にわたり行いました。 令和2年度は、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大状況を鑑み、実施委託元であるJICAとの協議の結果、令和2年度実施予定分を繰り延べし、令和3年度遠隔での実施に向けて計画しています。 コースの名称と運営形態は発展的に更新していますが、博物館を通じた国際交流の促進というコースの目的は、一貫して継続しており、令和3年3月までに、世界各地からの研修修了者及びオブザーバーは61ヶ国・地域の268名におよび、国際的ネットワークを築いています。

ICOM Kyoto 2019

公開フォーラム（令和元年度）

民博での研修（令和元年度）

三重研修（令和元年度）

個別研修（予防保存）（令和元年度）

閉講式（令和元年度）

みんぱくフェローズ

これまで本館と関わりのあった海外の研究者、および本館と関連の深い国内外の研究機関を「みんぱくフェローズ」として位置づけ、そのネットワークを構築しています。
「みんぱくフェローズ」として約1,100件が登録されています。

フェローズ地域別一覧　令和3年3月31日現在

地域	
アジア・中東・オセアニア	632
ヨーロッパ	163
北米・中南米	202
アフリカ	64
	合計 1,061

社会連携

本館では、国内外の博物館や大学などとの学術連携を通して、文化資源の系統的、有機的活用を実践するためのネットワークづくりを試みてきました。
また、さまざまな団体と連携して、広く社会に貢献する事業や活動を展開しています。

貸出用学習キット「みんぱっく」

令和2年度　貸出期間　令和2年9月3日～令和3年3月31日
貸出件数 127件　利用者総数 17,274名

学校や各種社会教育施設を対象に、本館の研究成果をわかりやすく伝えることを目的として、学習キット「みんぱっく」の貸出を実施しています。「みんぱっく」は世界の国や地域の衣装や楽器、日常生活で使う道具や子どもたちの学用品などをスーツケースにパックしたもので、16種類28パックを用意しています。 異文化との出会いにおいてどのようにものを見つめ、それらと語らうことができるのか、その先にある物語をどう読みとるのかという、本館ならではのコンセプトで企画されています。

みんぱっく
「アイヌ文化にであう」

貸出パック

- ●極北を生きる―カナダ・イヌイットのアノラックとダッフルコート
- ●アンデスの玉手箱―ペルー南高地の祭りと生活
- ●ジャワ島の装い―宗教と伝統
- ●インドのサリーとクルター
- ●アラビアンナイトの世界
- ●イスラム教とアラブ世界のくらし
- ●ソウルスタイル―こどもの一日
- ●ソウルのこども時間
- ●ブリコラージュ
- ●アイヌ文化にであう
- ●モンゴル―草原のかおりをたのしむ
- ●あるく、ウメサオタダオ展
- ●世界のムスリムのくらし1―日常の中の祈り
- ●世界のムスリムのくらし2―同時代を生きる
- ●エチオピアのコーヒーセレモニー
- ●エチオピアをまとう―アムハラの装い

みんぱっく
「あるく、ウメサオタダオ展」

ワークショップ

本館の研究者の研究成果を社会に還元することをめざし、ものづくりなどの体験型プログラムを通して、世界の文化を紹介しています。

実施日	実施ワークショップ	講師
令和2年10月31日（土）・11月1日（日）	特別展「先住民の宝」関連ワークショップ 「ペーパークラフトでトーテムポールをつくろう」	田主 誠（版画・造形作家） 岸上伸啓
令和2年11月7日（土）・8日（日）	特別展「先住民の宝」関連ワークショップ 「アイヌの矢作りと模擬狩猟体験」	岡田恵介（公益財団法人アイヌ民族文化財団民族共生象徴空間運営本部 職員） 山道陽輪（公益財団法人アイヌ民族文化財団民族共生象徴空間運営本部 職員） 齋藤玲子

「ペーパークラフトでトーテムポールをつくろう」

「アイヌの矢作りと模擬狩猟体験」

ワークシート

テーマに沿って展示場を見学できるもの、特別展や企画展にまつわるもの、自主学習ができるものなどをご用意しています。 本館ホームページ上に掲載しており、ダウンロードして自由にご利用いただけます。

おうちでみんぱく

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、自宅待機を余儀なくされている児童などのために、本館ホームページ上に特設ページ「おうちでみんぱく」を令和2年3月9日に開設しました。 本ページには、展示場をオンラインでみることができる「バーチャルミュージアム」のほか、これまでのワークショップで使用したペーパークラフト「飛び出す獅子舞 福ぬりえ」やワークシート「ペーパービーズ」、各種読み物などを掲載しています。 令和2年度は、動画「おうちでみんぱくワークショップ ビーズの素材に注目！ペーパービーズづくりに挑戦」や、みんぱくミュージアムパートナーズ（MMP）が制作した「ぬりえ（7種類）」を追加しました。

カムイノミ儀礼と北海道アイヌ協会技術者研修

本館では、公益社団法人北海道アイヌ協会とのあいだに協定を結んで、ふたつの事業を実施しています。 ひとつはカムイノミ儀礼の実施です。 アイヌ語のカムイノミは「神への祈り」という意味であり、その実施は、本館が所蔵するアイヌの標本資料の安全な保管と後世への確実な伝承を目的としています。 以前は萱野茂氏（故人）を祭司に非公開でおこなわれていました。 平成19年度からは、社団法人北海道ウタリ協会（現・公益社団法人北海道アイヌ協会）の各地域の会員がカムイノミとあわせてアイヌ古式舞踊の演舞を実施し、公開しています。

もうひとつの事業は、アイヌ協会が派遣する伝統工芸技術者の外来研究者としての受け入れです。本館の所蔵する資料の研究・活用による学術研究の進展とアイヌ民族の文化の振興を目的としています。 令和2年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、2事業とも実施しませんでした。

カムイノミ儀礼（令和元年度）

音楽の祭日

フランスで始まった夏至の日を音楽で祝う「音楽の祭典」が、平成14年から日本でも「音楽の祭日」として全国で開催されています。
本館もその趣旨に賛同し、平成15年から音楽を愛する一般市民に広く本館施設を開放して実施しています。 令和2年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止しました。

「音楽の祭日 2019 in みんぱく」のようす

博学連携事業

校外学習や遠足など博物館見学の準備や事前・事後の学習に役立つツールを紹介することを目的として、春と秋の年に2回、本館を会場として「事前見学&ガイダンス」をおこない、授業での博物館活用の促進を図っています。 令和2年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点より、対面での実施はせず、その代替として、学校・教育関係者向けの動画「国立民族学博物館・学校団体向けガイド」を7本制作しました。 これらの動画は、令和3年3月25日から本館ホームページおよび公式YouTubeチャンネルで公開しています。

ボランティア団体の活動

「みんぱくミュージアムパートナーズ（MMP）」は、本館の博物館活動をサポートする自律的な組織として平成16年9月に発足した団体です。
展示場内における視覚障害者の展示体験をサポートするプログラム「視覚障害者むけ本館展示場案内」や、主に小学生を対象とした体験型見学プログラム「わくわく体験 in みんぱく」、一般来館者向けのものづくりワークショップなど、多岐に広がる活動を本館との協働で進めています。 また、館外でおこなわれるワークショップフェスやボランティア交流会にも積極的に参加し、他の博物館や施設との交流を深めています。
令和2年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため一部のプログラムや活動を中止しました。

視覚障害者むけ本館展示場案内（令和元年度）

わくわく体験 in みんぱく（令和元年度）

点字体験ワークショップ（令和２年度）

みんぱくゼミナール

毎月第3土曜日に、研究部の教員などが最新の研究成果をわかりやすく講演しています。

令和２年度実施　受講者総数 570名 （令和元年度 2,125名）

□特別展関連事業 ○企画展関連事業

実施回数	実施日	担当講師	演題
501回	令和２年８月15日（土）	奈良雅史	出稼ぎ先は「小さな国連」――国際貿易都市・浙江省義烏市に暮らすムスリムたち
○ 502回	令和２年９月19日（土）	小長谷有紀 高野明彦（国立情報学研究所 教授） 飯田 卓	梅棹忠夫に学んだ知的生産の技術
□ 503回	令和２年10月17日（土）	北原次郎太モコットゥナシ （北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授） 齋藤玲子	アイヌ文学の世界――韓・日との比較
504回	令和２年11月21日（土）	平井京之介	ミュージアムが社会を変える――水俣の遺産
505回	令和２年12月19日（土）	出口正之	民博研究の政策としての応用――トランスフォーマティブ研究事始め
506回	令和３年２月20日（土）	河合洋尚	南半球の華僑華人――客家を中心として
□ 507回	令和３年３月20日（土）	加藤幸治（武蔵野美術大学 教授） 日高真吾	牡鹿半島の民俗誌――復興キュレーション

第501回「出稼ぎ先は「小さな国連」―― 国際貿易都市・浙江省義烏市に暮らすムスリムたち」

第506回「南半球の華僑華人――客家を中心として」

第507回「牡鹿半島の民俗誌――復興キュレーション」

みんぱくウィークエンド・サロン―研究者と話そう

研究部の教員と来館者が、展示場内でより身近に語り合いながら、みんぱくの研究を知ってもらうことを目的に、開館30周年記念事業として平成19年度に始まりました。 令和2年度も引き続き、日曜日に計16回開催し、参加者は計552名でした。

研究公演　令和２年度実施　参加者総数 131 名

文化人類学・民族学に関する理解を深めてもらうことを目的として、 世界の諸民族の音楽や芸能などの公演を実施しています。

阪神虎舞みんぱく公演（オンライン）

実施日	令和3年3月6日(土)
司会	寺村裕史
コーディネーター	日高真吾
解説	橋本裕之（大阪市立大学 都市研究プラザ特別研究員・坐摩神社権禰宜） 中川 眞（大阪市立大学 都市研究プラザ特任教授） 山本和馬（阪神虎舞） 金﨑 亘（大槌城山虎舞） 笹山政幸（被災文化遺産所在調査専門調査委員）
出演	阪神虎舞
参加者数	131名

阪神虎舞みんぱく公演

みんぱく映画会　令和２年度実施　参加者総数 762名

上映される機会の少ない文化人類学・民族学に関する貴重な映像資料などを教員の解説を交えて上映しています。

実施日	担当講師	題名	参加者数
令和2年10月10日(土)	信田敏宏 盛田 茂(東洋大学アジア文化研究所 客員研究員)	斧は忘れても、木は覚えている	125名

みんぱく映像民族誌シアター

実施日	担当講師	題名	参加者数
令和3年1月23日 (土)	福岡正太・三島禎子	セネガルを超える人と地域ラジオ	59名
令和3年1月30日 (土)	福岡正太・南真木人	ネパールのサーランギ音楽	81名
令和3年2月13日 (土)	福岡正太・山中由里子	常ならざる音―耳を通して異界とつながる	133名
令和3年2月27日 (土)	福岡正太 福富友子(東京外国語大学 非常勤講師) 寺田吉孝(国立民族学博物館 名誉教授)	カンボジア　クメール人の伝統芸能	92名

みんぱくワールドシネマ

「映像から考える〈人類の未来〉」のテーマにふさわしい映画を選び、研究者の解説による上映会をシリーズで実施しました。

	実施日	担当講師	題名	参加者数
第48回	令和2年9月12日 (土)	菅瀬晶子	判決、ふたつの希望	129名
第49回	令和2年11月7日 (土)	菅瀬晶子 田村克己(国立民族学博物館 名誉教授)	僕の帰る場所	143名

キャンパスメンバーズ

国立民族学博物館と大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。
加入していただいた学校には、展示の無料観覧や研究公演・映画会など催しの無料参加、ミュージアム・ショップの割引利用などの連携内容（特典）があります。

令和2年時点での加盟校

大阪大学、京都大学、学校法人立命館、学校法人塚本学院、同志社大学（グローバル地域文化学部、文化情報学部・文化情報学研究科）、千里金蘭大学

その他の連携事業

令和2年9月13日(日)に、北大阪の8市3町の美術館・博物館からなる「北大阪ミュージアム・ネットワーク」主催のシンポジウム「大阪でEXPOを考えるⅢ－大阪万博50年」に協力し、本館にて開催しました。
また、吹田市と双方の発展と充実に寄与し、地域連携を積極的に推進することを目的とした「国立民族学博物館と吹田市との連携協力に関する基本協定」を締結し、「吹田市5大学・研究機関　生涯学習ナビ」（http://www.suita5u.com）への参画等、情報発信を進めています。
令和2年9月に、吹田市情報発信プラザ「Inforestすいた」で「みんぱくフェア」を開催し、本館の活動を紹介しました。（来場者数11,210名）

データ集

沿革

1935	昭和10年		澁澤敬三氏、白鳥庫吉博士を中心に財団法人日本民族博物館の設立を計画
1964	昭和39年	7月	日本民族学会、日本人類学会、日本考古学協会、日本民俗学会および日本民族学協会は、「国立民族学研究博物館設置」について、文部大臣など関係方面に要望
1972	昭和47年		民族学研究博物館の調査に関する会議（座長:桑原武夫）は、文部大臣に「民族学研究博物館の基本構想について（報告）」を提出
1973	昭和48年	4月	国立民族学研究博物館（仮称）の創設準備に関する会議および創設準備室を設置
1974	昭和49年	6月	国立学校設置法の一部を改正する法律（昭和49年法律第81号）の施行により、国立民族学博物館が創設（管理部3課6係、情報管理施設2係、5研究部10研究部門）
		8月	パプアニューギニアをはじめとして、海外における標本資料などの収集を開始
1975	昭和50年	12月	旧文部省史料館が所蔵していた民族資料28,432点を国文学研究資料館から移管
1977	昭和52年	11月	国立民族学博物館新営工事（28,778㎡および環境整備）が竣功、開館式典を挙行。オセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、西アジア、音楽、言語、東南アジア、東アジア（日本の文化）展示およびビデオテークを一般公開
1978	昭和53年		民族学研究の拠点として、長期的・計画的に取り組む「特別研究」を開始
1979	昭和54年	3月	第4展示場（1,272㎡）が竣功、東アジア（日本の文化）展示を拡充し一般公開。11月に中央・北アジア、東アジア（アイヌの文化）展示を一般公開
1981	昭和56年	2月	講堂（3,704㎡）が竣功
1983	昭和58年	3月	第8展示場など（4,816㎡）が竣功。11月に東アジア（朝鮮半島の文化、中国地域の文化）展示を一般公開
1984	昭和59年	11月	創設10周年記念式典を挙行。『国立民族学博物館十年史』を刊行
1987	昭和62年		開館10周年を迎え、記念行事を実施
1989	平成元年	4月	総合研究大学院大学文化科学研究科（地域文化学専攻・比較文化学専攻の二専攻）が本館を基盤として設置
		6月	特別展示館・書庫棟（5,292㎡）が竣功
		9月	特別展示館竣功記念第1回特別展「大アンデス文明展―よみがえる太陽の帝国インカ」を一般公開
1993	平成5年	8月	本館増築・共同研究棟（891㎡）が竣功
1994	平成6年		創設20周年を迎え、記念行事を実施
		6月	地域研究企画交流センターを設置（平成17年度末に廃止）
1995	平成7年	1月	阪神・淡路大震災による被害のため、展示場を45日間にわたり全面閉鎖（2002～2003年に耐震改修工事を実施）
		4月	COE（「卓越した研究拠点」）の研究課題「地球時代におけるマルチメディアによる新しい民族学研究の展開に関する先導的研究」開始（平成11年度末に終了）
1996	平成8年	3月	第7展示棟（6,439㎡）が竣功。11月に言語展示、東南アジア展示のリニューアルおよび映像の広場、ものの広場、南アジア展示を一般公開
1997	平成9年		開館20周年を迎え、記念行事を実施。11月に記念式典を挙行
1998	平成10年	4月	大学共同利用機関組織運営規則の一部を改正する省令（平成10年文部省令第24号）の施行により、5研究部を改組（4研究部、1研究施設）
1999	平成11年	5月	みんぱく電子ガイドおよび学習コーナー完成、一般公開
2000	平成12年	3月	東アジア（朝鮮半島の文化）展示リニューアル、以降2003年まで本館展示の一部リニューアルなど
2004	平成16年	4月	国立大学法人法（平成15年法律第112号）の施行により、大学共同利用機関法人・人間文化研究機構が発足 4研究部、1研究施設を、3研究部、2研究施設に改組 研究者コミュニティの代表を含む共同利用委員会による審査システム、公募の拡大など共同研究の体制を整備 本館の組織をあげて取り組む「機関研究」を開始
		6月	創設30周年記念事業として『国立民族学博物館三十年史』の編集を開始（平成18年3月刊行）
2006	平成18年	4月	民族学資料共同利用窓口を設置
2007	平成19年		開館30周年を迎え、記念行事を実施。11月に記念式典を挙行
2008	平成20年	2月	日本文化人類学会と連携事業に関する協定を締結
2009	平成21年	3月	展示の新構築を開始
2010	平成22年	4月	国際学術交流室の設置など新しい体制を整備
2013	平成25年	4月	監査室、梅棹資料室を設置し、新しい体制を整備
2017	平成29年	3月	本館展示の新構築を完了し、記念式典を挙行
		4月	3研究部、2研究施設を、4研究部、1研究施設に改組 開館40周年を迎え、記念行事を実施。11月に記念式典を挙行
		12月	共同利用型科学分析室を設置
2018	平成30年	6月	大阪府北部地震による被害のため、展示場を66日間にわたり全面閉鎖（図書室は49日間の閉室）
2020	令和2年	2月	新型コロナウイルス感染症拡大防止のため111日間にわたり臨時休館

歴代館長 令和3年4月1日現在

初代
昭和49年6月－平成5年3月
梅棹忠夫（故人）
民族学・比較文明論

第2代
平成5年4月－平成9年3月
佐々木高明（故人）
東・南アジア農耕文化史

第3代
平成9年4月－平成15年3月
石毛直道
文化人類学

第4代
平成15年4月－平成21年3月
松園万亀雄
社会人類学

第5代
平成21年4月－平成29年3月
須藤健一
社会人類学

第6代
平成29年4月－
吉田憲司
博物館人類学

名誉教授 令和3年4月1日現在

昭和59年4月1日（称号授与年月日）
祖父江孝男（故人）
心理人類学

昭和60年4月1日
岩田慶治（故人）
文化人類学

昭和61年4月1日
加藤九祚（故人）
北・中央アジア民族史

昭和63年4月1日
伊藤幹治（故人）
宗教人類学

昭和63年4月1日
中村俊亀智（故人）
民族技術学・用具論

平成元年4月1日
君島久子
中国民間伝承

平成2年4月1日
和田祐一（故人）
言語人類学

平成3年4月1日
垂水 稔（故人）
空間領域の人類学

平成4年4月1日
杉本尚次
文化地理学・文化人類学

平成5年4月1日
梅棹忠夫（故人）
民族学・比較文明論

平成5年4月1日
大給近達（故人）
ラテンアメリカ文化構造

平成5年4月1日
片倉素子（故人）
社会地理学・民族学

平成6年4月1日
竹村卓二（故人）
社会人類学

平成7年4月1日
周 達生（故人）
物質文化論

平成7年4月1日
松澤員子
社会人類学

平成8年4月1日
大丸 弘（故人）
衣生活とその周辺の比較生活史

平成8年4月1日
友枝啓泰（故人）
社会人類学

平成8年4月1日
藤井知昭
民族音楽学・音楽人類学

平成9年4月1日
佐々木高明（故人）
東・南アジア農耕文化史

平成9年4月1日
杉村 棟
民族芸術学

平成10年4月1日
和田正平
比較文化論・アフリカ民族学

平成12年4月1日
清水昭俊
家族比較論・オセアニア研究

平成13年4月1日
黒田悦子
民族社会文化論・中米人類学

平成13年4月1日
崎山 理
言語人類学・オセアニア言語学

平成13年4月1日
端 信行
経済人類学・アフリカ民族学

平成14年4月1日
小山修三
民族考古学

平成14年4月1日
森田恒之
保存科学・民族技術

平成15年4月1日
石毛直道
文化人類学

平成15年4月1日
栗田靖之
博物館人類学・ブータン研究

平成15年4月1日
杉田繁治
コンピュータ民族学・文明学

平成16年4月1日
熊倉功夫
日本文化史

平成16年4月1日
立川武蔵
宗教哲学・仏教思想

平成16年4月1日
田邉繁治
東南アジア社会人類学

平成16年4月1日
藤井龍彦
新大陸先史学

平成16年4月1日
山田睦男（故人）
ラテンアメリカ史・
ラテンアメリカ地域研究

平成17年4月1日
江口一久（故人）
民族言語学・口承文芸論

平成17年4月1日
大塚和義
アイヌ民族学・北アジア研究

平成17年4月1日
松原正毅
社会人類学・遊牧社会論

平成18年4月1日
石森秀三
観光文明学・文化開発論

平成18年4月1日
野村雅一（故人）
身体コミュニケーション論・
南欧民族学

平成19年4月1日
大森康宏
映像人類学・民族誌映画

平成19年4月1日
山本紀夫
民族植物学

平成21年4月1日
松園万亀雄
社会人類学

平成22年4月1日
松山利夫
オーストラリア先住民研究

平成23年4月1日
長野泰彦
言語学・チベットビルマ語研究

平成24年4月1日
秋道智彌
生態人類学・海洋民族学

平成24年4月1日
中牧弘允
宗教人類学・経営人類学

平成26年4月1日
小林繁樹
道具人類学・文化人類学・
博物館学

平成26年4月1日
田村克己
東南アジア文化人類学

平成26年4月1日
吉本 忍
民族工芸論・民族技術論

平成27年4月1日
久保正敏
民族情報学・
コンピュータ民族学・
オーストラリア研究

平成27年4月1日
庄司博史
言語学・言語政策論

平成27年4月1日
八杉佳穂
言語人類学・中米文化史

平成28年4月1日
朝倉敏夫
韓国社会研究

平成28年4月1日
佐々木史郎
文化人類学・北アジア研究

平成28年4月1日
杉本良男
社会人類学・南アジア研究

平成29年4月1日
須藤健一
社会人類学

平成29年4月1日
竹沢尚一郎
宗教人類学・西アフリカ研究

平成29年4月1日
塚田誠之
歴史民族学・中国研究

平成30年4月1日
印東道子
オセアニア考古学

平成30年4月1日
横山廣子
文化人類学・中国社会研究

令和2年4月1日
寺田吉孝
民族音楽・南アジア研究

令和3年4月1日
出口正之
非営利組織論・政策人類学

現員

令和3年4月1日現在

区分	館長	教授	准教授	助教	特任教授	特任准教授	特任助教	小計	事務職員 技術職員含む	合計
現員	1	25	22	4	0	0	0	52	51	103
客員(国内)		11	8					19		19
客員(国外)		1						1		1
館長	1							1		1
監査室									1(1)	1(1)
管理部									28	28
情報管理施設									22	22
研究部		21	17	4	0	0	0	42		42
学術資源研究 開発センター		4	5	0				9		9

注)客員は外数　(　)内は兼務　事務職員には特任専門職員1名を含む

予算

令和2年度

収入

区分	単位：百万円
運営費交付金	2,732
基幹運営費交付金	2,613
機構連携経費等	119
収入	30
入場料	18
その他	12
施設整備費補助金	99
科学研究費補助金	253
	計 3,114

支出

区分	単位：百万円
人件費	1,108
物件費	1,753
教育研究経費	413
共同利用経費	782
一般管理費	459
施設費	99
科学研究費補助金	253
	計 3,114

注)補正後の予算額
前年度繰越分を含み次年度繰越額を除く

令和3年度

収入

区分	単位：百万円
運営費交付金	2,864
基幹運営費交付金	2,706
機構連携経費	158
収入	62
入場料	38
その他	24
施設整備費補助金	70
科学研究費補助金	337
	計 3,333

支出

区分	単位：百万円
人件費	1,122
物件費	1,874
教育研究経費	482
共同利用経費	785
一般管理費	537
施設費	70
科学研究費補助金	337
	計 3,333

注)年度当初予算額
前年度繰越分及び機構からの追加配分を含む

施設

建設の基本構想

敷地全体が公園計画に調和するように、建物の高さを全体的にできる限り低くおさえ、伝統的な日本建築のもつ美の特色を活かしています。
平面計画は複数のブロックによって構成されており、それぞれのブロック外壁は原則として採光をおこなわないことになっていますが、展示場の内側には採光が可能なパティオ(中庭)を設けています。
各パティオは、建築内部に屋外の環境を持ち込むばかりでなく、屋外展示スペースとしても利用することができます。
動線計画は、1階に収蔵、2階に展示、3・4階に研究の機能をまとめて配置し、エレベータ・階段で垂直に最短距離で結んでいます。
とくに展示のための観客の動線は、全体を詳細にみることも、一部分展示ブロックを簡略してみることも可能な回遊方式になっています。
また、ユニバーサルデザインを積極的に導入し、点字ブロックの設置などバリアフリー化をおこなっています。

施設の概要

敷地面積=40,821㎡
建築面積=18,177㎡
建築延床面積=52,648㎡

4階 7,207㎡
研究部門

3階 中3、中4階を含む 7,340㎡
研究・図書・管理部門

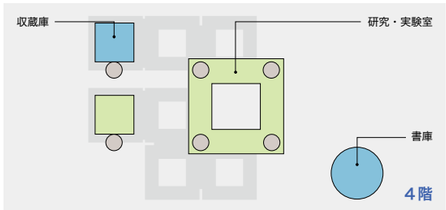
屋階 846㎡

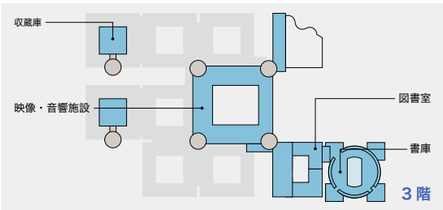
2階 中2階を含む 16,830㎡
展示・管理部門

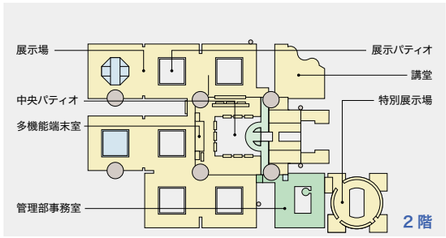
1階 多機能資料保管庫含む 17,410㎡
エントランス・収蔵・サービス部門

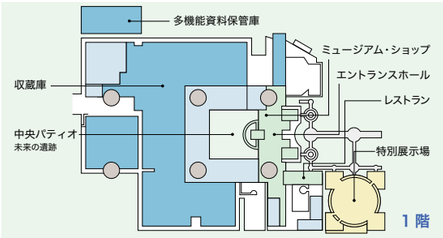
地階 3,015㎡

(内　本館展示場　10,938㎡　特別展示場 1階　851㎡　2階　639㎡)









国内外の協定

海外の研究機関との研究連携、研究協力の推進

研究連携や研究協力のために、海外の研究機関と学術協定を締結しています。 令和2年度は、12月にロシア民族学博物館との協定、令和3年3月に、客家委員会客家文化発展センター及び交通大学客家文化学院との三者間協定を終了しました。

協定先機関名	協定締結日	協定の概要
カセサート大学林学部（タイ）	令和元年11月22日	相互理解、相互利益及び協力関係の原則に基づいた学術研究及び学術交流の強化・促進。
ケニア国立博物館群（ケニア）	令和元年11月7日	共同調査プロジェクトの実施、講演会、シンポジウム、共同展示の実施、調査に関わる情報と資料の交換、文化ならびに博物館学に関する交流プログラムの振興、研究スタッフの交流に関する協力。
バングラデシュ農業大学（バングラデシュ）	令和元年11月3日	相互理解、相互利益及び協力関係の原則に基づいた学術研究及び学術交流の強化・促進。
ウズベキスタン共和国科学アカデミー ヤフヨ・グロモフ考古学研究所（ウズベキスタン）	令和元年9月19日	国際共同発掘調査・研究、研究者交流、考古学に関する資料や情報の交換等・研究者・学芸員などの人材交流。
国立考古学研究センター（インドネシア）	令和元年6月10日	インドネシア国内での国際共同調査の実施、および研究成果の共有。
国立博物館機構（ザンビア）	平成30年8月12日	国際共同研究、研究者の交流、博物館に関する資料や情報交換など。
イラン国立博物館（イラン）	平成29年11月8日	国際共同研究、研究者の交流、博物館に関する資料や情報交換など。
客家委員会客家文化発展センターおよび交通大学客家文化学院（台湾）	平成29年12月16日	国際共同研究、研究者の交流、博物館に関する資料や情報交換など。
ブリティッシュコロンビア大学 人類学博物館―UBC―（カナダ）	平成29年3月9日	研究交流、人材交流、データベース構築の協力など。
浙江大学人類学研究所・図書館（中国）	平成28年4月19日	資料の寄贈、人材交流、共同研究など。
ヴァンダービルト大学（米国）	平成28年1月15日	国際共同研究、国際シンポジウムの開催など。
国立台湾歴史博物館（台湾）	平成27年10月16日	共同研究、博物館展示協力など。
北アリゾナ博物館（米国）	平成26年7月4日	学術交流・研究の強化・発展。
中国社会科学院民族学・人類学研究所（中国）	平成24年8月28日	学術交流ならびに研究プロジェクトや研究資料、学術情報及び公開出版物の交換と相互利用の展開など。
フィリピン国立博物館（フィリピン）	平成24年7月18日	共同研究、研修、出版、展示等のプロジェクトにおける学術的な研究および交流の促進など。
アシウィ・アワン博物館・遺産センター（米国）	平成24年6月3日	学術協力、共同研究のプロジェクトの展開、博物館資料の展覧および教育分野における協力活動など。
生態学生物資源研究所（ベトナム）	平成24年3月22日	共同研究、研修、出版、展示等のプロジェクトにおける学術的な研究および交流の促進など。
ロシア科学アカデミー・ピョートル大帝記念人類学民族学博物館（クンストカメラ）（ロシア）	平成23年10月21日	学術・文化の両分野における相互交流および協力関係の発展など。
ロシア民族学博物館（ロシア）	平成22年12月3日	博物館学、調査研究、文化財保護の各分野における協力と相互支援の促進など。
エジンバラ大学（英国）	平成22年5月17日	学術交流ならびに共同的な研究事業の促進など。
国立台北芸術大学（台湾）	平成21年5月15日	相互の学術交流、研究プロジェクトの展開、博物館展示・教育活動に関する協力、学術情報・出版物の交換など。
内蒙古大学（中国）	平成20年9月22日	教職員・研究者の交流、研究プロジェクトの展開、博物館展示品の展覧及び教育分野における協力活動、学術研究資料、学術情報及び公開出版物についての交換と相互利用の展開など。
韓国国立民俗博物館（韓国）	平成19年7月11日	研究者交流、共同研究、研究集会の実施、博物館展示・教育活動に関する協力、学術情報・出版物の交換など。
順益台湾原住民博物館（台湾）	平成18年7月1日	共同研究、博物館展示協力など。
国立サン・マルコス大学（ペルー）	平成17年6月14日	考古学分野における共同研究員調査の遂行、ならびにそれに基づく学術交流の促進。

国内の研究機関等との研究連携、協力の推進

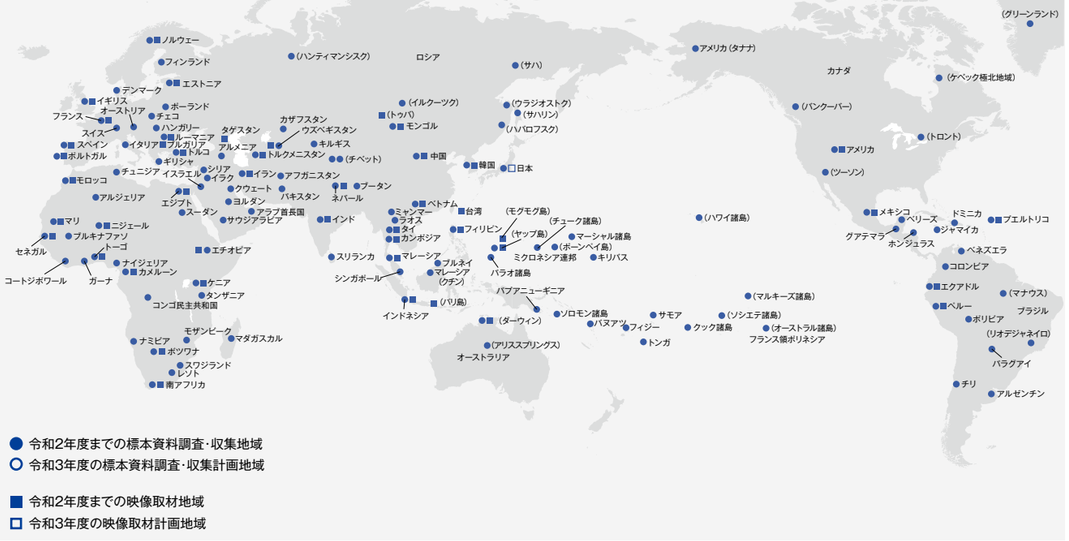
国内の大学等の研究機関や学会とも研究連携や協力、共同研究等の推進のため、学術協定を締結しています。 令和2年度は、3月に金沢美術工芸大学との間で協定を締結しました。

協定先機関名	協定締結日	協定の概要
金沢美術工芸大学	令和3年3月22日	平成の百工比照コレクションデータベースを基に、高等教育におけるデータベースの在り方及び活用手法についての検証。社会連携事業と連動させることにより、高等教育教材の実用化。
神奈川大学日本常民文化研究所	令和2年3月26日	学術研究、教育及び社会の発展への寄与。
一般社団法人東洋音楽学会	令和元年11月3日	音楽文化の持続可能な発展と、音楽文化研究の深化に寄与。
大阪府	令和元年8月28日	手話言語学の分野における連携強化、双方の発展と充実に寄与。
日本展示学会	平成30年11月26日	学術研究、教育及び社会の発展への寄与。
一般社団法人文化財保存修復学会	平成30年11月19日	文化財の保存に関わる科学・技術の発展と普及。
京都芸術大学	平成30年3月19日	学術研究、教育及び社会の発展への寄与。
大阪大学	平成30年3月17日	学術研究、教育、社会貢献及びその他諸活動の発展への寄与。
山形大学	平成30年2月16日	学術研究、教育及び社会の発展に貢献。
神戸大学大学院人文学研究科	平成28年7月15日	研究教育のための学術交流。
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所	平成27年11月25日	世界諸地域の言語と文化に関する学術研究、連携協力。
株式会社海遊館	平成27年11月19日	産学連携の推進、学術研究の振興、研究成果による社会貢献、連携協力。
大阪工業大学	平成27年3月23日	情報メディア・ディジタルコンテンツに関する学術研究、連携協力。
立命館大学	平成26年4月10日	食に関する学術研究、連携協力。
金沢大学	平成26年3月23日	両機関間の連携・協力の実績を基盤に、緊密かつ組織的な体制強化。
日本文化人類学会	平成20年2月27日	研究連携、研究交流、相互の研究成果の活用の促進。 人類社会における学術の発展と普及への寄与。

資料とデータベース

本館では、文化人類学・民族学を核とする諸分野の資料や情報を集積・整備して国内外研究者の共同利用に供するとともに、展示や各種事業などを通じて研究成果の社会還元をおこなっています。そのために、資料の収集、管理、情報整備、データベースとコンテンツの制作、展示、各種事業への展開の方法についても研究を重ねています。
情報管理施設は、これらの活動を支援するために設けられた附属施設です。

標本資料収集および映像取材地域



- ● 令和2年度までの標本資料調査・収集地域
- ○ 令和3年度の標本資料調査・収集計画地域
- ■ 令和2年度までの映像取材地域
- □ 令和3年度の映像取材計画地域

諸資料の所蔵一覧　令和3年3月31日現在

標本資料（未登録資料含む）	345,143点
海外資料	179,264点
国内資料	165,879点

映像・音響資料	72,698点
映像資料	8,277点
音響資料	64,421点

文献図書資料	
図書（製本雑誌含む）	686,283冊
日本語資料	270,428冊
外国語資料	415,855冊
雑誌	17,232種
日本語雑誌	10,162種
外国語雑誌	7,070種

HRAF Human Relations Area Files	
地域（民族集団）ファイル	437ファイル
原典（テキスト）	8,895冊

※現在はwebデータベースとして提供
eHRAF World Cultures
地域（民族集団）ファイル：331ファイル　原典（テキスト）：6,347点
eHRAF Archaeology（先史時代など考古学的な文献データベース）
地域（民族集団）ファイル：106ファイル　原典（テキスト）：2,548点　142,794頁
（令和3年4月現在）

データベース一覧　令和3年3月31日現在

本館の所蔵資料をはじめ、さまざまな研究資料や研究成果をデータベース化し、館内外に広く提供しています。
（＊印は、館内でのみ利用できるデータベース。各データベースの〔 〕内の数値は収録レコード数。）

標本資料

標本資料目録
本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報（画像あり）。ほぼすべての資料について、標本名、地域、民族、寸法・重量、受入年度などの基本情報を収録。〔286,507件〕

標本資料詳細情報
本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報（画像あり）。標本名、現地名、訳名、収集地、使用地、使用民族、使用年代、用途・使用法、製作地、製作法・材料など、より詳しい情報を収録。

標本資料記事索引　〔館内公開：286,552件（内インターネット公開：80,678件）〕
本館関連出版物に掲載された所蔵標本資料の解説について、その書誌事項を標本資料別に整理したデーターベース。〔76,039件〕

韓国生活財
ソウルの李さん一家の生活財を網羅した情報。アパートの中にあったすべての物について、配置と入手方法、物にまつわる家族の思い出を記録（画像あり）。〔7,827件〕

ジョージ・ブラウン・コレクション（日本語版、英語版）
宣教師であり神学博士でもあったジョージ・ブラウン氏が19世紀末から20世紀初頭にかけて南太平洋諸島で収集し、現在、本館に収蔵されている民族誌資料の基本情報（画像あり）。〔2,992件〕

カナダ先住民版画 ＊
本館が所蔵する代表的なカナダ先住民版画の基本情報と解説（画像あり）。特別展「自然のこえ 命のかたち ― カナダ先住民の生み出す美」（2009年）の展示資料を中心に収録。〔158件〕

チベット宗教図像（白描画）
本館が所蔵する「チベット仏画コレクション」に含まれる本版の白描宗教図像およびチベット仏教古派とボン教の魔除け・厄除けの護符に関する基本情報を収録（画像あり）。〔1,439件〕

映像・音響資料

映像資料目録
本館が所蔵する映画フィルム、ビデオテープ、DVDなど映像資料の情報。〔8,277件〕

ビデオテーク
本館展示場で提供しているビデオテーク番組の情報。番組をキーワードで検索したり、ビデオテークプースと同じメニューから探すことができる。〔824件〕

音楽・芸能の映像
本館が世界各地で取材したビデオ映像から、音楽演奏や芸能に関係する部分を、1曲または1テーマごとに抽出した動画データベース。映像は館内限定公開。〔849件〕

松尾三憲旧蔵絵葉書コレクション
松尾三憲（みのり）氏が、1919年から1923年までの海軍在職中に、訓練航海の途上訪れた現地で買い求めた絵葉書の情報（画像あり）。〔170件〕

京都大学学術調査隊写真コレクション
「京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊」（1955年）、「京都大学探検部トンガ王国調査隊」（1960年）、「京都大学アフリカ学術調査隊」（1961年～1967年）、および「第二次京都大学ヨーロッパ学術調査隊」（1969年）が撮影した写真の情報（画像あり）。〔館内公開：42,195件（内インターネット公開：22,361件）〕

梅棹忠夫写真コレクション ＊
梅棹忠夫本館初代館長が、世界各地における調査研究活動の過程で撮影した写真の情報（画像あり）。〔35,481件〕

オーストラリア・アボリジニ研究フィールド写真 ＊
小山修三本館名誉教授が、1980年から2004年にかけて、オーストラリア・アボリジニ文化の調査で記録した、儀礼から風景までの多彩な写真の情報（画像あり）。〔7,999件〕

朝枝利男コレクション ＊
朝枝利男氏が1930年代にアメリカの学術調査団に数回にわたり同行し撮影した、南太平洋の人々や動植物の写真の情報（画像あり）。〔3,966件〕

西太平洋およびインド洋を中心とする海洋民族写真資料―大島襄二写真コレクション
大島襄二氏が、1967年から1991年にかけてアジアやオセアニアなどの調査で撮影した写真の情報（画像あり）。〔館内公開：8,842件（内インターネット公開：7,889件）〕

アフリカ カメルーン民族誌写真集―端信行コレクション
端信行本館名誉教授が1969年から90年代初頭にかけて行った、おもにアフリカのカメルーン共和国での民族学的調査の中で撮影した写真の情報（画像あり）。〔6,530件〕

沖守弘インド写真（日本語版、英語版）
写真家沖守弘氏が1977年から1996年にかけてインド全域で撮影した、宗教・祭礼・民俗画・芸能・生活文化に関する写真の情報（画像あり）。〔館内公開：22,120件（内インターネット公開：21,971件）〕

ネパール写真（日本語版、英語版）
「西北ネパール学術探検隊」（1958年）に参加した高山龍三氏（当時大阪市立大学大学院生）らがネパールで撮影した写真、および、同隊が収集し、現在本館に収蔵されている標本資料の情報（画像あり）。〔3,879件〕

西北ネパール及びマナスル写真 ＊
「西北ネパール学術探検隊」（1958年～1959年）が撮影した写真の情報（画像あり）。一部に「日本山岳会第一次マナスル登山隊」（1953年）科学班の写真（推定）を含む。本館に移管された旧文部省史料館資料の一部。〔620件〕

タイ民族誌映像―精霊ダンス ＊
田辺繁治本館名誉教授が調査したタイの精霊ダンスの写真情報（画像あり）。精霊ダンスの系統、開催地域、祭主から写真群を閲覧できる。写真は調査報告（タイ語）とも関連づけられている。〔写真：10,082件　調査報告：41件〕

東南アジア稲作民族文化綜合調査団写真 ＊
日本民族学協会が1957年から1964年にかけて三次にわたり東南アジアに派遣した調査団のうち、第一次調査団（1957年）と第二次調査団（1960年）が記録した写真の情報（画像あり）。〔4,393件〕

焼畑の世界―佐々木高明のまなざし ＊
佐々木高明（本館元館長）が調査で撮影・記録した写真の中から、特に日本の焼畑に関するものを収録（画像あり）。〔454件〕

音響資料目録
本館が所蔵するレコード、CD、テープなど音響資料の情報。〔64,421件〕

音響資料曲目
本館が所蔵する音響資料について、音楽の曲単位、昔話の一話単位で収録した情報。〔351,802件〕

文献図書資料

図書・雑誌目録（OPAC）
本館が所蔵する図書・雑誌資料（マイクロフィルムなどを含む）の書誌・所蔵情報。〔図書資料：636,767件　雑誌タイトル：17,254件〕

梅棹忠夫著作目録（1934～）
著書・論文をはじめ本の帯の推薦文にいたるまで、梅棹忠夫本館初代館長のあらゆる著作を網羅した目録情報。〔6,974件〕

言語資料

中西コレクション―世界の文字資料
世界のさまざまな文字で書かれた図書・新聞・手稿・標本などの資料に関する分析情報と書誌情報、文字サンプルの画像。これらの資料は、中西印刷株式会社・故中西亮氏が世界各地で収集。〔2,729件〕

吉川「シュメール語辞書」
吉川守氏（広島大学名誉教授）が40年ほどの年月をかけて完成させた、シュメール語の研究ノート。親字33,450語をキーワードに検索・閲覧できる。〔キーワード：33,450語（40,596頁）〕

Talking Dictionary of Khinina-ang Bontok（ボントック語音声画像辞書）
Lawrence A. Reid氏（ハワイ大学名誉教授）が編集した、フィリピン・ルソン島北部で話されるボントック語のギナアン方言の辞書。語の派生関係、例文、音声・画像などのデータを結びつけたマルチメディア・データベース辞書。〔見出し語：11,220語〕

日本昔話資料―稲田浩二コレクション
稲田浩二氏（当時京都女子大学教授）らのグループが、1967年から1978年にかけて日本各地29道府県で現地録音取材した日本昔話資料（446本のテープ・約190時間）の情報（音声あり）。音声は館内限定公開。〔3,696件〕

rGyalrongic Languages（ギャロン系諸語）［英語、中国語］
長野泰彦本館名誉教授とMarielle Prins博士が編集した、中国四川省の西北部で話されるギャロン系諸語のデータベース（音声あり）。83の方言ないし言語それぞれについて、425または1200の語彙項目と200の文例を収録している。〔語彙：41,078語　文例：15,706件〕

服装・身装文化資料

衣服・アクセサリー
本館が所蔵する衣服標本資料とアクセサリー標本資料の詳細分析情報、および関連フィールド写真の情報（画像あり）。〔32,285件〕

身装文献
身装文化に関する雑誌記事、図書の索引情報。1）服装関連日本語雑誌記事（カレント）、2）服装関連日本語雑誌記事（戦前編）、3）服装関連外国語雑誌記事、4）服装関連日本語図書、5）服装関連外国語民族誌で構成。〔183,616件〕

近代日本の身装電子年表
洋装がまだ日常に定着していなかった1868年（明治元年）から1945年（昭和20年）の日本を対象とした身装関連の電子年表。「事件」と「現況」、「その年の情景」、「回顧」、テキスト画像で構成される。当時の新聞記事と身装関連雑誌から情報を収録。〔14,514件〕

身装画像―近代日本の身装文化
和装と洋装が拮抗していた1868年（明治元年）から1945年（昭和20年）までの日本を対象とした身装関連の画像データベース。当時の新聞小説挿絵、写真、図書中の図版、ポスターなどから画像を収録。〔6,764件〕

ファクト、他

国内資料調査報告集 ＊
日本国内における、1）民具などの標本資料類の所在、2）伝統技術伝承者の所在、3）民族・民俗映像記録の所在、4）民族・民俗関係出版物の所在、に関する情報。本館が委嘱した国内資料調査委員による調査報告集（1980年～2003年）をデータベース化。〔21,373件〕

3次元CGで見せる建築―東南アジア島嶼部の木造民家
佐藤浩司本館准教授が1981年以来調査してきた東南アジア各地の木造建築物の情報。民家の3次元CGから作成したgifアニメーションにより建築物内外を巡回して見ることができる。〔38地点、61棟〕

津波の記憶を刻む文化遺産―寺社・石碑データベース
日本の沿岸部に残されている、地震や津波災害の記憶を伝える寺社や石碑、銘板などの情報（画像あり）。〔470件〕

平成の百工比照コレクション
金沢市と金沢美術工芸大学が、全国各地の工芸品について、工程・技法がわかる見本や製品見本、製作道具、材料を収集整理して作成した標本集「平成の百工比照」に関する情報（画像あり）。〔553件〕

令和２年度の入館者数

年間入館者

入館者総数	87,076人
1日平均	364人
開館からの累計	11,567,195人

入館者内訳

一般	51,625人
小・中・高・大学生	32,883人
小学生未満	2,568人

特別展示

特別展「先住民の宝」（令和2年10月1日～12月15日） 25,611人

企画展示

梅棹忠夫生誕100年記念企画展「知的生産のフロンティア」（令和2年9月3日～12月1日） 31,297人

巡回展示

「驚異と怪異――モンスターたちは告げる」兵庫県立歴史博物館（令和2年6月23日～8月16日） 14,016人

共催展示

特別企画展「佐々木高明の見た焼畑――五木村から世界へ」
五木村歴史文化交流館（令和2年10月3日～12月13日） 943人

京都大学総合博物館2020年度特別展「梅棹忠夫生誕100年記念――知的生産のフロンティア」
京都大学総合博物館（令和3年1月13日～3月14日） 1,298人

特別展示一覧

展覧会名	展覧会期間
「大アンデス文明展―よみがえる太陽の帝国インカ」	平成元年9月14日～12月12日
「赤道アフリカの仮面―秘められた森の精霊たち」※	平成2年3月15日～5月31日
「海を渡った明治の民具　モース・コレクション展」	平成2年9月13日～12月4日
「ケンペル展―ドイツ人の見た元禄時代」※	平成3年2月7日～4月16日
「大インド展―ヒンドゥー世界の神と人」	平成3年8月1日～11月5日
「文明の十字路・ダゲスタン――コーカサスの民族美術」※	平成4年3月12日～5月19日
「オーストラリア・アボリジニ展―狩人と精霊の5万年」	平成4年9月10日～12月8日
「民族学の先覚者　鳥居龍藏の見たアジア」※	平成5年3月11日～5月14日
「アイヌモシリ―民族文様から見たアイヌの世界」	平成5年6月10日～8月17日
「ジャワ更紗―その多様な伝統の世界」	平成5年9月9日～11月30日
「台湾先住民の文化　伝統と再生」※	平成6年3月10日～5月24日
「絨毯―シルクロードの華」	平成6年9月8日～11月29日
「ラテンアメリカの音楽と楽器」※	平成7年3月16日～5月30日
「現代マヤ―色と織に魅せられた人々」	平成7年9月14日～11月30日
「シーボルト父子のみた日本」	平成8年8月1日～11月19日
「異文化へのまなざし―大英博物館コレクションにさぐる」	平成9年9月25日～平成10年1月27日
「なかはどうなってるの？ ―民族資料をX線でみたら」※	平成10年3月12日～5月26日
「大モンゴル展―草原の遊牧文明」	平成10年7月30日～11月24日
「南太平洋の文化遺産:ジョージ・ブラウン・コレクション」※	平成11年3月11日～5月31日
「越境する民族文化―いきかう人びと、まじわる文化」	平成11年9月9日～平成12年1月11日
「みんぱくミュージアム劇場―からだは表現する」	平成12年3月18日～5月14日
「進化する映像―影絵からマルチメディアへの民族学」	平成12年7月20日～11月21日
「大正昭和くらしの博物誌―民族学の父・渋沢敬三とアチック・ミューゼアム」	平成13年3月15日～6月5日
「ラッコとガラス玉」	平成13年9月20日～平成14年1月15日
「2002年ソウルスタイル」	平成14年3月21日～7月16日
「世界大風呂敷展　布で包む　ものと心」	平成14年10月3日～平成15年1月14日
「マンダラ―チベット・ネパールの仏たち」	平成15年3月13日～6月17日
「西アフリカ おはなし村」	平成15年7月24日～11月25日
「アイヌからのメッセージ―ものづくりと心」	平成16年1月8日～2月15日
「多みんぞくニホン―在日外国人のくらし」	平成16年3月25日～6月15日
「アラビアンナイト大博覧会」	平成16年9月9日～12月7日
「きのうよりワクワクしてきた。」	平成17年3月17日～6月7日
「インド サリーの世界」	平成17年9月8日～12月6日
「みんぱくキッズワールド：こどもとおとなをつなぐもの」	平成18年3月16日～5月30日
「更紗今昔物語―ジャワから世界へ」	平成18年9月7日～12月5日
「聖地★巡礼―自分探しの旅へ」	平成19年3月15日～6月5日
「オセアニア大航海展―ヴァカ モアナ、海の人類大移動」	平成19年9月13日～12月11日
「深奥的中国―少数民族の暮らしと工芸」	平成20年3月13日～6月3日
「アジアとヨーロッパの肖像」	平成20年9月11日～11月25日
「千家十職×みんぱく：茶の湯のものづくりと世界のわざ」	平成21年3月12日～6月14日
「自然のこえ 命のかたち―カナダ先住民の生みだす美」	平成21年9月10日～12月8日
「彫刻家エル・アナツイのアフリカ―アートと文化をめぐる旅」	平成23年9月16日～12月7日
「ウメサオ タダオ展」	平成23年3月10日～6月14日
「千島・樺太・北海道　アイヌのくらし―ドイツコレクションを中心に」	平成23年10月6日～12月6日
「今和次郎　採集講義―考現学の今」	平成24年4月26日～6月19日
「世界の織機と織物―織って！ みて！ 織りのカラクリ大発見」	平成24年9月13日～11月27日
「マダガスカル　霧の森のくらし」	平成25年3月14日～6月11日
「渋沢敬三記念事業　屋根裏部屋の博物館 Attic Museum」	平成25年9月19日～12月3日
「イメージの力―国立民族学博物館コレクションにさぐる」	平成26年9月11日～12月9日
「韓日食博―わかちあい・おもてなしのかたち」	平成27年8月27日～11月10日
「夷酋列像―蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界―」	平成28年2月25日～5月10日
「見世物大博覧会」	平成28年9月8日～11月29日
「ビーズ―つなぐ・かざる・みせる」	平成29年3月9日～6月6日
「よみがえれ！ シーボルトの日本博物館」	平成29年8月10日～10月10日
「太陽の塔からみんぱくへ―70年万博収集資料」	平成30年3月8日～5月29日
「工芸継承―東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」	平成30年9月13日～11月27日
「子ども／おもちゃの博覧会」	平成31年3月21日～令和元年5月28日
「驚異と怪異――想像界の生きものたち」	令和元年8月29日～11月26日
「先住民の宝」	令和2年10月1日～12月15日
「復興を支える地域の文化――3.11から10年」	令和3年3月4日～5月18日

※印は、平成13年以前は企画展に区分されていましたが、現在はすべて特別展に統一されています。

インターネット

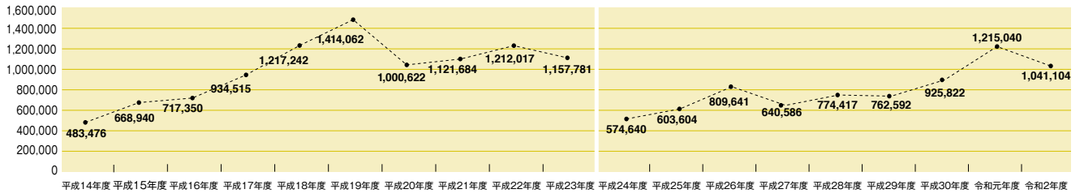
ホームページ　https://www.minpaku.ac.jp/
本館の研究活動、博物館展示・事業活動、大学院教育情報の他、刊行物、文献図書資料、標本資料などあらゆる情報を世界に発信しています。

メールマガジン　https://www.minpaku.ac.jp/museum/enews
メールマガジン「みんぱくe-news」を月1回発行し、最新の研究情報や、特別展・企画展情報、みんぱくゼミナール等の各種事業のお知らせを配信しています。

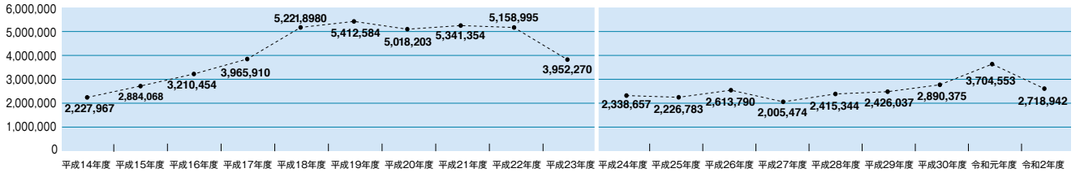
ソーシャルメディア　Facebook　https://www.facebook.com/MINPAKU.official
Twitter　https://twitter.com/MINPAKUofficial
YouTube　https://www.youtube.com/MINPAKUofficial
Instagram　https://www.instagram.com/MINPAKUofficial

さまざまなソーシャルメディアを活用して、研究、博物館活動を情報発信するとともに、本館及び文化人類学・民族学に関心をもつ人たちが交流する場を提供しています。

訪問者数（Visits）　令和２年度　1,041,104



ページビュー数（Page Views）　令和２年度　2,718,942



※平成24年度より、統計方法を変更しました。
※アクセス解析の不備により、平成29年12月19日～平成30年1月11日は集計に含まれておりません。

マスメディアを通じた広報

広く社会に本館の研究や博物館活動について広報するため、マスメディアを通じた広報活動を展開しています。「報道関係者と民博との懇談会」（毎月第3木曜日開催）において、「研究の窓」などのコーナーをもうけ、みんぱくの研究や博物館活動を積極的に紹介しています。 令和2年度はテレビ（59件）、ラジオ（25件）、新聞（480件）、雑誌（110件）、ミニコミ誌（38件）、その他（63件）の各媒体総数777件で、本館の活動が紹介されました

「旅・いろいろ地球人」 平成21年4月から毎日新聞夕刊（毎週土曜日）に掲載 平成17年4月から平成21年3月までは、「異文化を学ぶ」というタイトルで掲載

「ディープ「みんぱく」探検隊」 令和元年12月から週刊新潮に掲載

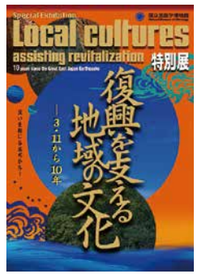
出版活動

広報・普及

MINPAKU Anthropology Newsletter
月刊みんぱく
みんぱくカレンダー

展示解説

展示図録「先住民の宝」
展示図録「復興を支える地域の文化―3.11から10年」



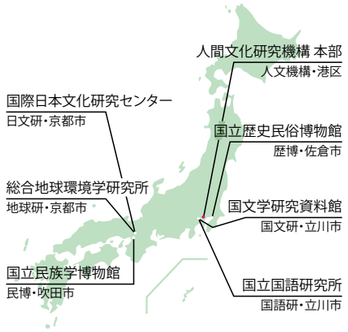
プレス懇談会

「報道関係者と民博との懇談会」（毎月第3木曜日開催）において、「研究の窓」などのコーナーをもうけ、みんぱくの研究や博物館活動を積極的に紹介しています。

大学共同利用機関法人　人間文化研究機構　https://www.nihu.jp/

大学共同利用機関法人　人間文化研究機構（略称：人文機構）は、4つの大学共同利用機関法人のうちの1つであり、人間文化研究にかかわる6つの大学共同利用機関で構成されています。それぞれの機関は、人間文化研究の各分野におけるわが国の中核的研究拠点、国際的研究拠点として基盤的研究を深める一方、学問的伝統の枠を超えて相補的に結びつき、国内外の研究機関とも連携して、現代社会における諸課題の解明と解決に挑戦しています。真に豊かな人間生活の実現に向け、人間文化の研究を推進し、新たな価値の創造を目指します。

4つの大学共同利用機関法人



人文機構本部と6つの大学共同利用機関の所在地

研究推進・情報発信事業

研究推進・情報発信事業
人文機構は、平成28年度に総合人間文化研究推進センターと総合情報発信センターを設置しました。
2つのセンターでは、6つの機関をハブとした研究ネットワークを構築して国際共同研究を推進するとともに、国内外への積極的な発信や次代を担う若手研究者の育成に取り組みます。

総合人間文化研究推進センター

6つの機関と国内外の大学等研究機関や地域社会との連携・協力を促進し、人間文化の新たな価値体系の創出に向けて、現代的諸課題の解明に資する組織的共同研究「基幹研究プロジェクト」を推進しています。

総合情報発信センター

人間文化にかかわる総合的学術研究資源をデジタル化することで、広く国内外の大学や研究者への活用を促進するとともに、社会との双方向的な連携を強化することで、研究成果の社会還元を推進しています。

総合人間文化研究推進センターが推進する基幹研究プロジェクト

機関拠点型	総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築
	日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築
	多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓
	大衆文化の通時的・国際的研究による新しい日本像の創出
	アジアの多様な自然・文化複合に基づく未来可能社会の創発
	人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築
広領域連携型	日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築
	アジアにおける「エコヘルス」研究の新展開
	異分野融合による「総合書物学」の構築
ネットワーク型	地域研究推進事業：北東アジア、現代中東、南アジア
	日本関連在外資料調査研究・活用事業： ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用 バチカン図書館所蔵マリオ・マレガ収集文書調査研究・保存・活用 北米における日本関連在外資料調査研究・活用 プロジェクト間連携による研究成果活用

総合情報発信センターの情報・発信事業

研究資源高度連携事業
nihu INT　https://int.nihu.jp
人文機構内外の情報資源を統合検索する、人間文化研究データベース

情報発信事業
リポジトリ　https://www.nihu.jp/ja/publication/database#repo
国際的に研究成果を発信するため各機関でリポジトリを公開

研究者データベース　https://nrd.nihu.jp
人文機構所属の研究者情報を一元的に公開する研究者データベース運用

国際リンク集　https://guides2.nihu.jp/
日本文化研究情報への総合的アクセスを支援するためのリンク集を構築し運用

NIHU Magazine
https://www.nihu.jp/ja/publication/nihu_magazine
人文機構の最新の研究活動、成果を海外に発信するウェブマガジン

人文機構シンポジウム　https://www.nihu.jp/ja/event/symposium
人文機構に蓄積された人間文化にかかわる総合的研究資料や成果を広く社会に伝えるためのシンポジウムを開催

社会連携事業　https://www.nihu.jp/ja/event
産業界や外部機関と連携し、研究成果の社会還元を推進
・味の素食の文化センターと共催でシンポジウムを収録、配信
・大手町アカデミアと連携し、特別講座を開催
・人文知応援フォーラムとの共催事業として、人文知の普及・推進のために大会を開催

歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業

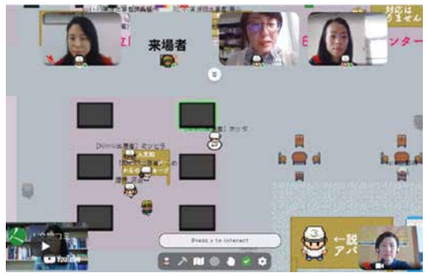
人文機構（主導機関:歴博）、東北大学、神戸大学を中核として、全国各地の主に大学を中心に活動する「資料ネット」との連携構築を通じて、資料調査とデータ記録化、広域的相互支援体制の確立、資料保存研究等の歴史文化資料保全事業を推進します。さらに資料を活用した研究や教育プログラム開発、国内外に向けた情報発信を通じて、地域社会における歴史文化の継承と創成を目指します。

博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業

人文機構の6機関と大学等研究機関とが連携し、博物館および展示を活用して人間文化に関する最先端研究を可視化し、多分野協業や社会との共創により研究を高度化して新領域創成を図る研究推進モデル「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化サイクル」を構築します。また本事業においては、大学等におけるカリキュラムの提案・実践を行うとともに、研究展示・映像・フォーラム等の企画・制作・運営を通じて「人文知コミュニケーター」を育成し、社会の課題と向き合う新たな知の構築を目指します。

人文知コミュニケーター

展示など多様な発信媒体、機会を活用して人間文化研究の成果をわかりやすく社会に伝えるとともに、研究に対する社会からの要望、反響を吸上げ、研究現場に還元するスキルを有した研究者として、「人文知コミュニケーター」の組織的育成事業を実施しています。研究者と社会を「つなぐ人」として、社会連携や共創を推進し、人文学の振興、発展に貢献します。



大学共同利用機関シンポジウム2020おいて、来場者と交流する人文知コミュニケーター

社会連携

地域社会や産業界などと連携し、人間文化研究成果の社会還元を推進しています。

●大手町アカデミア（一般社団法人 読売調査研究機構）において、人文機構の研究者を講師とする特別講座を開催：
オンライン無料特別講座 連続講座：持続可能な「自然・社会・人間」の関係性を考察する（1）「近世江戸は災害都市だった！ −連続複合災害について考える−」
（2020年12月16日開催）

●公益財団法人味の素食の文化センターとの共催シンポジウムを開催：
「食のサステナビリティ〜未来につなぐ食のあり方を考える〜」
（2020年11月24日オンライン公開）

●人文知応援フォーラム（http://jinbunchi.jp/）との共催事業として、人文知の普及・推進のために大会を開催：
第1回人文知応援大会「コロナという災厄に立ち向かう人文知」
（2021年2月27日開催）

公益財団法人味の素食の文化センターとの共催シンポジウム
（写真：人間文化研究機構公式YouTubeチャンネル
https://www.youtube.com/c/NihuJP）

大学院教育

国立大学法人総合研究大学院大学（総研大）の基盤機関として、文化科学研究科に4つの機関が各機関の特色を生かした5つの専攻（博士後期課程）を設置し、高い専門性と広い視野を持った研究者を養成しています。また、人文機構の6つの機関では、他大学の大学院生を受け入れてその研究を支援するなど、次世代を担う人材育成に貢献しています。

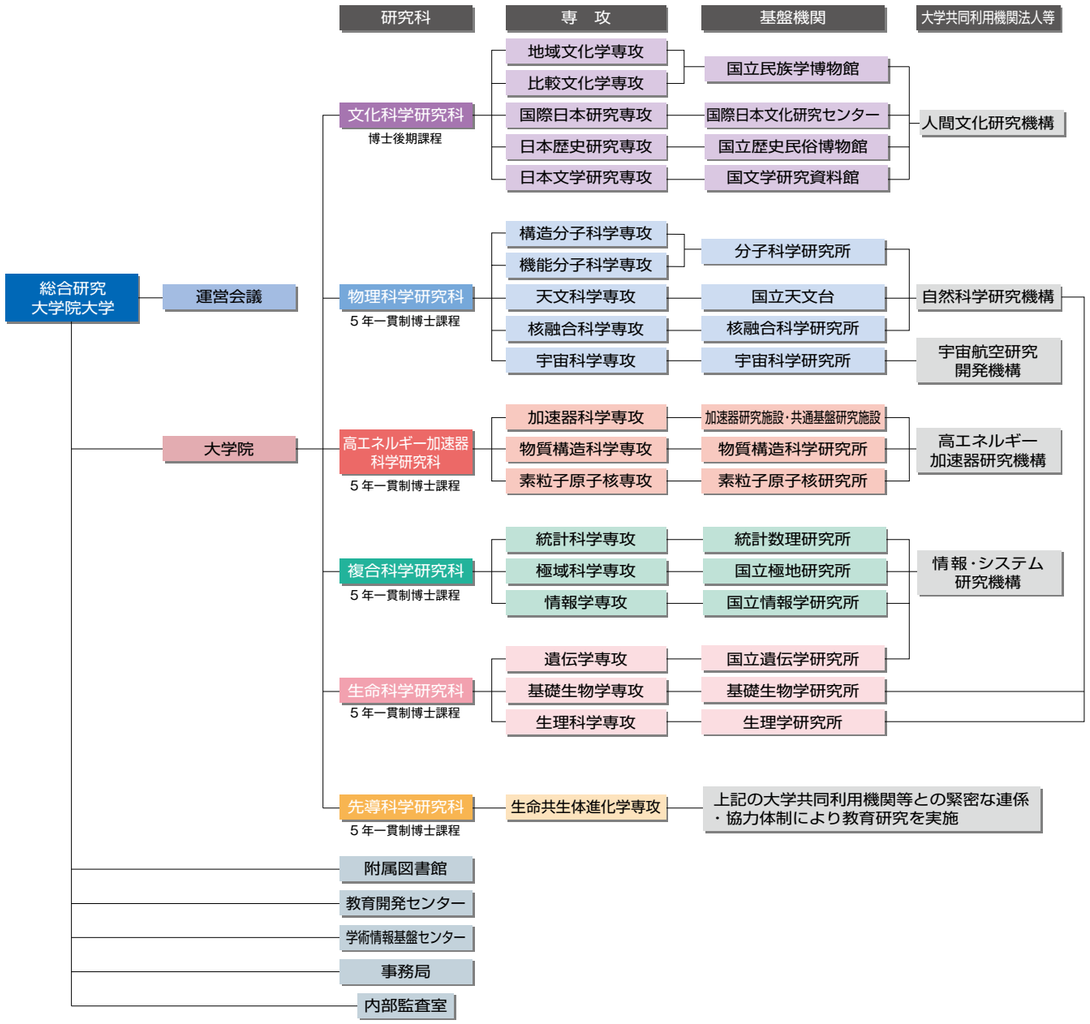
総研大文化科学研究科の各専攻

■地域文化学専攻（民博）
■比較文化学専攻（民博）
■国際日本研究専攻（日文研）
■日本歴史研究専攻（歴博）
■日本文学研究専攻（国文研）

総合研究大学院大学

総合研究大学院大学は、学部をもたない大学院大学です。18の大学共同利用機関などとの緊密な連係･協力のもと、大学共同利用機関などの開かれた機能を生かし、各研究科･専攻間、国の内外の大学･大学院との相互交流を深めることにより、幅広い視野や総合性、豊かな国際性をもった高度な能力を有する研究者の養成を目的としています。

組織図



SOKENDAI

大学院教育

本館には、総合研究大学院大学の文化科学研究科（地域文化学専攻･比較文化学専攻）博士後期課程が設置されています。両専攻は、全国の研究者などの共同研究推進に寄与している大学共同利用機関などの人材と研究環境を基盤として、教育･研究をおこなっています。

地域文化学専攻･比較文化学専攻の目的

教育研究は、個々の教員による授業や研究指導と、複数の教員が指導する共通のゼミナールからなっています。共通のゼミナールには、主に1年次生を対象とする「基礎演習（通称「1年生ゼミナール」）」と、2年次生以上を対象に、論文作成の指導を中心とする「演習」（通称「論文ゼミナール」）があります。
また、主として1年次生を対象として、文化人類学･民族学にかかわる共通科目（特論）が開講されています。
これは、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、大阪大学大学院人間科学研究科、神戸大学大学院国際文化学研究科および人間発達環境学研究科との、学生交流協定に基づく単位互換対象科目にもなっています。
学生はおおむね1年次においてフィールドワーク（現地調査）の準備をすすめ、2年次以降、指導教員の指導のもとに調査地でのフィールドワークをおこないます。そして調査終了後、指導教員による個別の指導や「論文ゼミナール」での指導を受けながら学位論文の完成をめざします。両専攻の教育研究目的は、次のとおりです。

I. 文化人類学･民族学の独創的な研究
II. 長期のフィールドワークでえられた資料にもとづく学位論文の作成
III. 広い視野をもった、人間性豊かな研究者の養成

地域文化学専攻･比較文化学専攻の学生

大学院入学定員および現員

令和3年4月1日現在

専攻	入学定員	現員 1年次	現員 2年次	現員 3年次	計	備考
地域文化学専攻	3	2	3	10	15	
比較文化学専攻	3	2	2	9	13	
計	6	4	5	19	28人	

年度別学位記授与者数

年度	地域文化学専攻 課程博士	地域文化学専攻 論文博士	比較文化学専攻 課程博士	比較文化学専攻 論文博士	計
平成3年度			1		1
平成4年度					
平成5年度			1	1	2
平成6年度	2		1		3
平成7年度	2		1		3
平成8年度		3			3
平成9年度	3		4		7
平成10年度	4	2			6
平成11年度					
平成12年度	2		2	1	5
平成13年度	1	1	2	1	5
平成14年度	1	1		2	4
平成15年度					
平成16年度	2	3			5
平成17年度	4	2		2	8
平成18年度	2		3		5
平成19年度	2	1	3		6
平成20年度	1		1		2
平成21年度		1	1	1	3
平成22年度	2		2	3	7
平成23年度	3		1	1	5
平成24年度	1	1	1	1	4
平成25年度			1	1	2
平成26年度	2	1	2		5
平成27年度	3	1			4
平成28年度	1	1	1		3
平成29年度	1		1		2
平成30年度	1				1
令和元年度	1		2		3
令和2年度	1	1	2		4
計	42	19	33	14	108人

論文博士号取得希望者の受入

日本学術振興会が実施する「論文博士号取得希望者に対する支援事業」の支援を受ける者（論博研究者）が、大学院の受入研究科において研究指導にあたる教員の下、研究をおこないます。

利用案内

開館時間

開館時間　10：00 ～ 17：00　（入館は16：30まで）
休館日　水曜日　（水曜日が祝日の場合は、翌日が休館）
　　年末年始　（12月28日～1月4日）

観覧料

区分	個人	団体（20名以上）及び割引※
一般	580円	490円
大学生	250円	200円
高校生以下	無料	

特別展はその都度別に定めます

障がい者手帳をお持ちの方は、付添者1名とともに無料で観覧できます。
日本文化人類学会会員及びICOM（国際博物館会議）会員・日本博物館協会会員の方は、無料で観覧できます。（要会員証）

※以下の方々は、割引料金で観覧できます。
　20名以上の団体、大学等*の授業でご利用の方、
　3ヶ月以内のリピーター、満65歳以上の方（要証明書等）
　*大学等は、短大、大学、大学院、専修学校の専門課程
※なお、短大生・大学生・大学院生の方は、教員が同行し、授業で展示場を利用する場合は、
　事前にお申し込みいただくと、観覧料が無料になります。詳しくはお問い合わせください。
　（自然文化園各ゲートで本館の観覧券をお買い求めの場合は、本館窓口で差額を返却いたします。）

お問い合わせ先　Tel.06-6876-2151（代表）　Fax.06-6875-0401

ホームページ　https://www.minpaku.ac.jp/

案内・サービス

■国立民族学博物館友の会　お問い合わせ先：Tel.06-6877-8893（平日のみ 9:00～17:00 千里文化財団）、 minpakutomo@senri-f.or.jp
「国立民族学博物館友の会」は、国立民族学博物館の活動を支援し、積極的に活用するためにつくられました。
本館研究者の協力のもとに、『季刊民族学』を発行し、多様な文化に直接ふれる「研修の旅」や「体験セミナー」、各種講演会などを企画し実施しています。

■ミュージアム・ショップ　（営業時間 10:00～17:00）　お問い合わせ先：Tel.06-6876-3112
世界各国の工芸品や文化人類学・民族学に関する書籍などを購入することができます。

■レストラン　（営業時間 11:00～16:30　ラストオーダー16:00）　お問い合わせ先：Tel.06-6310-0810
ハンバーグやオムレツなどのお食事メニューや手軽な軽食・デザートを提供しています。
座席数は110席あり、少人数から団体まで予約いただけます。また、団体のお客様については弁当の予約も可能です。

友の会カウンター

ミュージアム・ショップ

レストラン

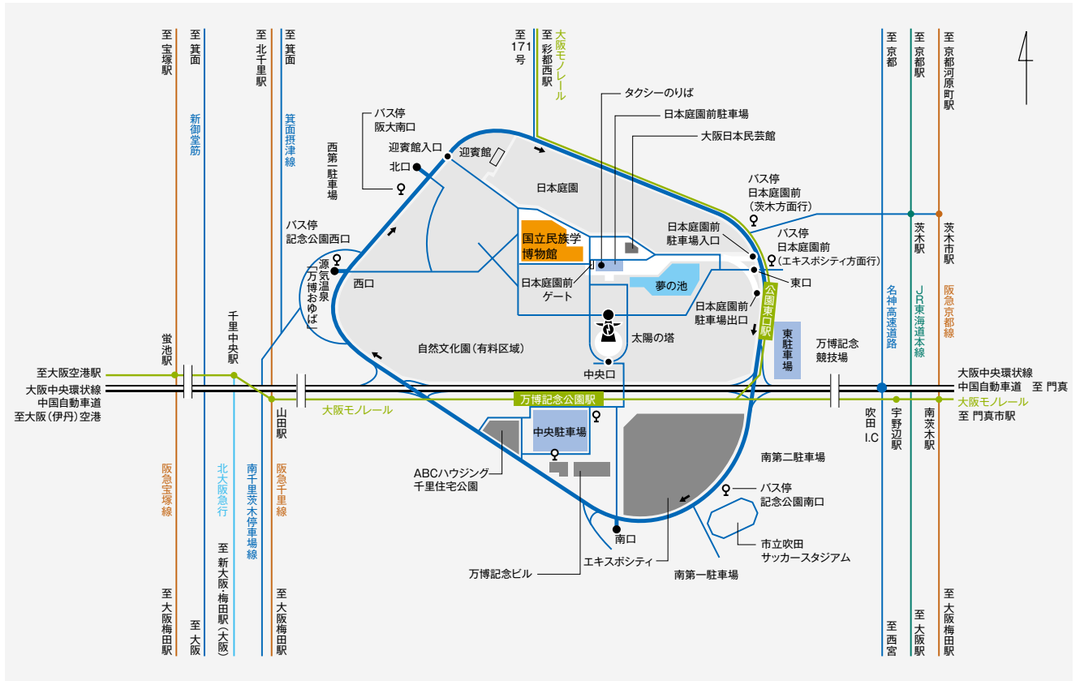
友の会主催「海外民族学研修の旅」（令和元年度）

友の会刊行物
『季刊民族学』

交通のご案内

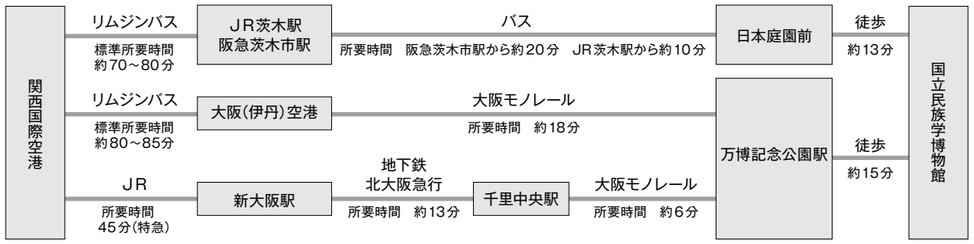
● 大阪・万博記念公園内
○ 大阪モノレール …「万博記念公園駅」または「公園東口駅」下車徒歩約15分
○ バス…阪急茨木市駅・JR茨木駅から「日本庭園前」下車徒歩約13分
○ 乗用車…万博記念公園「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分
○ タクシー…万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。
※ 万博記念公園各ゲートで、当館の観覧券をお買い求めください。同園内を無料で通行できます。
※ 万博記念公園をご利用になる場合は、同園入園料が必要です。

周辺図



主要ターミナルからのアクセス

当館までの交通手段はいくつか方法がありますが、主要ターミナルからのアクセスには、次の方法が便利です。



ISSN 1344-5413　2021.8 発行

要覧
2021

国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1